

# I - 2 飛鳥地域等の調査

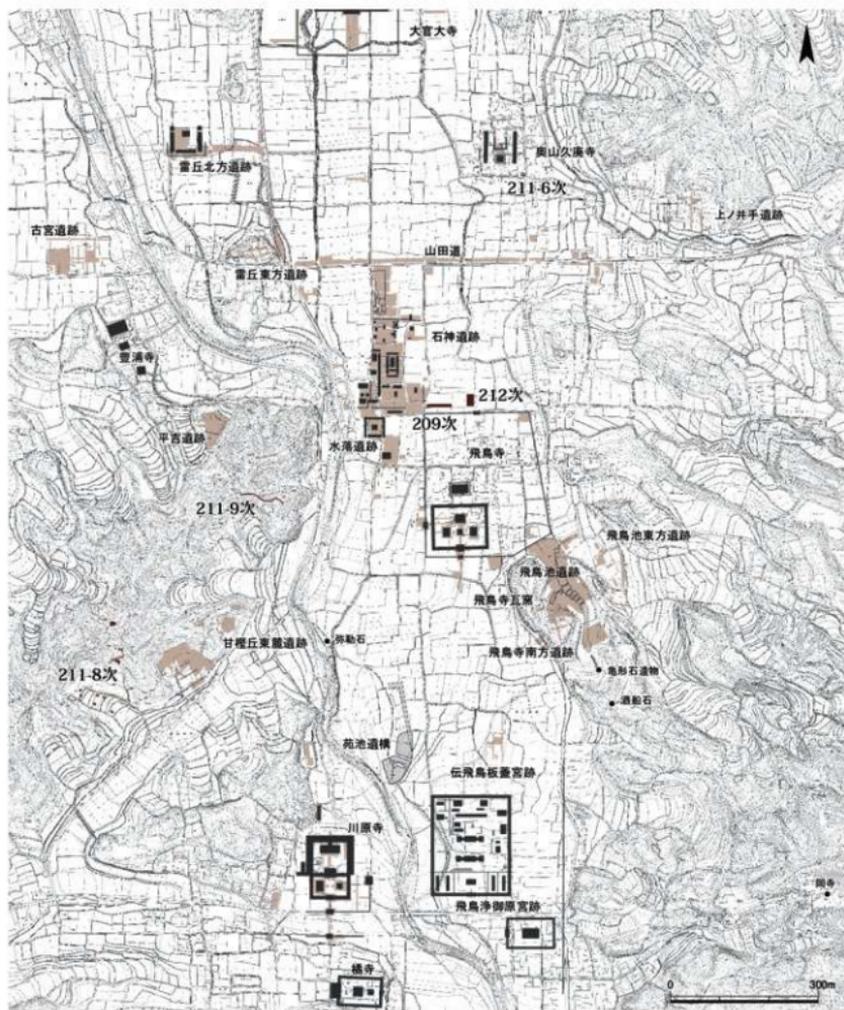


図 26 飛鳥地域発掘調査位置図 1 : 1000

## 1 飛鳥地域等の地理的環境

都城発掘調査部の飛鳥藤原地区が発掘調査をおこなう地域のうち飛鳥地域は、奈良県北部に位置する奈良盆地のなかで、およそ、その東南部にあたる明日香村に立地している。ただし、飛鳥地域の語は、その概念に大小あり、明日香村に接する桜井市や橿原市、高取町の一部を含む場合もある。一般的に、飛鳥地域と言えば、明日香村の北部、奈良盆地が東南部でやや南に張り出す、飛鳥川の東岸域を指す。

南高北低の地勢で、丘陵部と低地部からなり、低地部の標高は100～120mである。丘陵部には森林が広がり、集落が散在するほか、低地部には水田が営まれている。飛鳥地域は、古代を中心とする歴史的な文化遺産が多数存在し、史跡や特別史跡に指定されている遺跡や古墳のほか、宮内庁管轄の古墳も少なくない。

現在の主要な産業は農業と観光である。低地部の水田のほか、丘陵部における果樹等の栽培で、とりわけ飛鳥川上流域では丘陵部においても狭い平地を造成した農村景観が形成され、観光にも寄与している。なかでも明日香村稲淵・栢森・入谷に展開する農業・集落の景観は、奥飛鳥の文化的景観として、2011年に国の重要文化的景観の指定を受けた。また、18世紀後期以降、古墳や寺院跡は名所として観光の要素ともなってきた。

## 2 飛鳥地域等の歴史的環境

飛鳥地域は6世紀末に飛鳥寺が、狭い盆地の中央部に造営されて以降、7世紀には推古天皇の豊浦宮をはじめ、天武天皇の飛鳥浄御原宮までいくつもの宮殿が営まれ、また橘寺、川原寺などの寺院が造営されるなど、7世紀の政治・文化の中心地であった。また周辺の丘陵部には高松塚古墳やキトラ古墳などの装飾古墳も存在し、いわゆる終末期古墳も多数築かれた。

西暦694年に遷都された藤原京は、東南部の一部が現明日香村域に含まれている。大官大寺は藤原京内に創建された寺院だが、飛鳥地域の寺院として考えることもあり、このほかにも藤原京内に位置するものの飛鳥地域との結びつきが強い遺跡もある。

710年の平城京遷都にともない、いくつもの寺院は平城京に移転した。その後、飛鳥地域の低地部は、藤原地



図27 飛鳥地域の中心部を南からみる

域とともに都市的な開発はおこなわれず、大勢としては耕作地として保たれてきた。1972年の高松塚古墳の鮮彩色壁画の発見は、飛鳥地域に飛鳥ブームあるいは考古学ブームを巻き起こし、多くの人がこの地域を訪れることになった。

一方、戦後の高度経済成長による大規模開発への反省から、1966年には、「古都における歴史的風土の保存に関する特別措置法」（いわゆる古都保存法）が施行された。当初は明日香村の一部がその対象地域であったが、1980年には「明日香村における歴史的風土の保存及び生活環境の整備等に関する特別措置法」（いわゆる明日香法）が施行され、村全域に歴史的風土の保存と村民生活の調和を図るための措置が講じられた。また自然景観を保全するため、奈良県は1970年にこれらの地域を「風致地区」として指定し、奈良県風致地区条例を定めた。2014年以降は、市町村への権限委譲を受け、明日香村が定める風致地区条例により、建築物などの形状や色彩の規制がおこなわれている。

2007年には「飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群」が世界遺産暫定リストに登録され、2023年現在、世界遺産への本登録を目指している。構成資産は宮殿と官衙、仏教寺院、墳墓（古墳）の計20資産で、このうち飛鳥地域等からは、飛鳥宮跡、飛鳥京跡苑池、飛鳥水落遺跡、酒船石遺跡、飛鳥寺跡、橘寺跡、川原寺跡、楡原寺跡、大官大寺跡、石舞台古墳、菖蒲池古墳、牽牛子塚古墳、天武持統天皇陵古墳、中尾山古墳、キトラ古墳、高松塚古墳の16資産が挙げられている。（福岡和久）

# 石神遺跡東方の調査

## 一第209・212次

### 1 調査の経過

奈良県明日香村に所在する石神遺跡は、明治期に須弥山石・石人像が発見された地として知られており、奈文研は昭和56年(1981)以来、発掘調査を重ねてきた。その結果、7世紀代を中心に、建物、石敷広場、井戸、石組溝などを配した施設を確認し、とくに須弥山石・石人像と石組溝や石敷遺構、新羅土器や東北系黒色土器などの出土から、『日本書紀』にみられる斉明朝の饗宴施設としての性格が指摘されてきた。近年では都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)考古第二研究室が進める再整理によって、出土土器に関する新知見が蓄積されている<sup>1)</sup>。さらには、石神遺跡一帯は小治田の地に含まれるとみる理解もあり<sup>2)</sup>、推古朝小墾田宮に関連した遺構の検出を期待する機運も高まりつつある。

こうした近年の調査・研究動向を踏まえ、都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)では、2021年度より石神遺跡とその周辺において継続的に調査をおこなっていくこととした。飛鳥藤原第209・212次調査では、石神遺跡東方における土地利用の実態解明を目的とした。

### 2 遺跡の位置と環境

石神遺跡は飛鳥寺の西北隅に接し、水落遺跡に北接する。前述のように明治期に須弥山石・石人像が発見されて以降、石田茂作(1936年)や奈良県による調査(1965年)を経て、奈文研による調査が進められてきた。その結果、遺跡は大規模な建て替えをおこないながら時期とともにその性格を変え、大きく、A期の斉明朝の饗宴施設、B期の天武朝の宮外官衙施設、C期の藤原宮期の建物群という変遷で理解されている(『紀要2009』)。ただ、前述のように、出土土器に関する新知見から、これまでの石神遺跡像に対して再考を促す検討成果も示されつつある。

石神遺跡A期の主要遺構の範囲については、石神第1・3次調査で南限施設とみられる東西厩 SA600を(『藤原概報12』・「同14」)、第13・14次調査で北限施設の東西厩 SA3893・3895と石組東西溝 SD3950を確認している(『紀要2001』・「同202」)。そして第21次調査で東限施設の掘立柱建物 SB4341・4340とそれに取り付く南北厩

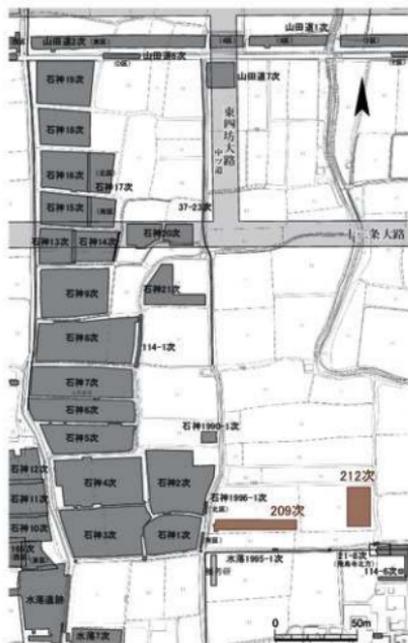


図28 第209・212次調査区位置図 1:3000

SA4327・4326を検出した(『紀要2009』)。このように遺跡の範囲がおおよそ推定できるようになったいっぽうで、第1・2次調査では調査区中央を南北に貫流したのち第2次調査区北端で東折し、さらに調査区の東外へ延びる石組東西溝 SD335を検出している(『藤原概報13』)。この石組溝の存在は、第1・2次調査区より東方にも重要施設が存在する可能性を示唆する。

くわえて、1987年の明日香村教育委員会による雷丘東方遺跡の調査を契機とし、小墾田宮の所在地を、飛鳥川西岸の古宮土壇一帯ではなく、雷丘東方を含む東岸一帯に想定する見解が主体を占めるようになった。さらには整地土から多量に出土した鉄線類を小墾田兵庫と関連付け、飛鳥寺北面に接するこの地一帯を小墾田宮に含ませる考えもある。

なお、飛鳥寺北面大垣では、飛鳥寺北方の調査(飛鳥藤原第21-8次)で北外堀 SD501がとぎれることが確認されており、ここに北面大垣北門が開く可能性が高い(『藤原概報8』)。飛鳥寺に北接する石神遺跡東方の地は、石神遺跡

と飛鳥寺との関係性を知る上でも重要な場所といえる。

以上から、当該地における建物等の重要施設の展開を含めた土地利用の実態解明を目的とした。

### 3 第209次調査

**調査の概要** 調査区は、石神第1次調査区の東に南北6m、東西50mを設定した。検出した東西堀の西への展開と東西溝の南北幅の追究を目的として調査区西辺中央および西南隅を拡張し、最終的な調査面積は301㎡である。

**作業の経過** 調査は2022年1月6日から3月17日にかけて実施した。調査に先立ち、2021年12月20日に調査区の設定とレベル移動、12月27日に調査前の現地の写真撮影をおこなっている。1月6日より環境整備に着手し、同日から1月13日まで重機で表土と耕作土を除去。順次人力に切り替え遺構検出を進めた。2月15日に調査区全景の写真およびSIMによる撮影、16日から遺構実測を進め、21日より断削等による補足調査を実施した。また、調査区西端および西南隅に拡張区を設け調査を進めた。3月3日に東西堀全景および断削調査の細部写真を撮影、実測作業を随時おこない、3月7日より調査終了部分に対する保護用の砂置きと重機による埋め戻しを開始。3月17日に埋め戻しを完了し、現場の撤収をおこなって発掘作業を終了した。

出土遺物は、取りあげ時に土器、瓦、金属製品等の素材ごとに仕分けて搬入し、調査と併行して洗浄、注記、接合、実測等を実施した。また、本調査では、内部に土が充填した状態の土器が正位置で出土したり、整地土や一部の土坑内より多量の炭、鉄屑が比較的多く出土したため、適宜土ごと持ち帰り、洗浄、選別作業を併行して進め、微細遺物の確認をおこなった。

**調査の方法** 調査では、GNSS測量機を用いたネットワーク型RTK法で調査区内に基準線を設定し、縮尺1/20を基本に平面図を作成した。標高は飛鳥藤原No.31(X=-168.549.309, Y=-16.677.042, H=101.030m)からオートレベルで直接水準測量をおこなった。

掘削は表土・床土を重機で除去し、以後は人力で掘り下げと遺構検出をおこなったほか、土層観察用に幅1mの南北畦を2カ所設けて調査を進めた。遺構面の記録にあたっては、通常の写真撮影に加えてSIMによる三次元

モデルを作成した。

**基本層序** 基本層序は、上から①耕作土および床土(厚さ30~40cm)、②灰褐色土(遺物包含層:厚さ5~15cm)、④黄褐色砂質土・シルト層(基盤層)となり、②層と④層の間には、部分的に③灰黄褐色や、土器細片や炭粒を多く含む炭褐色などの整地土(厚さ5~15cm)がみられるほか、調査区南半では東西溝SD4610の堆積層(褐色砂礫層、細砂および粗砂層:厚さ最大12m)が認められた。遺構検出面は③層・④層上面で、標高は101.8~102.0mである。②層の堆積がみられない地点では、床土直下が遺構検出面となる。

**検出遺構** 本調査区では、弥生時代後期、古墳時代中・後期、7世紀代の遺構を検出した。主な検出遺構は、東西堀1条、東西溝1条、掘立柱建物1棟、竪穴建物4棟、斜溝1条、土坑2基などである(図29, PL13-1)。前述のとおり、遺構は炭褐色土の整地土や黄褐色砂質土、黄褐色シルト層から掘り込まれているが、竪穴建物などは床土直下で検出しており、後世の開墾の影響などにより上層が削平された様子がうかがえた。

後述するように、今回検出した7世紀代の遺構は、既往調査区検出遺構との位置関係および出土土器の検討により、飛鳥浄御原期に属することがあきらかとなっている<sup>3)</sup>。以下では、飛鳥浄御原期とそれ以外の時期の遺構に分けて記述する。

#### (1) 飛鳥浄御原期の遺構

**東西堀 SA311** 調査区中央を縦断する東西掘立柱場。柱穴を計24基検出した(PL13-2・3)。掘方は70~80cm、深さ45~70cm(図34)、柱間寸法は約2.1m。石神第1・3次調査区で検出したSA311の東延長部分にあたり、第3次調査区からの総延長は85m以上となる。門などの施設は確認されず、調査区の東外へ延びる。多くの柱穴は掘方南端を、後述する東西溝SD4610によって壊される。

**東西溝 SD4610** 調査区南半で検出した、西流する東西溝(PL14-1)。南肩は調査区外のため未検出で、溝幅は3.3m以上となる。溝の断面は、東西堀SA311の柱穴掘方南肩から南へ約1mで大きく傾斜を変え、溝の下部では断面箱形を呈する(図31~34)。溝上部は土砂が遺構面を大きくえぐっており、その北肩はSA311の柱穴南端を壊すが、本来はSA311から約1m南に溝北肩が位置していたとみられる。溝底面は、東壁で標高101.30m、西壁

で101.00mで、現状の地形同様、西へ向かって傾斜をもつ。埋土は、上層の埋土土(灰黄褐色～褐色砂質土)および砂礫層(灰褐色～暗褐色砂礫土・粗砂)と、下層の水性堆積層(灰褐色～灰黄色細砂・粘砂)に大別される。溝底面の傾斜により、下層の水性堆積層は西壁では10cm前後と薄く、反対に上層の砂礫堆積が目立つ。砂礫層下部には粗砂の堆積も認められ、開口時には一定量の水が継続して流れていたことがわかる。溝の北側には、溝開口時に形成されたと考えられる灰色砂土が帯状に堆積する。

SD4610は、調査区南半を東西に直線的に延びる経路や、東西堀SA311との位置関係、埋土の状況などから、その下層部分が石神第1・3次調査で検出したSD347の東延長部分と考えられる。くわえて、溝の上層部分は第1次調査区では前述のSD347と同一経路上にあり、第3次調査区と水落道跡北方の第165次調査区南半を東西に横断する自然流路SD310にあたとみられ、瓦が集中して出土するほか、径20～30cmの礫の堆積が目立つ。

## (2) 古墳時代の遺構

堅穴建物4棟と土坑・斜行溝を検出した。堅穴建物はいずれも造営方位は北で西に振れ、第1次調査区で検出した堅穴建物SB315と軸を同じくする。いずれも上面検出にとどめた。

**堅穴建物 SI4612** 調査区中央で検出した、北で西に振る堅穴建物(PL15-1)。規模は東西4.0m、南北2.9m、深さ31cmほどが遺存する。南半は、東西溝SD4610、東西堀SA311、東壁と北壁中央は土坑SK4618、SK4621により壊される。また、東北隅は土坑SK4619と重複する(図32)。西南部壁寄りに、約50cm四方の範囲で炭の堆積がみられ、東南部壁隅からも長さ25～30cm前後の硬化面を2ヵ所検出した。

**堅穴建物 SI4613** 調査区中央で検出した、北で西に振る堅穴建物(PL15-1)。東西3.8m、南北3.7mの規模で、中央東壁寄りで10～30cmの礫の集中がみられた。この礫の周囲からは焼土片と炭粒を多く検出している。東南隅からは、正置状態で土師器甕(図39-5)が出土した。西南端は東西堀SA311により壊される。

**堅穴建物 SI4614** 調査区中央北半で検出した堅穴建物。北で西に振る。東西2.5m、調査区北外に延びるため南北規模は不明。東壁および南半は、東西堀SA311掘込面の整地土が覆うことから、部分的な検出にとどめた。

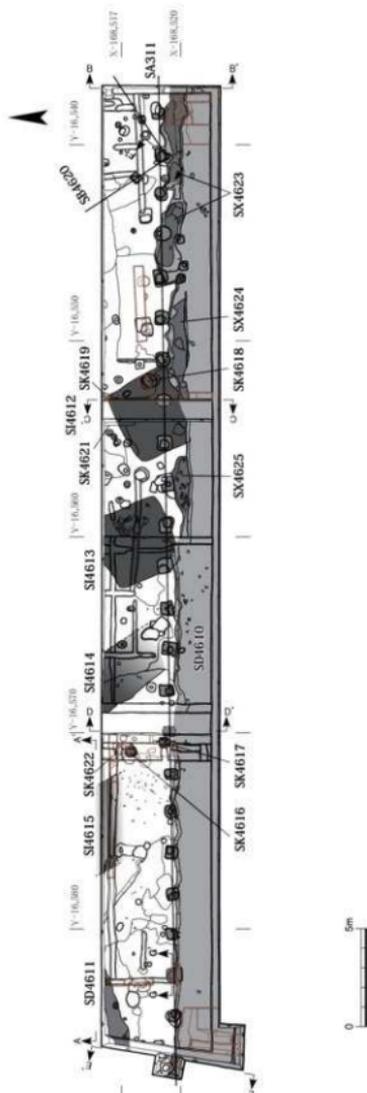


図29 第206次調査区遺構図 1:250



図30 第209次調査区西半北壁土層図 1:100

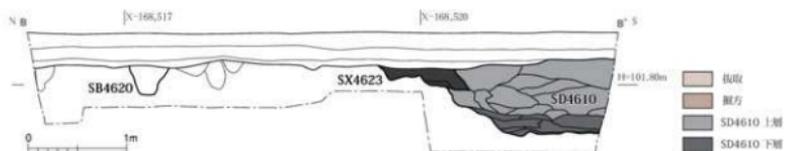


図31 第209次調査区東壁土層図 1:50

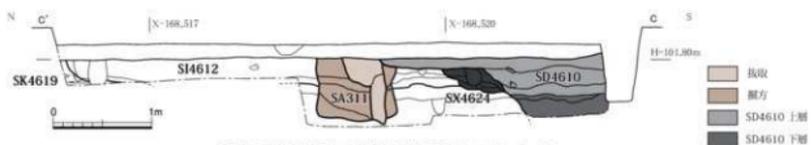


図32 第209次調査区東半柱東壁土層図(南北取組) 1:50

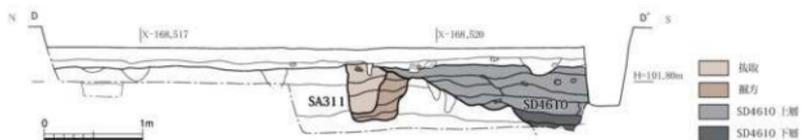


図33 第209次調査区西半柱西壁土層図 1:50

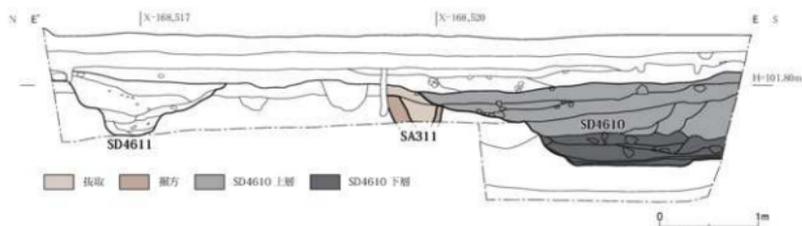


図34 第209次調査区西壁土層図(南北取組) 1:50

**竪穴建物 SI4615** 調査区西寄りの北端で検出した竪穴建物。東西規模は4.5m。整地土下で部分的に検出した。  
**土坑 SK4618** 調査区東部で検出した土坑(図36、PL15-3)。直径0.5～0.6m、深さ0.5m。前述した竪穴

建物 SI4612 を壊す。断面で掘方と採取を認識し、柱穴の可能性を考えたが、本遺構と組む柱穴は確認できなかった。埋土から、ほぼ完形の布留型甕(図39-6)が口縁部を斜めにして出土した。

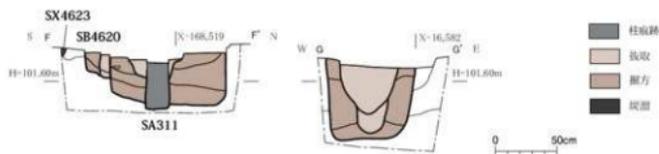


図35 東西線 SA311 柱穴断面図 1 : 40

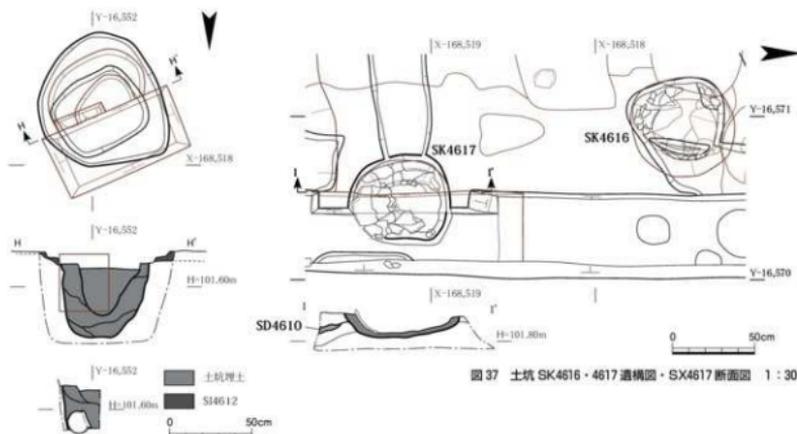


図36 土坑 SK4618 遺構図・断面図 1 : 30

**斜行溝 SD4611** 調査区西端で検出した溝で、調査区西北端を南西-北東方向に延びる (PL15-2)。幅 1.7m、調査区西壁で深さ 0.65 m を測り (図 34)、埋土上層からは土師器直口壺 (図 39-7) や甕胴部片が出土した。

### (3) その他の時代の遺構

**掘立柱建物 SB4620** 調査区東端で検出した東西棟建物。3 基の柱穴を検出し、うち 1 基は調査区東壁にかかる (図 31)。柱穴は直径 0.35 ~ 0.5 m、深さ 0.2 ~ 0.3 m。造営方位の軸は東で北に振れる。西南隅の 1 基は東西塀 SA311 の柱穴と重複し、これより古い。

**土坑 SK4619** 調査区東半の南北畦沿いで検出した土坑。長辺 0.8 m 以上の楕円形土坑とみられる。竪穴建物 SI4162 と重複し、これより古い。黒褐色の埋土から弥生時代後期の甕 (図 39-1・2) と高杯脚部 (図 39-3) が出土した。

**土坑 SK4616** 調査区西半の南北畦沿いで検出した土坑 (図 37, PL15-4)。直径 0.6 m、深さ約 0.2 m。内部より土器 (図 39-4) が正置状態で出土したが、上部は失われ

ていた。

**土坑 SK4617** SK4616 から約 1.5 m 南東の南北畦西側で検出した土坑 (図 37, PL15-4・5)。SK4616 同様、内部より土器が正置状態で出土した。直径 0.5 ~ 0.6 m、深さ約 0.2 m。掘方は土器とほぼ同規模で、東西溝 SD4610 上層埋土を一部壊す。土器は胴部のみが遺存し、底部および口縁部ともに欠失するが、胴部形態、調整や胎土の点から、SK4616 出土品と同様の形態であったとみられる。ともに性格不明であるが、両者の位置関係やその出土状況から、一連の遺構である可能性が高い。

**土坑 SK4621** 調査区東半の南北畦の西壁に接して検出した土坑。南北 1.5 m、東西約 0.2 m の範囲で検出し、竪穴建物 SI4612 を壊す。黒褐色の埋土内部からは土師器杯蓋や丸瓦細片が出土した。

**土坑 SK4622** 調査区中央、西寄りで検出した平面楕円形の土坑 (PL14-5)。直径 0.5 ~ 0.7 m、深さ約 0.2 m。SA311 掘込面である③層を掘り込む。暗褐色砂質土の埋土からは、土師器片や平瓦のほか、輪羽口片、鉄滓、

表7 第208次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			その他		
型式	種	点数	型式	種	点数	種類		点数
素弁	1	1	橘唐草(近現代)	1	ヘラ書き平瓦			2
復弁	1	1			磚			1
?	1	1			瓦類円盤・小玉			3
軒丸瓦計			軒平瓦計			その他計		
	丸瓦		平瓦		棟梁石			
重量	14.77kg		43.50kg		0.25kg			
点数	133		687		1			

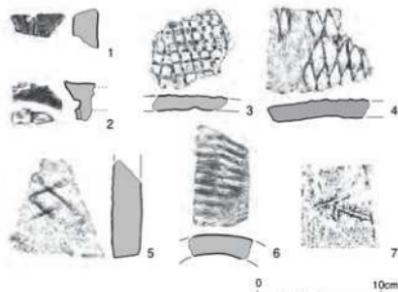


図38 第209次調査出土瓦 1:4 (1-6), 1:2 (7)

多量の炭粒片が出土した。鉄器小片や鍛造剥片も出土しており、鍛治にともなう廃棄土とみられる。

炭溜 SX4623～4625 調査区中央から東の南半で検出した炭溜。東西溝SD4610北側に張り付くように堆積する。周囲からは籾羽口や鉄滓の出土が目立つ。

(松永悦枝/文化庁)

#### (4) 出土遺物

**瓦磚類** 出土瓦磚類は表7のとおりである。東西溝SD4610上層からの出土が全体の5割弱であり、これに続く遺物包含層の灰褐色土が全体の2割を占める。それ以外は、概ね床土や耕作溝から出土した。

軒丸瓦3点は、いずれも細片で型式は特定できない。ここでは、文様の情報がある程度得られた2点を報告する(図38-1・2)。1は素弁蓮華文。弁は割り付けから10弁以上とみられ、蓮弁・間弁ともに平板である。飛鳥寺創建期の所産。東西溝SD4610上層出土。2は復弁蓮華文。飛鳥寺XIV型式に似るが、弁端の立ち上がりが高い。丸瓦部先端は未加工とみられる。7世紀後半の所産であろう。耕作溝出土。

丸・平瓦は、大半が赤褐色ないし褐色で白色の砂粒を

含み、軟質である。ナデ調整により仕上げるものが多いが、タタキ痕が残る個体も一定数ある。図38の3～5は平瓦、6は丸瓦。3は格子タタキ、4は瓦の長軸方向に対し長い斜格子タタキ、5は短い斜格子タタキ、6は平行タタキ。格子タタキのちハケ目調整する個体や、縄タタキ痕をもつ個体もある。このほか、模骨が玉緑部に達しない丸瓦(A手法)や、凹面にヘラ書き(□(大々))<sup>4)</sup>のある平瓦(図38-7、PL16-3)が出土した。

飛鳥寺およびその周辺から上記と類似する瓦が出土していることや、本調査区が飛鳥寺北限に近接していること、SD4610上層から出土した割合が高いことなどから、本調査出土瓦には飛鳥寺から流入した瓦が多く含まれているとみられる。

(岩永 玲・田中龍一)

**土器** 整理用木箱19箱分が出土した。縄文土器の小片、弥生時代前期から古墳時代初頭の土器、古墳時代中・後期の土師器・須恵器、飛鳥時代から平安時代の土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器などである(PL16-1)。

#### SD4611・SI4613・SK4616・4618・4619出土土器

図39-1～3は土坑SK4619出土。1・2は弥生後期型(第V様式)甕。底部は欠損する。分割成形で外面はタタキ、内面はヨコハケおよび左上がりのハケ目により調整する。口縁部は「く」字形に屈曲する。3は高杯脚部。脚部上部の三方に円形の透孔をもつ。外面を縦方向のヘラミガキ、内面を一定方向のハケ目で調整する。庄内式期前半に類似がみえる。4は土坑SK4616から出土した平底の粗製大壺型。口頸部は欠損する。胴部上半が強く張る。外面には、横方向および縦方向の板ナデあるいはハケ目による調整が施される。内面は摩耗が激しい。5は堅穴建物SI4613から出土した布留型甕。上半部のみが残る。口縁部はわずかに肥厚し内傾する。口縁部から頸部内外面はヨコナデ、胴部外面には横方向および左上がりのハケ目調整を施し、内面は粘土紐積み上げ痕と指頭痕が顕著にみられる。布留4式期頃か。6は土坑SK4618から出土したほぼ完形の布留型甕。やや幅広い球形を呈す。口縁部は内彎気味に開き、端部は内傾面をもつ。口縁部から頸部内外面はヨコナデ、胴部外面をヨコハケとタテハケで調整し、胴部内面には左上がりのナデを施し、底面には押圧痕を残す。布留4式期頃。7は斜行溝SD4611から出土したほぼ完形の直口壺。口頸部下半の内側が顕著に肥厚し、肩部が強く張る。古墳時代

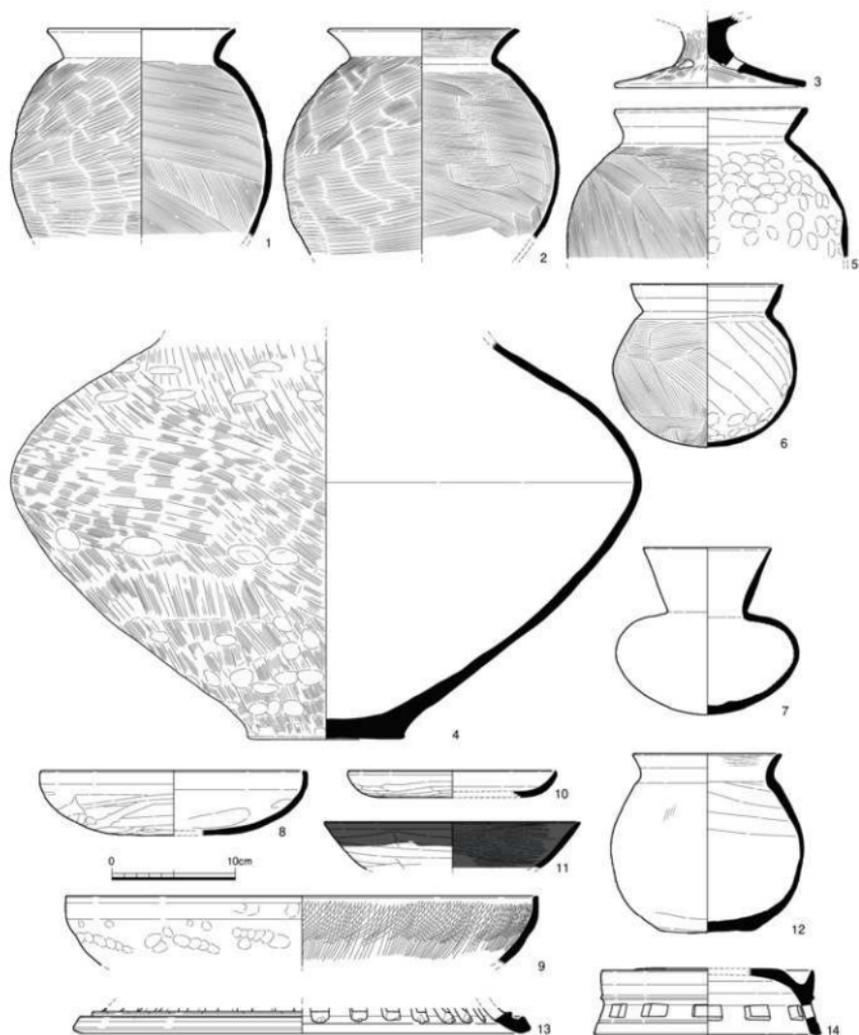


図39 第209次調査遺構出土土器 1:4

中期頃に比定できる。

**東西溝 SD4610 出土土器** 整理用木箱2箱分が出土したが、そのほとんどが小片であった。

埋土下層（灰黒色砂）および北屑の堆積土（灰色砂土）からは、7世紀後半から藤原宮期に位置づけられる土器

が出土した。土師器は、杯C、甕、須恵器は、杯A、杯H、かえりをもつ杯蓋、壺、甕などを含む。図39-8は灰黒色砂から出土した。杯Cに分類したが、内面に放射状暗文はみられず、円形暗文のみが部分的に施される。底部外面はやや不規則な横方向のヘラケズリと部分的なへ

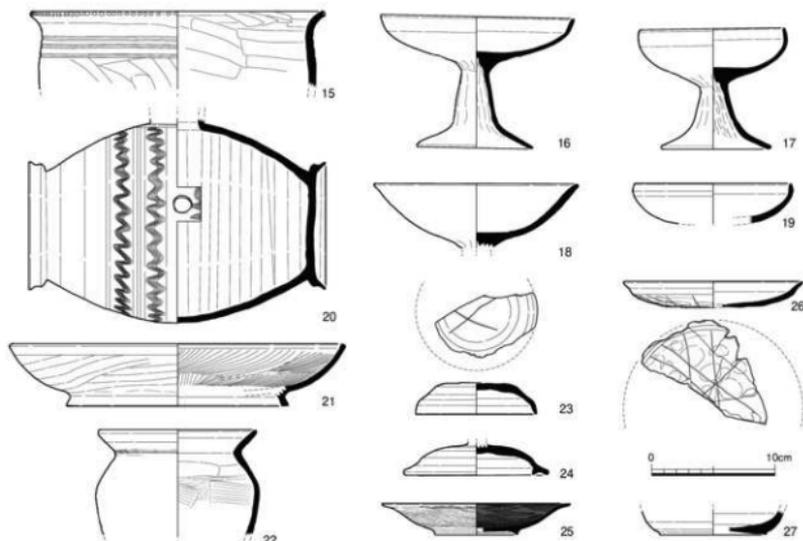


図40 第209次調査遺物包含層出土土器 1:4

ラミガキで仕上げる。復元口径218mm。口縁部残存率8.3%。径高指数24.3。9は灰色砂土から出土した大型鉢。内面には二段放射射文、外面上半には横ナデが施され、下半には指頭痕が残る。口縁部残存率10.6%。

埋土上層（灰褐色砂）は、藤原宮期から平安時代前期頃の土器が主体を占める。土師器は、杯A、杯B、杯蓋、杯C、杯G、杯H、碗、皿、高杯、甕、須恵器は、杯A、杯B、かえりをもたない杯蓋、杯G蓋、杯H、杯H蓋、皿B、壺、平瓶、甕、團足円面甕など、また、黒色土器A類の碗が含まれる。10は小型の土師器皿。底部外面に横方向のヘラケズリを施す。9世紀頃の所産か。復元口径170mm。口縁部残存率7.5%。11は黒色土器A類の碗。内面は横方向のヘラミガキで仕上げ、外面には横方向のヘラケズリを施す。9世紀後半頃の畿内系I類に比定できるか<sup>3)</sup>。復元口径210mm。口縁部残存率8.1%。12は平底の小型甕。器面の摩耗が激しいが、口縁部および胴部外面はハケ目による調整、胴部内面は左上がりのヘラナデにより調整されたようである。13・14は團足円面甕。13はおそらく大型の團足円面甕aで、縦長長方形の透孔の一部をとまう脚裾部のみが残る。脚裾部外端残存率15%。14は中型の團足円面甕bで、脚部に横長長方形の透孔が11ヶ所あったと思われる。脚裾部外端残存率9.2%。

②層（遺物包含層）出土土器 整理用木箱4箱分の土器が出土した（図40）。

弥生時代の土器は、甕、加飾壺、長頸壺、直口壺、二重口縁壺、鉢、有孔鉢、高杯などのほか、貼付突帯文をもつ土器もみられる。いずれも小片である。15は弥生時代前期の甕。如意形口縁を呈し、口縁端部に刻目文、胴部上位外面には宛描沈線による直線文が3条施される。内外ともにヘラナデ調整。

古墳時代の土器は、土師器が甕（布留型）、高杯、杯、製塩土器など、須恵器が杯H、杯H蓋、甕、甕などからなる。16～18は古墳時代中・後期の土師器高杯。円板充填法による製作とみられ、脚部内面には棒状の刺突痕が残る。16・17は口縁部が内罅する。いずれも口縁部を横方向のナデにより調整し、脚柱部外面には縦方向のヘラナデを施す。脚柱部内面には絞り痕が残る。18は外反口縁をもち、器面は摩耗が目立つ。19は古墳時代中・後期の土師器杯。口縁部は内罅し、口縁部外面には1条の沈線をめぐらす。全体を横方向のナデで調整し、口縁部が大きく重む。20は須恵器の樽形甕。体部の約半分が遺存し、復元的に図示した。口頸部は完全に欠損する。体部は中央が影らみ、中央やや上寄りに直径14mmほどの円孔が穿たれる。胴部外面にはロクロナデ後に、円孔を中

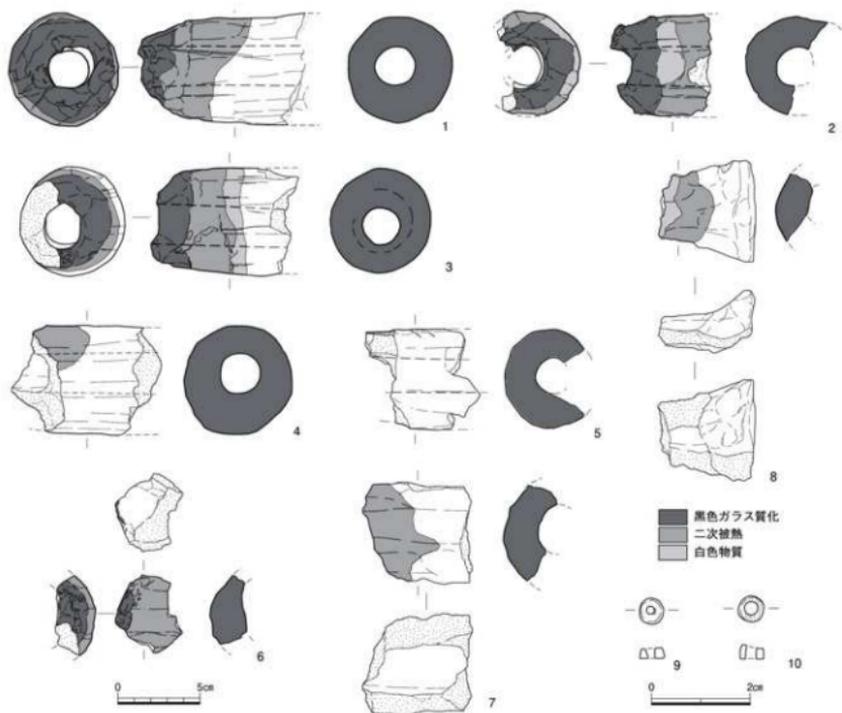


図41 第209次調査出土土金関連遺物および玉類 1:3 (明口、1:1 (白玉)

心に縦方向の櫛描波状文が左右に2条ずつ施される。体部内面には強めのロクロナデ痕が残し、側面には体部成形時のナデツケ痕跡やわずかな指頭痕が残る。形態的特徴から、TK208型式期を下限とする5世紀中葉頃に比定される。

飛鳥時代から奈良時代の土器は、土師器が杯A、杯B、杯蓋、杯C、杯H、杯G、椀、皿A、皿C、鉢、高杯、壺A、甕、土釜、甕、須恵器が杯A、杯B、かえりをもつ杯蓋、かえりをもたない杯蓋、杯H、杯H蓋、杯G蓋、杯J、椀、皿A、低脚高杯、壺A蓋、壺B、壺K、平瓶、甕Aなどからなる。21～23は土師器。21は皿B。口縁部はわずかに内彎しながら、外上方にひらく。内面に二段放射暗文を施し、外面は横方向のヘラケズリで調整する。復元口径273mm。口縁部残存率83%。藤原宮期(飛鳥V)以降とみるべきであろう。22は小型の甕。器面摩擦が激しいが、口縁部はヨコナデ調整し、胴部内面には

ヨコハケ、胴部外面にはタテハケを施す。口縁部は完存する。23・24は須恵器。23は杯H蓋。頂部外面はヘラ切り不調整。頂部に×印のヘラ書きがみられる。復元口径が98mmであり、飛鳥Ⅱとみなせる<sup>4)</sup>。24はかえりをもつ杯蓋。かえりは外端部よりも下にやや張り出す。頂部にやや粗いロクロケズリを施す。外端径が118mmであり、飛鳥Ⅲ・Ⅳに分類できる<sup>7)</sup>。

平安時代の土器は、土師器が杯、椀、皿、甕、土釜、須恵器が杯、椀、皿、甕などの他に、黒色土器A類の椀と緑釉陶器も含まれる。25は黒色土器A類の皿。浅手の外形を呈する。内外面ともに横方向のヘラミガキで調整する。底部には高台が張り付けられ、底部外面は不調整。9世紀前半頃の畿内系Ⅱ類に分類できる<sup>8)</sup>。口縁部残存率21.9%。26は皿A。つくりが粗く、内面は無暗文。底部外面をユビオサエで調整し、複数の直線からなるヘラ書きを残す。復元口径146mm。口縁部残存率78%。9

表8 第209次調査出土鉄滓集計表

遺構名	重量(g)	備考
東西溝SD4610	2287.15	粒状滓出土
柱穴SA311	560.90	7基のうち5基は採取出土
③層(整地土)	322.89	大部分が炭褐色整地土出土
②層(遺物包含層)	1950.19	
耕作溝	408.02	流動滓、粒状滓出土
床土・その他	331.34	流動滓、粒状滓出土

世紀後半頃の所産。27は緑釉陶器底部。施釉は外面にのみみられることから、壺の底部と思われる。削り出しによる円盤状高台をもつ。底部外面には糸切り痕が残る。

(山藤正敏)

**鉄製品** 東西溝 SA311 柱穴、東西溝 SD4610 や②層などから、鉄鏃、刀子、鉄釘などが標本箱2箱分出土したが、小片が多く、全体形がわかるものは僅少である。

**冶金関連遺物** 輪羽口のほかに、整地土や土坑、東西溝 SD4610 から鉄滓や鍛冶作業時に生じる鍛造剥片、球状滓が出土したほか、わずかに壁土もみられた(PL16-4)。輪羽口は総重量 3564.8g が出土し、とくに東西溝 SD4610、調査区西の北半に広がる③層や土坑 SK4622 に集中する。破片が多く、先端部から後端部まで遺存するものはない。このうち、全体形がわかるものを中心に8点を図化した(図41)。先端部が遺存するものは、被熱による溶解、発泡がみられ(1~3・6)、暗灰色や暗青灰色にガラス質化する。形状は、平面円筒形で先端部は面をもってすはまり、肉厚のもの(1~7)、全長が短く、裾が「ハ」字状に広がるもの(8)に二分される。破片資料についても、前者の形態が主体を占めるとみられる。孔は中心からやや偏る位置のものが目立つ(1・3~5)。外面は縦方向のヘラナデにより多数の面をもつほか、スマキ痕<sup>9)</sup>とされる、縦方向の線状痕や押圧痕が観察される個体(1・3・4)もある。1は、先端部側に帯状の粘土根接合痕や線状痕を多く残す。7は、外面に数条の縦ナデが明瞭に残り、断面は多角形に近い。8は、送风管取り付けにともなう削り出しは不明瞭であるが、裾部が広がりソケット状を呈する。1~7は全長10cm強、孔径2.4cm前後、器壁の厚さ1.6~2.5cm、8は全長6cm強、孔径6.1cm、器壁の厚さは1.8cm。1は土坑 SK4622、2・3は床土および②層、4・7は耕作溝、5・8は東西溝 SD4610 北屑の堆積土、6は東西溝 SA311 出土。

円筒形の1~7は飛鳥時代以降に盛行するもので、石神遺跡の既往の調査のほか、近隣の水落遺跡、そして飛鳥池遺跡や川原寺寺域北限でも出土している。8の全長が短いソケット状の形態は、古墳時代中期に盛行する羽口の形態と共通する<sup>10)</sup>。

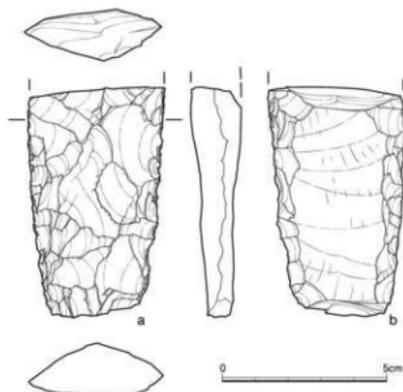


図42 第209次調査出土石器 2:3

鉄滓は総重量 6049.7 g が出土した。輪羽口同様、東西溝 SD4610 からの出土が目立つほか、調査区西の北半の③層や同区の②層からも多く出土し、とくに 200g 以上の塊形滓の出土が集中する傾向にある。その一覧は表2のとおりである。塊形滓のほか、流動滓や粒状滓、銅滓も散見されることから、近隣における一連の鍛冶行為、あるいは工房の存在を示唆する。

**玉類** 滑石製白玉が2点出土した(図41-9・10)。側面はややふくらみ、擦痕が明瞭に残る。9は直径4.9mm、孔径1~2mm、厚さ2mm、10は直径5mm、孔径2~25mm、厚さ2~3mm。調査区中央の②層出土。(松永)

**石器** 両面調整石器が1点出土している(図42, PL16-5)。尖端側とみられる一端を折損するが、その断面が片凸レンズ形を呈する木葉形尖頭器とみられる。凸面(a面)側は侵形の調整剝離痕で覆われるものの、その裏面(b面)には素材剥片の主要剝離面が広く残る。b面側の調整剝離は素材の周縁を縁どる程度で奥まで延び、多くがa面側の調整剝離によって切りとられている。図の下端にある折れ面は、a面側にある一部の調整剝離痕より古い。上端の折れ面は周囲の調整剝離痕より新しい。石材はササカイトで、風化が進んでいるために石理の編模様が明瞭に見える。遊離資料であるが、転磨した痕跡は認められない。縄文時代草創期のものか。出土地点不明。(森川 実)

**その他** これ以外に、床土や②層、耕作溝より、ササカイトの石鏃、石匙、削器、剥片等が小コンテナ1箱分、②層より馬歯1点が出土した。(松永)

#### 4 第212次調査

**調査の概要** 第212次調査では、第209次調査で検出した東西壁 SA311の東への展開を視野に入れつつ、その北側の様相を追究することを目的に、第209次調査のある水田の東端に調査区を設定した。調査区は第209次調査区から約30m東に位置し、大きさは南北24m、東西14mで調査面積は336㎡である。

**作業の経過** 調査は2022年12月12日から2023年3月17日にかけて実施した。調査に先立ち、2022年11月29日に現地の調査前の写真撮影、12月6日に調査区の設定とレベル移動をおこなった。12月12日より環境整備に着手し、同日から16日まで重機で表土と耕作土を除去。16日より南側から人力での掘削をおこなって遺構検出を進めた。3月1日に全景写真およびSMによる三次元モデル作成のための写真撮影。2日から遺構実測を進め、7日から断割などによる補足調査を実施し、随時実測をおこなった。10日に断割調査の細部写真を撮影。13日から砂置き、14日から重機による埋戻しを開始。15日に撤収作業をおこない、16日に埋戻し完了。17日に現状復旧を終え、調査を終了した。

出土遺物は、取りあげ時に土器、瓦、金属製品等の素材ごとに仕分けで搬入し、調査と併行して洗浄、注記、接合、実測等を実施した。

**調査の方法** 調査では、GNSS測量機を用いたネットワーク型RTK法で調査区内に基準線を設定し、縮尺1/20を基本に平面図を作成した。標高は、飛鳥藤原No.31(X=-168,549.309, Y=-16,677.042, H=101.030m)からオートレベルで直接水準測量をおこなった。

掘削は表土と耕作土を重機で除去し、以後は人力で掘り下げと遺構検出をおこなった。また、遺構面の記録にあたっては、通常の写真撮影に加えてSMによる三次元モデル作成のための写真撮影を実施した。

**基本層序** 調査区の基本層序は、上から順に①耕作土・床土(約30～40cm)、②灰色砂質土(遺物包含層:約5cm)、③暗黄灰色砂質土・褐色砂質土(整地土:約20cm。黒褐土・褐色土として取りあげ)、④黄褐色シルト・褐色シルト(基盤層)である。⑤層と⑥層は調査区の北半のみで見られ、南半では床土直下が④層となる。⑦層が第209次調査区の①層、⑧層が②層、⑨層が④層に対応し、⑩層

は第209次調査区ではみられない。また、調査区南壁中央付近では床土と黄褐色シルトの間に、後述する南北溝SD4635Aを覆って東西方向に延びる粗砂層がみられた(図46)。この粗砂層は、その位置からみて、石神第1・3次調査区で確認されている自然流路SD310の東延長部分の一部にあたる可能性がある。

遺構検出は、③層・⑧層を除去しておこなったが、⑩層上面では、後述する南北溝SD4630B・4635Bのほか顕著な遺構がみられなかった。そのため、⑩層を除去し⑨層上面で再度遺構検出をおこなった。遺構検出面の標高は101.7～102.0mで北に向かって低くなっており、⑩層の整地による嵩上げで平坦地が造成されたものとみられる。また、調査区南半では床土直下で弥生・古墳時代の遺構を検出しており、後世の開墾などにより大きく削平を受けている可能性も考えられる。

**検出遺構** 7世紀代の遺構として石組遺構1基、南北溝2条、土坑1基を検出したほか、弥生・古墳時代の土坑や竪穴建物などを検出している(図43、PL17)。以下、7世紀代の遺構とそれ以外に分けて詳述する。

##### (1) 7世紀代の遺構

**南北溝 SD4635A** 調査区中央よりやや西を縦断する南北方向の素掘溝で、石組遺構SX4630を壊す。調査区北半の⑩層を除去して検出した。北で西に約5°振れており、調査区の南北へ延びる。幅1.7～2.0m、深さ0.5m前後で、断面は逆台形を呈し、黒褐色粘質土で埋められる(図44～46、PL18-2)。本遺構出土土器は飛鳥Ⅰ～Ⅱに位置づけられる(図52-9～17)。

この溝に重複して直上に砂利層と褐色砂質土が溝状に堆積するが、これらは⑩層よりも新しいことから、SD4635Aとは形成・埋没時期が異なると判断し、後述する南北溝SD4635Bとした。

**南北溝 SD4630A** 調査区中央よりやや東を縦断する南北方向の素掘溝(PL18-3)。溝の方向はほぼ正方位で、北へ向かって幅と深さを増しながら調査区北外へと続く(図44・45)。調査区南壁では対応する位置で粗砂層が深く落ち込んでおり、明瞭な掘方を確認できなかった(図46)。幅0.5～1.2m、深さ0.3～0.5m。埋土は黒褐色粘質土で、最下部は鉄分の沈着が目立つ。飛鳥Ⅲ～Ⅳに位置づけられる須恵器(図52-18～28)が出土した。

調査区南半では東屑を後述する南北溝SD4639に壊さ

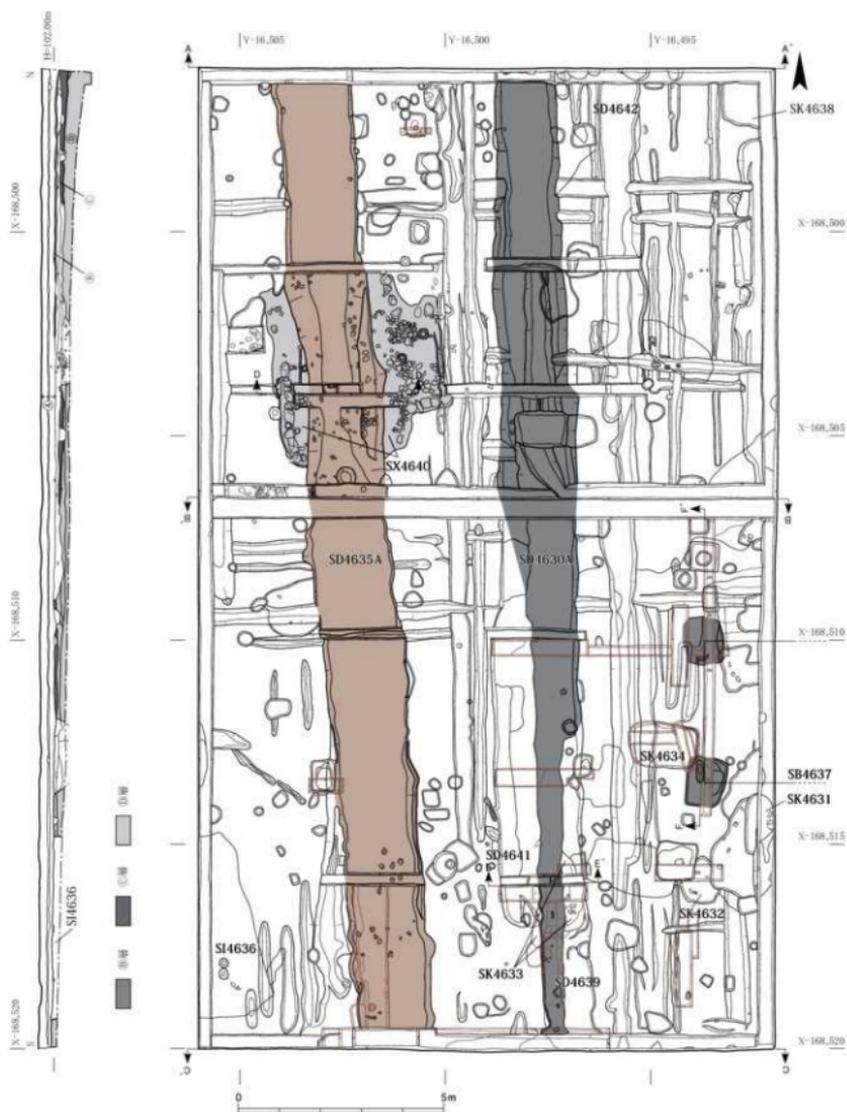


图 43 第 212 次调查区透视图·西壁土圍 1 : 120

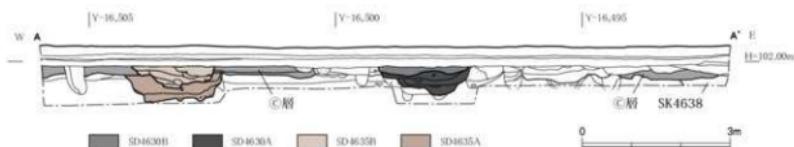


図44 第212次調査区北壁土層図 1:100

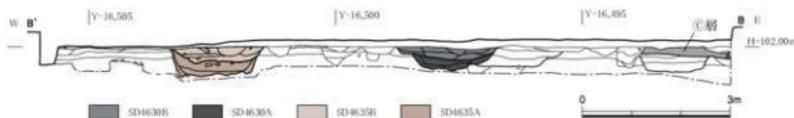


図45 第212次調査区中央断削土層図(東西反転) 1:100

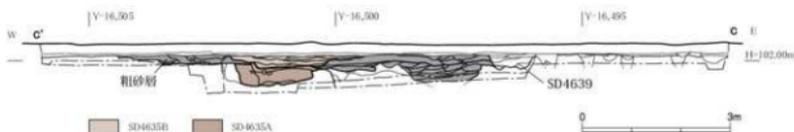


図46 第212次調査区南壁土層図(東西反転) 1:100

れる。北半では直上に褐色砂質土が堆積するが、後述する南北溝 SD4639 の埋土との区別が困難であったことから、SD4630A とは時期が異なる堆積と判断し、後述する南北溝 SD4630B とした。

**石組遺構 SX4640** 調査区西北部で検出した石組遺構(図43・47、PL19-4・5)。今回の調査では上面検出と断削調査にとどめた。南北溝 SD4635A に壊されるが、平面形は東に張り出す凸字形に復元できる。掘方は石組の10～20cmほど外側で検出でき、遺構の向きは、西辺南半で測ると、北で西に約5°振れる。張り出し部を除いた長方形部分の大きさは、石組の内法で東西2.5m、南北4.0m。西辺南半では20～30cmの石が南北に並ぶ状況がよく残り、東辺では北半で石の並びを比較的良好に確認できるが、張り出しとの接続部付近では10～20cmの石が散乱した状態であった。南辺および北辺はSD4635Aに壊されており、石組は確認できていない。張り出し部は東西方向に延びる石列が1mほど残り、石組内法で南北2mである。

断削調査により、西辺は石が2段に積まれ、底面には10cmほどの礫が敷かれていたことを確認した(PL19-5)。ただし、礫敷の大部分はSD4635Aに壊されて残っていない。遺構検出面から礫敷上面までの深さは0.45mで、

オリブ褐色砂質土で埋められている。

遺構の性格や詳細な構築方法の解明は今後の課題であるが、底面に礫が敷かれた石組遺構であることから、石組池のような機能を想定することもできる。ただし、今回の断削調査では湛水を示すような堆積は確認できなかった。

**土坑 SK4638** 調査区東北隅で検出した土坑。北と東は調査区外へと続いており、東西1m、南北1mほどが調査区にかかる。深さ0.2m以上で、土師器高杯(図52-29)が出土した。

## (2) 弥生・古墳時代の遺構

**竪穴建物 SI4636** 調査区西南隅で検出した竪穴建物(PL19-6)。規模は南北4.5mで、東西幅は、南辺付近で1.8mを検出したが、さらに調査区の西外へ続く。建物の方位は北で西に15°振っており、第209次調査区で検出した竪穴建物とはほぼ同じである。埋土は黒褐色で、調査区の西排水溝にかかる部分から古墳時代の土師器高杯・小型丸底土器(図51-5～8)が出土した。

**土坑 SK4631** 調査区南部の東壁沿いで検出した土坑(PL19-7)。排水溝で一部を確認したのみで、規模は不明。埋土は黒褐色で、弥生時代の甕蓋(図51-1)が出土した。

**土坑 SK4632** 調査区東南部で検出した土坑。直径0.9

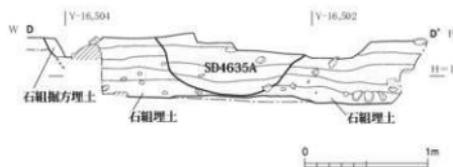


図47 石組遺構 SX4640 断面図 1:40

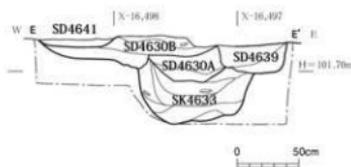


図48 土坑 SK4633・南北溝 SD4639・4630A・B・4641 断面図 1:40

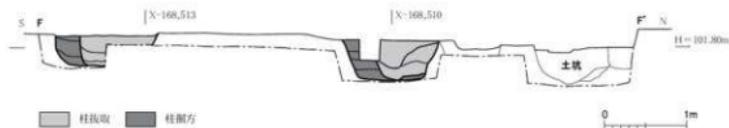


図49 SB4637 柱穴断面図 1:60

～1.1 mの不整形形で、深さ0.3 m。埋土は黒褐色で、弥生時代の差蓋(図51-2)が出土した。

**土坑 SK4633** 調査区南部で検出した土坑。南北溝SD4640Aに壊される(図48)。不整形で南北に長く、長さ2.3 m、幅1.1 m、深さ0.7 m。埋土は黒褐色で、石庭丁(図53-7)や弥生土器片が出土した。

**土坑 SK4634** 調査区東南部で検出した土坑。東西1.7 m、南北1.1 mの隅丸方形で、深さ0.35 m。埋土は黒褐色で、最下層から弥生時代の広口壺(図51-3・4)が出土した。

### (3) その他の時代の遺構

**南北溝 SD4635B** 南北溝SD4635Aに重複する南北溝。調査区外の南北へと続く。埋土は砂利層と褐色砂質土からなり、調査区北半では◎層上面で検出した(図44)。幅1.8 m前後、深さ0.5 m。調査区南端では砂利層の幅が大きく広がり、南壁の粗砂層に接続する(図46)。このことから、砂利層は調査区の南側から流入した土砂に由来するものと考えられる。

**南北溝 SD4630B** 南北溝SD4630Aに重複する南北溝。調査区の北外へ延びる。調査区北半では◎層上面で検出し、幅1.5～1.9 m、深さ0.2 m。埋土にはいり黄褐色砂質土および褐色砂質土で、調査区南半では多量の炭片を含む部分がみられた。

**南北溝 SD4639** 調査区南半で南北溝SD4630A・Bの東側を壊す南北溝。幅0.7 m前後、深さ0.3 m。南壁では粗砂層を壊しており(図46)、暗褐色砂質土および黒褐色砂質土で埋まる。北に向かって浅くなり、X=-168.512以北ではSD4630Bの埋土と区別が困難となる。

**南北溝 SD4641** 調査区南半、SD4630Aの西側で検出した南北溝。幅0.6 m、深さ0.1 mで、長さ6 mを検出した。埋土は灰黄褐色砂質土。性格は不明。

**掘立柱建物 SB4637** 調査区東南部で検出した建物。南北に並ぶ柱穴を2基確認した(図49)。調査区の東外側へと展開する建物の一部と解釈した。柱穴掘方は南北にやや長い隅丸方形で、東西1.0 m前後、南北1.1 m前後、深さ0.4～0.5 m。柱間寸法は3.4 m。埋土からは良好な遺物が出土しておらず、時期は不詳。

**南北溝 SD4642** SD4630の東側で検出した南北溝。幅0.7～1.0 m、深さ0.2 m。南北10 m分を確認しており、調査区の北外へと続く。埋土は褐色で、ササカイト製の石小刀(図53-6)が出土したが、溝の時期は不詳である。

(谷澤亜里)

### (4) 出土遺物

**瓦類** 出土瓦類の一覧を表9に掲げた。調査面積に

表9 第212次調査出土瓦類集計表

軒丸瓦		軒平瓦		その他	
型式	点数	型式	点数	種類	点数
飛鳥寺I	2	素文	1	契牛瓦	1
飛鳥寺XIV	1	重爪文	1	隅切丸瓦	1
不明	2			隅切平瓦	1
				ヘラ書き平瓦	3
計	5		2		6
		丸瓦	平瓦	棟唐石	
重量	16.670g	70.340g	1.850g		
点数	2/4	1.657	8		

比して瓦の出土量は少なく、瓦の約半数は床土や包含層からの出土であり、比較的厚く堆積する調査区北半からの出土が目立つ。出土遺構としては、やはり南北溝SD4630A・SD4635Aからの出土が顕著である。

軒丸瓦はわずかに5点が出土したのみであり、そのうち型式が判明した3点を図50に掲げた。1・2は飛鳥寺I型式、3が飛鳥寺XIV型式であり、1・3が包含層(Ⅷ層)出土、2が耕作溝からの出土である。1は瓦当上面の破片であり、丸瓦の接合状況がよくわかる個体である。丸瓦の先端は凹面側をわずかにヘラケズリし、瓦当面近くまで深く差し込んでいる。接合後、瓦当裏面にヨコナデを施す。丸瓦部凸面はタテナデで整形する。2は瓦当下半部の破片であり、瓦当裏面を不定方向のナデで平滑

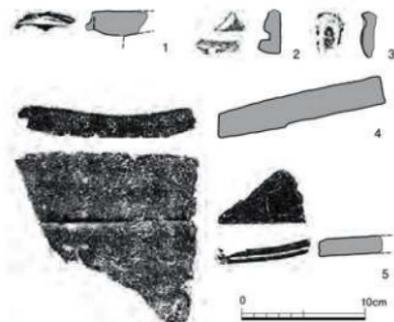


図50 第212次調査出土瓦 1 : 4

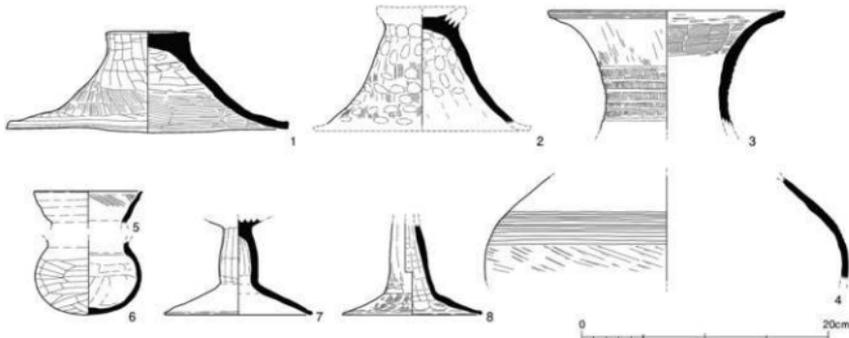


図51 第212次調査出土土器(1) 1 : 4 (1 : SK4631, 2 : SK4632, 3~4 : SK4634, 5~8 : SK4636)

に仕上げ、瓦当側縁はヨコナデで調整する。3は複弁部だけの破片であり、瓦当裏面は残存しておらず、瓦当に粘土を詰めた際の単位面で剥離している。

4・5は平瓦だが、軒平瓦として使用された可能性が高いものである。4は厚さ2.0~2.5cmで、平瓦凹面の端部寄りをヨコナデで調整すると共に、凸面側をヨコナデ調整することによって、幅5.5cmの段頸を設けている。全長は13.8cmと極めて短く、焼成前に切り詰めていると推定できる。南北溝SD4635A出土。5は厚さ1.4cmと薄手の平瓦だが、凹凸両面をナデで仕上げ、凹面にはわずかに布目痕が残存している。端部はヨコナデによって沈線状の表現がなされ、あたかも二重弧文のような様相を呈する。南北溝SD4635B出土。同程度の厚みを持つ薄手の平瓦は、このほかにも出土している。

このような軒瓦の状況から、調査区内で出土した瓦の大半は、調査区南方に展開する飛鳥寺から流入したものと推定される。このほか、鬘斗瓦や隅切瓦、ヘラ書きの一部が確認できる瓦などが出土している。(林 正憲)

**土器** 整理用木箱で26箱分の土器が出土した。その大半が古代の土器で、その他に縄文土器、弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器、製塩土器、硯、緑釉陶器、瓦器、近世陶器などが出土している。以下、遺構から出土した土器を中心に報告する。

**土坑SK4631・4632・4634出土土器** 弥生時代前期~中期の土器が整理用木箱で1箱分出土した(図51)。1は土坑SK4631出土の甕蓋(PL20-4)。ほぼ完形で、全体に煤

が付着する。つまみ部外面はヘラケズリをおこない、内面はナデで調整する。裾部外面には、縦方向のハケ目調整がみられ、内面には密にヘラミガキを施す。類例が弥生時代中期中頃にみられる。2は土坑SK4632出土の甕蓋。裾端部やつまみ部が欠損して脚部のような形状をなすが、全体に煤が付着することから、甕蓋と判断した。裾部外面に縦方向のハケ目調整、内面にはナデ調整がみられる。図化はしていないが、SK4632からは弥生時代前期後半に位置づけられる、突帯に刻み目をもつ壺胴部片が出土しており、本資料も同時期のものと考えておきたい。3・4は土坑SK4634出土の広口壺。胎土が異なることから、両者は別個体と考える。3は口縁部～頸部で、外面に縦方向のハケ目がみられ、頸部には6条のヘラ描き直線文を配す。口縁端部内外面をナデで調整し、内面には横方向のハケ目がみられる。4は胴部で、外面に12条のヘラ描き直線文をもつ。内外面とも器面が磨滅しているため、

調整は不明。類例が弥生時代中期初頭にみられる。

**竪穴建物 S14636 出土土器** 整理用木箱で、1箱分に満たない古墳時代の土器器が出土した(図51, PL.20-5)。5は小型丸底土器の口縁部。器面の磨滅のため、調整は不明瞭であるが、内面の一部にハケ目がみられる。6は小型丸底土器の胴部。外面をヘラケズリ、内面をナデで調整する。7・8は高杯脚部で、裾部との境が「く」字状に屈曲する。7は脚柱部中位が膨らみ、外面をヘラケズリで仕上げる。内面には絞り痕を残す。裾部は器面が磨滅しており、内外面とも調整は不明。8は脚柱部外面に弱い面取りがみられ、裾部内外面はハケ目で調整する。これらの土器は、小型丸底土器の形態や外面調整から布留4式期に位置づけられる。

**南北溝 SD4635A 出土土器** 溝埋土の黒褐色粘質土から整理用木箱1箱分の土器が出土した(図52)。古代の土器が多くを占め、土器器は杯C、杯G、杯H、高杯、甕B、

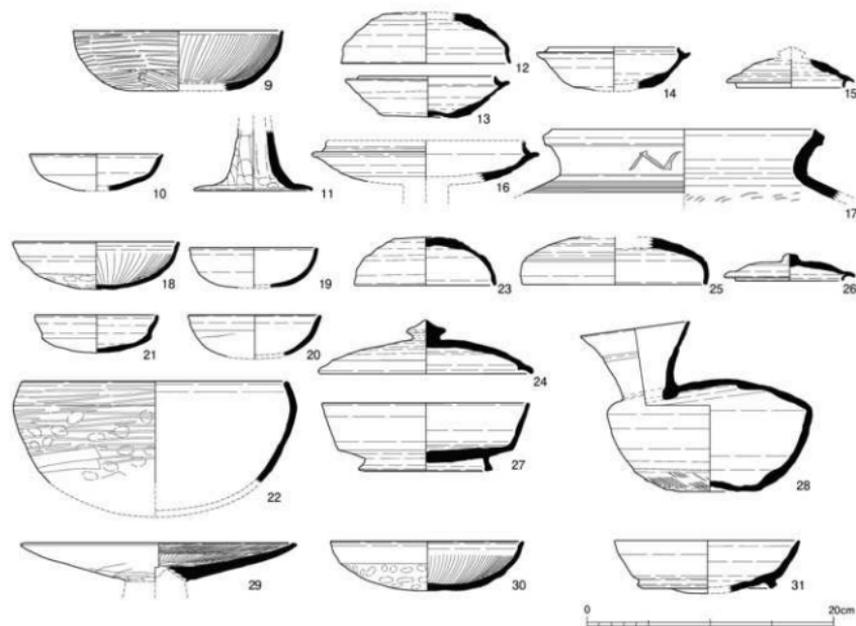


図52 第212次調査出土土器(2) 1:4 (9~17:SD4635A、18~28:SD4640A、29:SK4638、30~31:埴地土)

須恵器は杯G蓋、杯H、杯H蓋、高杯、壺A、甕が出土した。

9～11は土師器。9は杯C。復元口径は17.0cm。内面に一段放射暗文をもち、底部内面に螺旋暗文がみられる。外面調整はb3手法。10は杯G。復元口径は10.8cm。口縁端部が内傾し、口縁部から底部にかけて黒斑がみられる。11は高杯脚部。脚柱部の外面は、部分的にヘラケズリをおこない、内面には絞り痕を残す。胴部内外面はナデで調整する。

12～17は須恵器。13・14は杯Hで、いずれも底部外面はヘラ切り不調整。13は、受部外径径13.3cmで、底部外面に「J」形のヘラ記号をもつ。14は、受部外径径12.4cm(PL20-2)。12は杯H蓋。復元口径13.8cmで、頂部外面をロクロケズリで仕上げる。16は、受部外径径が18.4cmと大型になることから、高杯の杯部と判断した。底部外面をロクロケズリで仕上げる。15は、壺蓋。口縁部外径径は10.4cmで、外面に自然釉が降着する。17は甕。復元口径22.8cm。口縁部をナデにより仕上げ、胴部外面にはカキ目を施す。頸部外面に「N」形のヘラ記号をもつ。内面には、同心円文の当具痕がみられるが、部分的にナデ消されている。

須恵器杯H(13・14)は、口径などの形態的特徴から飛鳥Ⅰに位置づけられる<sup>11)</sup>。一方、SD4635Aの上層に位置するSD4635B出土品の中には、SD4635Aと由来すると考えられる口径の小さい須恵器杯Gや杯G蓋があり、これらは飛鳥Ⅱに位置づけることができる。出土量が少なく、細かな時期比定は難しいが、SD4635Aの埋没時期については、飛鳥Ⅰ後半～飛鳥Ⅱと捉えておきたい。

**南北溝 SD4630A 出土土器** 溝埋土の黒褐色粘質土から整理用木箱3箱分の土器が出土した。土師器は、杯A、杯B蓋、杯C、杯G、杯H、皿B、鉢、甕B、須恵器は杯A、杯B、かえりをもつ杯蓋、かえりをもたない杯蓋、皿A、皿B、碗A、鉢F、壺、壺蓋、平板、甕が出土した(図52、PL20-1)。18～22は土師器。18は杯C。復元口径13.5cm、器高は3.9cmで、径高指数は28.9。内面に一段放射暗文をもち、底部内面に螺旋暗文がみられる。外面の調整はa0手法。底部内面中央に焼成後に施された「+」形の線刻がある。外面にも、焼成後に施された細い糸線が多数みられる。19・20は杯G。19は復元口径10.4cm、12は復元口径10.8cm。20の外面には粘土紐の接合痕跡が残る。胎土には1～2mmの砂粒を多く含む。21は杯

H。復元口径10.0cmで、口縁部と底部の境に明瞭な稜をもつ。22は鉢。復元口径は21.6cmで、口縁部は内彎する。胴部外面下位をヘラケズリで調整し、口縁部から胴部中位までにヘラミガキを施す。

23～28は須恵器。27は杯Bで、口径16.8cm。底部外面にロクロケズリを施し、「←」形のヘラ記号をもつ。高台は内寄りに付き、やや高い。内面に暗灰色の飛沫が付着する。24はかえりをもつ杯蓋。口縁部外径径17.4cmで、外面全体に自然釉が降着する。23は杯H蓋で、口径11.5cm。頂部外面はヘラ切り不調整で、内面に「一」形のヘラ記号をもつ。口縁部外面には重ね焼きの痕跡を残す。25・26は壺蓋。25は復元口径15.0cmで、頂部外面にロクロケズリを施し、口縁部外面には1条の凹線を配す。26は口縁外径径10.6cmに復元でき、小さなボタン状のつまみをもつ。28は平瓶。ほぼ完形で、口径8.8cm、胴部最大径16.6cm。口縁部に1条の凹線をもつ。外面調整は、胴部下半にロクロケズリを施し、底部外縁には平行タキの痕を残す。

これらの土器は、土師器杯C(18)や須恵器杯蓋(24)の特徴、高い高台をもつ須恵器杯B(27)の存在から、飛鳥Ⅲ～Ⅳに位置づけられる<sup>12)</sup>。

**土坑 SK4638 出土土器** 埋土から整理用木箱で1箱に満たない土器が出土した。出土土器の多くは小片で、器種がわかるものは高杯A(図52-29、PL20-3)のみであった。杯部のみ残存し、二段放射暗文と螺旋暗文をもつ。復元口径は22.4cmで、外面は板ナデ調整をおこない、脚部との接合部には、部分的にヘラケズリがみられる。杯部外面の2カ所に焼成後に施された「キ」・「キ」形の線刻がある。飛鳥Ⅴ以降のものであろう。

**◎層(埋土)出土土器** 整理用木箱で3箱分の土器が出土した。多くを古代の土器が占め、土師器は皿A、鉢A、高杯、甕、須恵器は杯B、かえりをもつ杯蓋、かえりをもたない杯蓋、杯H、碗C、皿B蓋、皿C、壺、甕がある。

図52-30は土師器杯C。復元口径は15.6cm、器高は4.0cmで、径高指数は25.6。口縁端部に内傾面をもち、内面に一段放射暗文を施す。外面調整はa0手法。31は須恵器杯B。復元口径は15.0cm。底部外面はヘラ切り不調整で、底部が高台より下方に突き出る。

◎層から出土した古代の土器で、あきらかに奈良時代

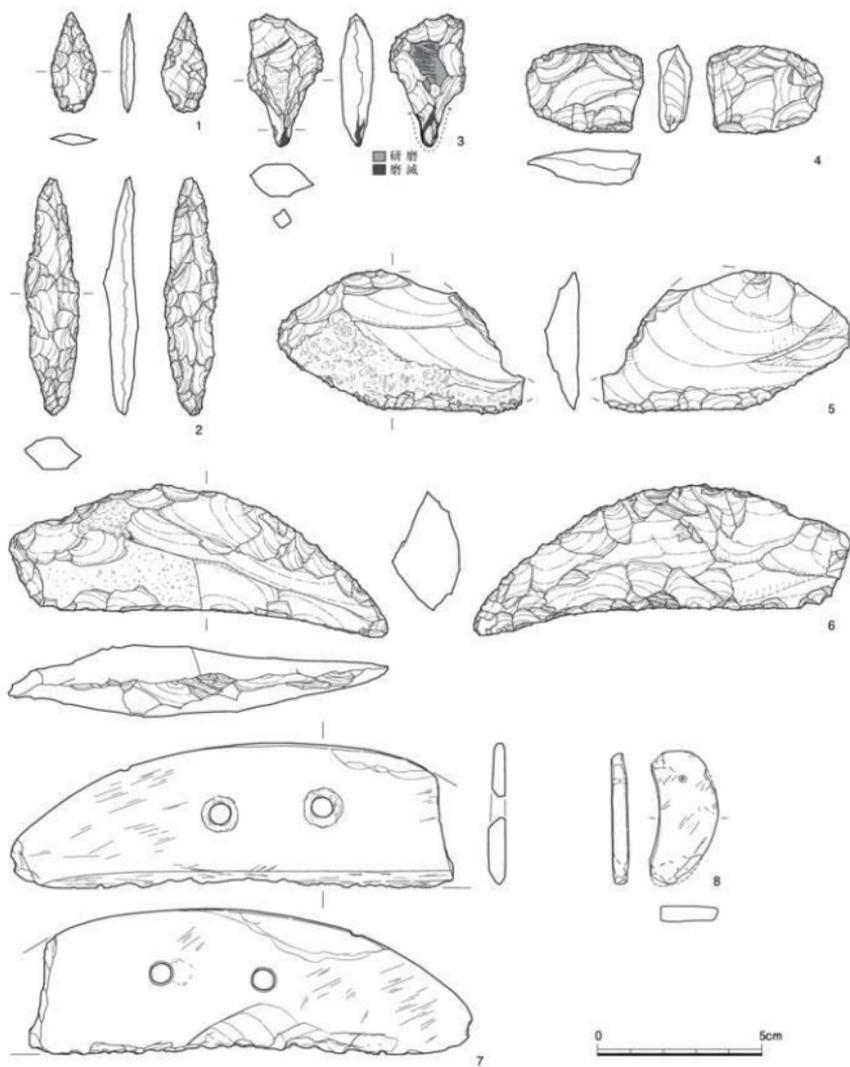


圖 53 第 212 次調查出土石器 2 : 3

以降に降るものはみられない。かえりをもつ杯蓋とかえりをもたない杯蓋の両者が出土しているが、飛鳥Ⅴ以降に顕著になる大型の土師器皿や須恵器皿Ⅱ蓋なども存在する。調査では整地が一時期のみであった確証は得られていないため、整地の時期は飛鳥Ⅳ～Ⅴと幅をもたせて考えるのが妥当であろう。

(横口典昭)

**石器・石製品** 包含層や遺構等から、小コンテナ5箱分の石器・石製品が出土した(図53、PL20-6)。このうち、ササカイト製の打製石器は剥片・石核を含めて200点を超過しており、総重量2169.68gにのぼる。

図53-1・2は石鎌。いずれも両面を押し剥離で調整しており、1は両面に素材面を広く残す。2は柳葉形を呈し、最大長は7.2cmである。

3は石錐。短い錐部はその先端が重度の使用によって著しく摩耗しているほか、片面のつまみ中央部には研磨時の線状痕が残る(アミ部)。弥生時代の土坑SK4633出土。

4は楔形石器。両面に対向方向の剥離痕があり、上下両縁がやや潰れている。側面には断面が残る。③層(遺物包含層)出土。なお、第212次調査で出土した剥片には、バルブが平坦で打面が点状・線状を呈するなど、両極打法で生じたものが一定量含まれる。

5は横形削器。横長剥片の末端部に2次加工を施し、刃部を作り出している。背面に残る自然面は、二上山北麓の岡屋盆地に産するササカイト礫のそれに同じ。弥生時代の土坑SK4634出土。

6は石小刀。片面に自然面と素材剥片のネガティブ面が、もう一方の面にはポジティブ面が残る。概ね鎌形を呈するが、やや凹形をなす刃部の調整は比較的粗く、一部は潰れている。南北溝SD4642出土。

7は緑色片岩製の石応丁。直線刃半月形で片刃である。縁孔は両面穿孔だが、刃部のある面からの穿孔は敲打後におこなっている。刃部には横方向の擦痕と刃こぼれ状の使用痕がみられる。弥生時代の土坑SK4633出土。

8は滑石製勾玉。扁平な板状で腹部の抉りは浅い。幅2cm、残存長4cm、厚さ0.5cm。南北溝SD4635B出土。

これらの石器・石製品は、ササカイト製の有茎鎌や石小刀のほか、石包丁も出土していることから、大部分は弥生時代のものと考えられる。ただし、滑石製勾玉はその扁平な形状から、古墳時代中期後半以降に降る。

(森川実・谷澤)

**その他** 金属製品としては鉄釘、鉄錐とみられる鋳造の板状鉄製品片、不明鉄製品等が標本箱1箱分出土したが、全体形のはっきりしたものは少ない。そのほか、少量の鉄滓と壁土片・羽口片等が小コンテナ1箱分出土したほか、弥生時代の土坑から木炭片が出土している。(谷澤)

## 5 成果と課題

飛鳥藤原第209・212次調査の成果を合わせて述べ、まとめとしたい。

**古代** 第209次調査では、調査区南半を東西に延びる東西堀SA311および東西溝SD4610を50mにわたり確認した。東西堀SA311は、石神第1・3次調査区で検出していたものの東延長にあたり、第209次調査区までの総延長は85mを測る。これにより、石神遺跡南辺では飛鳥寺寺域との間に、東西方向の長大な堀が存在していたことがあきらかとなった。第3次調査ではこの東西堀SA311の南側に東西溝SD347を検出している。この東西溝は第3次調査区中央で北折して石神遺跡C期の南北基幹排水路SD640となるが、上流にあたる第1次調査区の中央および東半では経路が不明であった。第209次調査区で東西堀SA311の南を並走する東西溝SD4610の下層部分は、このSD347の東延長部分に相当すると考えられる。今回の調査で、SD347が第1次調査区よりもさらに東へ延びることが判明し、東西堀SA311とともに石神遺跡の南辺を画していたことがあきらかとなった。

いっぽう、第212次調査区では、東西堀SA311の延長線上にSA311は検出されなかった。したがって、SA311は第212次調査区までは延びないと考えられる。ただし、第212次調査区の南壁で確認した相砂層は、検出面やその位置から第209次調査で確認された東西溝SD4610上層の埋土の一部である可能性がある。そのため、SD4610の下層にあたる東西溝SD347が第212次調査区の南外を通っている可能性も考えられる。第209次調査区よりも東側でのSD347の経路や、その北岸での東西堀SA311の展開が今後の課題といえよう。

第212次調査では、調査区中央を北流する2条の南北溝SD4630AおよびSD4635Aと、SD4635Aに壊される石組遺構SX4640を検出した。2条の南北溝は、位置関係や主軸の振れ、埋土の堆積状況などの違いから、併存するものとは考えがたい。SD4635A出土土器は飛鳥Ⅰ～

II、SD4640A 出土土器は飛鳥Ⅲ～Ⅳに位置づけられ、それぞれの埋没時期の一端を示すものと考えられる。これらの溝の性格や、調査区の南外を西流している可能性のある東西溝 SD347 との関係を探明するためには、周辺におけるさらなる調査の蓄積が俟たれる。

出土土器を勘案すると、SD4635A は石神遺跡 A 期の遺構と考えられ、これに壊される SX4640 も主軸の振れを同じくすることから、両遺構に大きな時期差は想定しがたく、SX4630 も A 期に位置づけられる可能性が大きい。第 2 次調査では東西石組溝 SD435 のように東へと延びる A 期の遺構も確認していることと合わせると（『原報報告 13』）、第 1・2 次調査区よりも東側に A 期の遺構が展開する可能性が示唆される成果となった。

冒頭で述べたように、これまで石神遺跡 A 期は、第 209 次調査区よりも西方に位置する掘立柱建物群と南北堀を東限と想定してきた。今回の第 209・212 次調査により、第 1 次調査区よりも東方にあたる飛鳥寺寺域の北側に複数時期にわたる遺構が確認されたことは、遺跡の広がりを考える上で重要な知見である。

また第 209 次調査では、樋羽口や鉄滓、そして微小ではあるが鍛造剥片といった冶金関連遺物が出土した。これらは継続的な鍛冶行為とともに、近隣における鍛冶工房の存在を想起させる。本調査区が飛鳥寺寺域北辺に位置することも、示唆的である。

**古墳時代以前** 第 209・212 次調査ともに、弥生・古墳時代の遺構を確認した。なかでも、第 209 次調査で検出した造営方位を同じくする 4 棟の堅穴建物は、第 1 次調査区の堅穴建物 SB315 とともに、当該地が古墳時代中期前後に一定の集落域を形成していたことを示唆する。造営方位の揃う堅穴建物は、第 212 次調査区の西南隅でも検出しており、第 209 次調査区と第 212 次調査区の間にも集落域が広がる可能性がある。また、包含層からの出土ではあるが、第 209 次調査区出土の須恵器樽型埴輪や滑石製白玉は、これらの堅穴建物との関連が考えられる。

弥生時代の遺構としては、第 209・212 次調査ともに土坑を検出している。特に第 212 次調査では、弥生時代前期後半～中期に位置づけられる土坑を調査区東南部に複数確認した。同様な時期の土坑は第 1 次調査区の東南部でも検出されているほか、第 209 次調査区の包含層からも同時期の弥生土器が出土している。第 212 次調査区全

体から多量に出土したササカイトの剥片も、この時期の遺跡の展開を示すものと理解できる。

さらに、第 209 次調査では弥生時代後期に位置づけられる土坑も検出しており、長期的な土地利用の一端がうかがえる。くわえて、同調査では縄文時代草創期に位置づけられる木葉形尖頭器が出土しており、調査地周辺でのさらに古い時期の人間活動をも想定できる。このような調査地周辺における継続的な土地利用は、この一帯が西方で発見されている石神遺跡の遺構群からも一段高く、飛鳥川と中の川に挟まれた台地上に位置するという立地的特質とも関連するものであろう。（松永・滝澤）

#### 註

- 1) 森川 実・大澤正吾「石神遺跡 B 期整地土・SD640 出土の土器群 - 石神遺跡第 3～5 次・第 10～12 次」[紀要 2018]。土橋明梨沙「石神遺跡出土の東北系黒色土器 - 石神遺跡第 3～8・11 次」[紀要 2020]。山藤正敏「石神遺跡 SD1347・SD1476 出土の土器群 - 石神遺跡第 8・9 次」[紀要 2021] など。
- 2) 相原嘉之「飛鳥古京の攻防」[琵琶湖と地域文化 - 林博通先生退任記念論集] サンライズ出版、2011。相原嘉之「3 飛鳥浄御原宮の宮城」[古代飛鳥の都市構造] 吉川弘文館、2017 など。
- 3) 尾野善裕・森川 実・大澤正吾「飛鳥地域出土の尾張産須恵器」[紀要 2016]。
- 4) 釈説は史料研究室による。ただし「大」とみた場合、横画が後に書かれており筆順が不審である。あるいは記号の可能性もある。
- 5) 森 隆「黒色土器」[概説 中世の土器・陶磁器] 中世土器研究会、真陽社、1995。
- 6) 森川 実「飛鳥時代における須恵器食器の分量変化」[飛鳥時代の土器編年再考] 奈良文化財研究所・歴史土器研究会、2019。
- 7) 前掲註 5。
- 8) 前掲註 4。
- 9) 真鍋成史「鍛冶関連遺物」[考古資料大観] 第 7 巻、小学館、2003。
- 10) 前掲註 8。
- 11) 前掲註 5。
- 12) 大澤正吾「飛鳥時代における土器器杯 C・杯 A の変遷とその区分」[飛鳥時代の土器編年再考] 奈良文化財研究所・歴史土器研究会 2019。前掲註 1。

# 奥山廃寺（奥山久米寺）の調査

—第 211-6 次

## 1 調査の経過

**調査に至る経緯** 本調査は、明日香村奥山における個人住宅の建て替えにともなう発掘調査である。工事範囲のうち、東南部を中心に調査を実施した。調査区は東西約 9m、南北約 3m で設定し、面積は 26m<sup>2</sup> である。

**作業の経過** 調査期間は 2022 年 10 月 3 日から 12 日である。10 月 3 日に現場の設営をおこない、重機掘削を開始した。重機掘削の終了後、人力による遺構検出を開始し、10 月 6 日まで遺構検出および遺構掘削をおこなった。同日、全景写真を撮影し、その後、遺構平面図と壁面土層図を作成した。10 月 11 日、全ての作業を終え、遺構面保護のため、川砂を敷いた後、埋め戻しを開始した。10 月 12 日に埋め戻しが終了し、全ての作業が完了した。本調査の出土遺物は少量であり、調査終了後に洗淨・分類・注記作業をおこなった。

## 2 遺跡の位置と環境

奥山廃寺は、山田寺の西約 800m の奥山集落内に存在した古代寺院である。集落各所におけるこれまでの調査で、西面回廊、塔、金堂などの位置が判明しており（『藤原概報 3』、「同 18」、「同 20」）、また、1995 年の調査で、講堂推定地に隣接する地点から礎石が見つかったことで（『藤原概報 26』）、地割り痕跡から推定されていた講堂の位置についても有力な手がかりが得られた。これらの調査成果から、伽藍配置は、塔・金堂・講堂が南北に直線上に並ぶ四天王寺式であったことがほぼ確定している。

奥山廃寺の主要堂宇については、東西幅 23.4m、南北幅約 19m に復元される金堂基壇が目される。これは、山田寺金堂を上回り、川原寺中金堂に匹敵する大きさで、飛鳥時代の寺院のなかでも第一級の規模を誇る。ただ、これほどの大寺院であったにも関わらず、文献史料には確実な記述がなく、未解決の課題が多く残る。

今回の調査地は、奥山廃寺の塔跡から南東へ約 50m の位置にある。塔跡の中心と 1972 年度の調査（『藤原概報 3』）で確認した西面回廊基壇の西端との距離は約 32m で、塔跡中軸線を基準に東へ折り返し、東面回廊の位



図 54 第 211-6 次調査区位置図 1 : 1500

置を推定すると、東面回廊は本調査地の 15m ほど西を通る（図 54）。南面回廊については、これまでの調査で遺構などを確認できてはいないが、大阪府四天王寺の塔と中門の心々間距離（約 29m）を、仮にそのまま奥山廃寺の塔-中門間の距離として当てはめると、中門に接続する南面回廊の復元中心ラインは、本調査地の約 3m 北を通る。つまり、本調査地は、中心伽藍を囲む回廊の外側で、推定される回廊東南隅付近から東へ約 15m の場所に位置する。

## 3 調査の方法と成果

**調査の方法** 本調査では、GNSS 測量機を用いたネットワーク型 RTK 法で調査区内に基準線を設定し、輪尺 1/20 で平面図を作成した。標高は藤原基準点 No.204 (X = -168,218.462, Y = -16,385.102, H = 99.385m) からオートレベルで直接水準測量をおこなった。表土および現代盛土、耕作土は重機で掘削し、それ以下は人力により掘り下げをおこない、遺構検出および遺構掘削を実施した。また、写真記録はデジタルカメラを用いて撮影した。

**基本層序** 基本層序は、調査区西半で、上から、表土（約 10cm）、現代盛土（15～25cm）、黄褐色整地土（約 15cm・時期不詳）、耕作土（5～10cm）、地山。調査区東半で、上から、表土（5～15cm）、現代盛土（15～25cm）、暗灰黄色包含層（5～15cm）、暗オリーブ色整地土（約 5cm・時期不詳）、暗灰黄色整地土（15～25cm・時期不詳）、地山である（図 55）。遺構検出は、調査区西半は地山面（標高 95.50～95.65m）、調査区東半は暗オリーブ色整地土面上（標

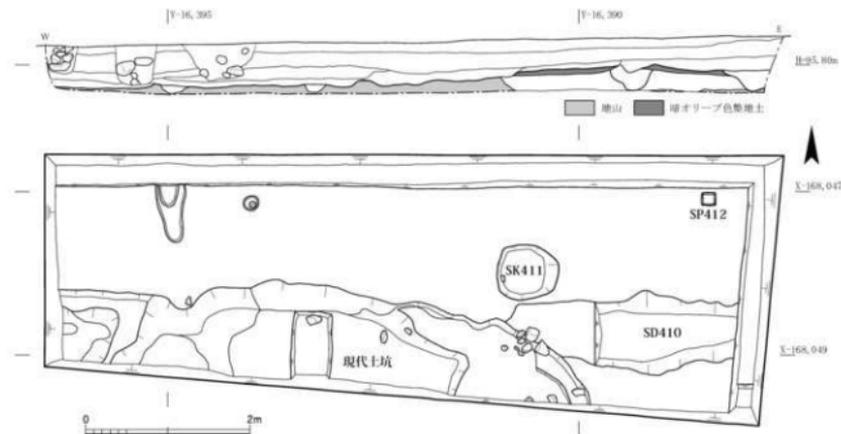


図55 第211-6次調査区遺構図・北壁土層図 1:80

高95.65～95.80m)でおこなった。

**検出遺構** 調査の結果、東西溝1条、土坑1基、柱穴1基を検出した(図55、PL11-2)。各遺構からは瓦や土器が出土しているが、小片が多く、量も少ない。また、調査区西半の地山面上では、南北方向の耕作溝を数条確認した。なお、調査区西南部は、現代の大土坑により大きく削られている。以下、主な検出遺構について述べる。

**東西溝 SD410** 調査区東部で検出した東西方向の素掘溝。2.8mほどを確認した(PL11-3)。幅0.7～1.0m、深さ25cmである。Y=-16.390.6m付近で南に曲がるようであるが、屈曲部より南は、現代土坑により失われている。埋土より須恵器杯Bが出土した。

**土坑 SK411** 調査区中央東寄りで検出した円形の土坑。大きさは径70～75cm、深さは45cmである。

**柱穴 SP412** 調査区東北隅で検出した方形の柱穴。一辺15cmで、深さは5cm。埋土より瓦器皿が出土。

**出土遺物** 調査区全域から瓦や土器などが出土した。瓦・土器ともに小片が多い。出土量は少なく、瓦・土器をあわせても整理用コンテナ1箱におさまる。なお、現代土坑の埋土上層から石鏝が1点出土した。

#### 4 まとめ

今回の調査では、調査区東半の整地土上で土坑や東西

溝を検出した。ただし、これらの遺構からは、少量の遺物しか出土しておらず、遺構の詳細な時期や性格を知ることができなかった。また、調査区全体での遺物の出土量は瓦・土器をあわせて整理用コンテナ1箱と少なく、整地土や包含層の年代を絞り込むことも難しい状況である。

本調査区の6mほど南で実施された奥山久米寺1995-1次調査V区の成果をみると(『藤原概報26』)、標高96.0m付近で整地土を検出している。一方、今回確認した灰オリブ色整地土上面の標高はそれより低く、95.65～95.80mであった。これらのことから、本調査区付近は後世の削平を大きく受けている可能性がある。調査区西半で検出した地山面上(標高95.55m付近)で、数条の耕作溝を確認していることもその傍証となろう。

上記のような遺構・遺物の状況は、調査区全体が後世の削平を大きく受けていたことも一因と考えるが、当初の推定通り、本調査地が、奥山庵寺の主要伽藍を構成する建物などからは距離があったことを示すものともいえる。今回の調査は、個人住宅の建て替えにともなう小規模なものであったが、今後もこのような小さな調査を積み重ねることが、奥山庵寺の当時の姿を明らかにするために重要となろう。

(若杉智宏)

# 石神遺跡 SDI347A・B 出土の土器群

## 一石神遺跡第14次

### 1 はじめに

飛鳥・藤原地区考古第二研究室では、石神遺跡出土土器の整理を順次進めており、その成果を報告してきた<sup>1)</sup>。昨年は、石神遺跡第14次調査区の南北素掘溝SDI347Aから出土した土器群を報告し、その特徴をまとめた(「紀要2022」以下、前稿と表記)。その後、第14次調査区SDI347Aの上層にあたる埋立土の土器群や、SDI347Aの埋め立て後に新たに掘削されたSDI347B出土土器群の再整理を進め、SDI347AからSDI347Bまでの連続的な飛鳥Ⅳの土器群を得るに至った。このため本報告では、これらの土器群を報告する。

同調査区においては、SDI347A・Bの堆積が比較的厚く残っていたため、層毎の精密な発掘調査が可能であった。このため、石神遺跡第8・9次調査区に比べてより精度の高い土器の定量データを取得できた。これにより、以前報告した石神遺跡第8・9次調査区のSDI347から出土した土器群に見出した統計的・型式的変化の方向性を検証することがようやく可能となった。本報告の目的は、以前の報告においてすでに見出した諸傾向を検証し、石神遺跡における土器群の変遷をより確度の高いものにする点にある。

### 2 南北溝SDI347の概要

石神遺跡南部の第3～8次調査区で検出した南北溝SD640は、第8次調査区のはほぼ中央において西北西に14mほど屈折し(東西溝SDI346)、再び北へ延びる。南北溝SDI347は屈折部分より北の区間を指し、その北端は山田道南側溝SD4275・4285に接続する(図56)。SDI347はかねてより基幹排水路と考えられ、北で西にやや振れる。

南北素掘溝SDI347Aは最大幅約2.4m、第14次調査区北壁における深さは約0.5mである。第14次調査区では、SDI347Aの埋土は大きく下層・中層・上層に大きく分かれる。詳細は「紀要2022」に記した<sup>2)</sup>ので割愛するが、上層はSDI347Aを埋め立てた整地土(埋立土)であり、SDI347Aの流路よりもやや幅の広い範囲に堆

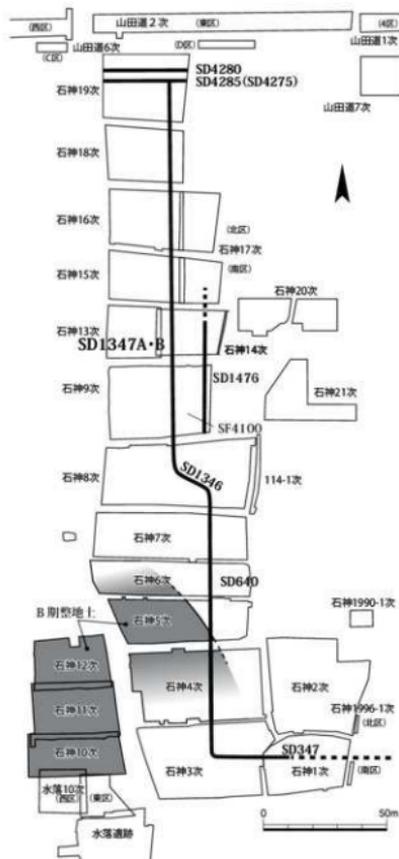


図58 石神遺跡調査区とSDI347A・Bの経路 1:2000

積していた<sup>3)</sup>。SDI347Aが埋め立てられた後、わずかに東側にずらして南北石組溝SDI347Bが掘削された。第14次調査区の中央付近でSDI347を横断する断面トレンチの土層図から、SDI347Bは幅1.7m程度、調査時には深さ0.2m程度しか残存していなかったことがわかる(図57)。SDI347Bの埋土もまた、下層・中層・上層に分けられた。下層・中層は任意の区分であり、青灰色から灰褐色の粗砂からなる。本報告ではこれらを「下層」

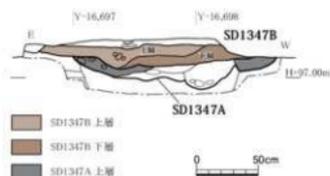


図57 石神遺跡第14次調査区中央部SD1347北壁土層図 1:40

として一括する<sup>4)</sup>。上層は、炭化物が混じる灰色砂質土からなる。下層は機能時の堆積土、上層は埋立土と考えられる。

### 3 SD1347A 上層出土土器

第14次調査区のSD1347A上層から出土した土器は、整理用木箱21箱分および整理用コンテナ12箱分である。破片数で総計5,745点(土師器4,435点、須恵器1,310点)を数える<sup>5)</sup>。SD1347A下層と同様に、土師器に対する須恵器の出土比率が顕著に低い特徴がある(前稿)。このうち、口縁部や底部などの特定部位の破片であり、大まかにでも器種分類できた古代の土器は全体の約27%、計1,566点(土師器1,092点、須恵器474点)であった。土師器は、供膳具に杯A、杯B、杯蓋、杯C、杯G、杯H、皿A、皿B、皿蓋、鉢A、鉢B、鉢C、鉢H、大型鉢、高杯A、高杯C、高杯G、貯蔵具に壺B、煮炊具に甕、鍋、甌、甕がある。土師器の供膳具と煮炊具の比率は、約2:1である。須恵器は、供膳具に杯A、杯B、杯G、杯G蓋、杯H、杯H蓋、杯蓋、皿A、皿B、皿蓋、碗A、鉢A、鉢D、鉢E、鉢F、甕、高杯があり、貯蔵具に壺A、壺A蓋、細頸壺、平板、甌、横板、甕がある。須恵器では、供膳具の比率が全体の約80%に達する。この他、クワ土師器の杯小片が3点みられた。なお、図示できた資料の口縁部残存率は土師器で平均約21%(約77)、須恵器で平均約33%(約118<sup>6)</sup>)を示している。SD1347A下層出土土器群と比べると、土師器の口縁部残存率はこれに及ばないが、須恵器の口縁部残存率はやや良好である。

**土師器**(図58) 1~4は杯A。口径<sup>6)</sup>が150mm未満の小型(1)と150mm以上175mm未満の中型(2~4)に概ね分けられる。径高指数は、小型品(1)が

23.8と浅手である一方、中型品(3・4)がそれぞれ30.1、31.5とやや深い。1・3・4は、底部外面をヘラケズリし、口縁部外面にはヘラミガキを施す。これらの内面には二段放射暗文がみられ、1の底部内面には螺旋暗文を施す。2は底部外面をヘラケズリし、口縁部外面をナデで仕上げる。内面にはやや幅広の一段放射暗文がみられる。

5~12は杯C。口径が小さいほうから、①120mm未満(5)、②120~140mm(6~9)、③150~160mm(10・11)、④170mm以上(12)に概ね分かかれ、②がもっとも多い。径高指数は、①が25.7、②の平均値が24.1(中央値22.4、最大値29.1、最小値21.0)、③の平均値が24.8(10が26.1、11が23.5)、④が24.5である。ただし、8と10の径高指数は他資料よりも大きく、それぞれ29.1、26.1を示す。ヘラケズリによる底部外面の仕上げ(7・10~12)は口径150mm以上的大型品に顕著である一方、口径140mm以下の小型品では底部外面を不調整として指頭痕を残すもの(5・6・8・9)が一般的である。5・8の底部内面には螺旋暗文がみえる。12の内面には左上がりの一段放射暗文を施す。

13・14は杯G。底部外面に指頭痕を残す。15・16は杯H。底部外面をヘラケズリし、外面に顕著な屈曲がみられる。

18~21は皿A。口径は205~240mmに収まる。底部外面をヘラケズリするもの(19・20)と、指頭痕を残して軽くナデ調整するもの(18)または不調整とするもの(21)がある。19は他に比べてやや深手である。20の底部内面には螺旋暗文がみられる。

22は皿B。復元口径は185mmとやや小ぶりである。内面に一段放射暗文をとまなう。外面をナデ調整で仕上げる。17は皿蓋。復元外径径292mm。頂部外面に細いヘラミガキを施す。

23は鉢A。口縁部および胴部外面に横方向のヘラミガキを密に施す。内面には、一段放射暗文が部分的にみられる。復元口径256mm。

24・25は鉢H。いずれも底部外面をヘラケズリする。25は口縁部が短く、器壁がやや厚い。

26は大型鉢。底部外面にヘラケズリを施し、口縁部から底部外面にかけて横方向のヘラミガキで仕上げる。内面には二段放射暗文がみられる。復元口径338mm。

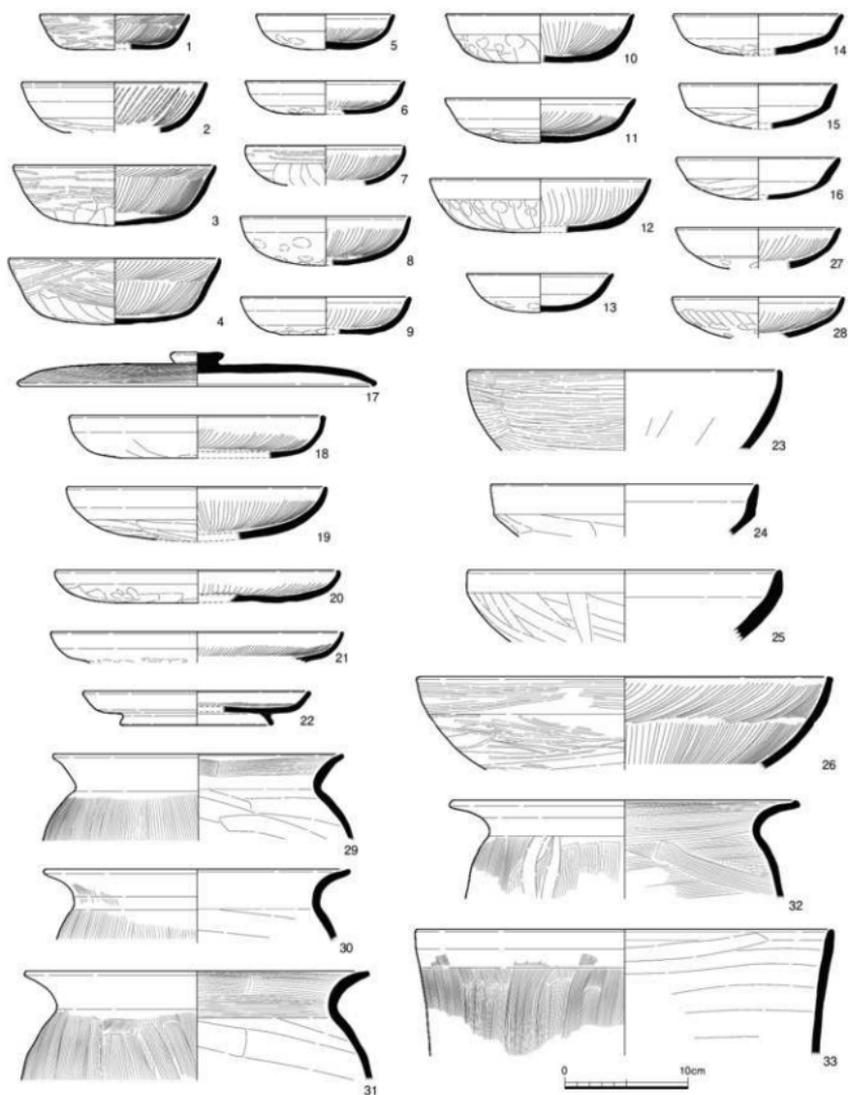


図 56 南北溝 SD1347A 上層出土土師器 1 : 4

27・28は高杯C。脚部は欠損するが、杯部の外形から高杯と判断した。27は底部外面に横方向の段がみられ、これよりも下位に指頭痕を散発的に残す。復元口径134mm。28は底部外面下半に左上がりのナデを施し、底面には指頭痕を残す。復元口径140mm。いずれも内面には一段放射暗文を施す。

29～32は甕。いずれも胴部外面をタテハケで調整する。胴部内面は、29～31では横方向のヘラナデで仕上げ、32ではヨコハケにより調整する。30を除き、口縁部内面にはヨコハケを施す。

33は瓶。胴部外面にタテハケ、胴部内面に横方向のヘラナデを施す。

須臾器(図59・60) 51～56は杯A。口径が小さいほうから、95～110mm(51～53)、130～160mm(54・55)、199mm(56)に分かれ、比較的小型品が多い傾向がある。底部外面をヘラ切り後にナデを施すもの(51～54)と、ロクロケズリで仕上げるもの(55・56)があり、後者は比較的大型である。56は口縁部の複数箇所に淡い煤痕が残ることから、灯明器として利用されたと考えられる。

57～62は杯B。口径が小さいほうから、103mm(57)、135～159mm(58～60)、177mm(61・62)に分かれる。底部外面は、ロクロケズリで仕上げるもの(59・61・62)が目立ち、他に、ヘラ切り不調整とするもの(58)とヘラ切り後にナデを施すもの(60)がある。57は底面が欠損し調整は不明であり、口縁部外面に薄い降灰がみられる。59は転用碗であり、底部外面に墨痕が残る。61の口縁部外面には薄い降灰がみられる。なお、61・62はその形態の特徴と質感に鑑みて、尾張産の可能性が有る。

34～50は杯蓋。34～43はかえりをもつ杯蓋、44～50はかえりをもたない杯蓋。かえりをもつ杯蓋の外端径は、図示した資料中では113mm(34)が最小値、171mm(43)が最大値であり、149～165mm(35～42)に集中する。38の外面には薄い降灰がみられ、41・43の外面には自然釉が降着する。37・40の内面には墨痕を残し、このうち37は転用碗と考えられる。かえりをもたない杯蓋の口径は140～155mm(44～48)に集中し、この他に180mm前後の大型品(49・50)がある。44の口縁部外面には重ね焼きの痕跡あり。48・49の外面全体には

薄い降灰がみられ、49では一部で自然釉の降着も観察できる。

63は皿A。復元口径266mm。口縁部下半から底部外面にかけてロクロケズリで仕上げる。

64は皿B。復元口径262mm。底部外面をロクロケズリで仕上げる。

65～67は椀A。口径は、65が131mm、66が166mm、67が172mmであり、66のみが実測値である。いずれも底部外面をロクロケズリで仕上げる。なお、66は他に比べて深手である。67は、その形態と質感に鑑みて、尾張産の可能性が有る。

68は鉢D。8世紀によくみられる器種であり、7世紀では希少である。外面は、胴部下半から底部にかけてロクロケズリで仕上げる。底部内面には不定方向のナデを施す。8世紀の資料は平底であるが、68は丸底の可能性が有る。

69は鉢F。胴部外面下半はロクロケズリで仕上げ、胴部内面下半はナデにより調整する。外面には部分的な降灰がみられる。

70は壺A。肩部にやや大きめの耳状把手が付く。肩部外面全体に降灰がみられ、部分的に釉化する。71は壺A蓋。頂部はロクロケズリにより仕上げたと思われる。外面全体に自然釉が薄く降着する。頂部内面にヘラ記号あり。

72は細頸壺の口頸部。全体に強めのロクロナデが施される。内外面全体に自然釉が薄く降着する。

73～77は甕。73は外反する口縁部をもつ甕。74・75は外反する口頸部と内側に屈曲する口縁部をもつ甕。74は、胴部外面をロクロナデ、胴部内面をヘラナデにより仕上げる。外面には自然釉がやや厚く降着する。75は、胴部外面を平行タタキの後にカキ目調整し、胴部内面には同心円状の当て具痕がみられる。76は内彎する口縁部と平坦な口縁部をもつ甕。胴部外面は平行タタキおよび格子タタキがロクロナデにより磨り消され、胴部内面も工具痕がロクロナデにより磨り消されている。77は直立する口縁部をもつ甕。胴部外面には、平行タタキの後にカキ目が施され、胴部内面には同心円状の当て具痕をロクロナデにより磨り消した痕跡が観察できる。工具痕の磨り消しに鑑みて、76・77は尾張産の可能性が有る。

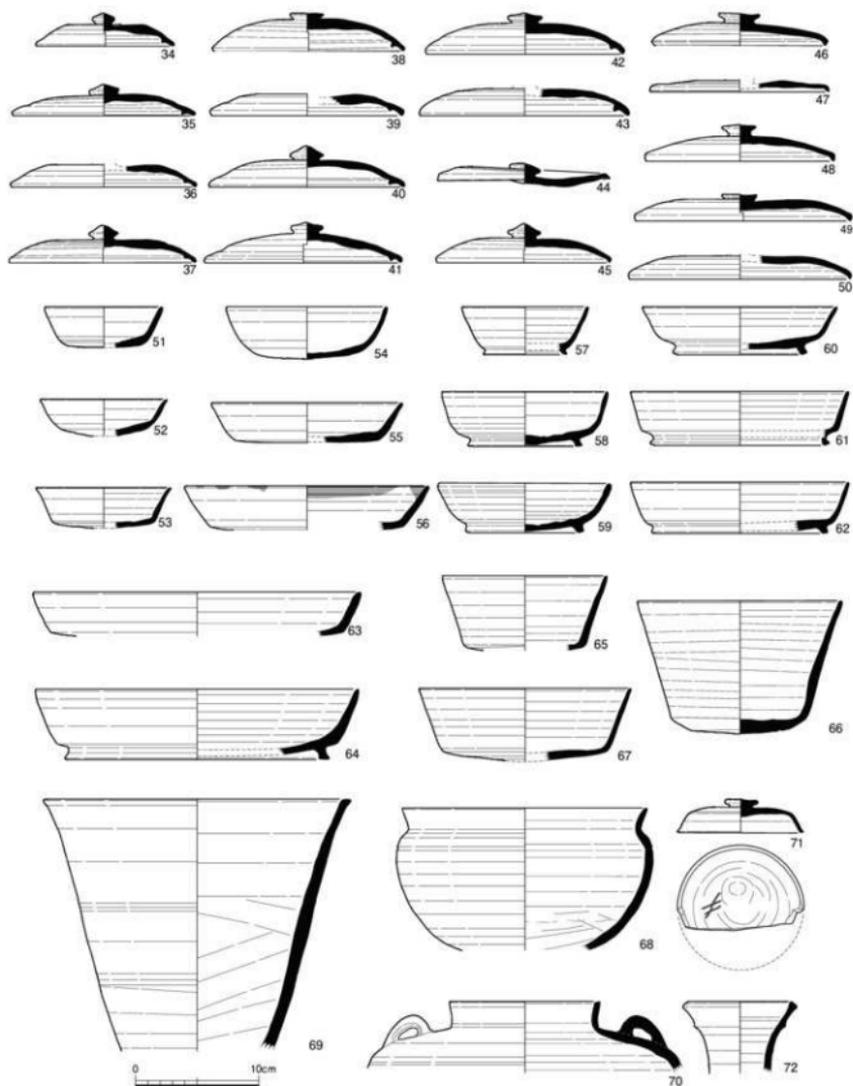


図 59 南北溝 SD1347A 上層出土須恵器 (1) 1 : 4

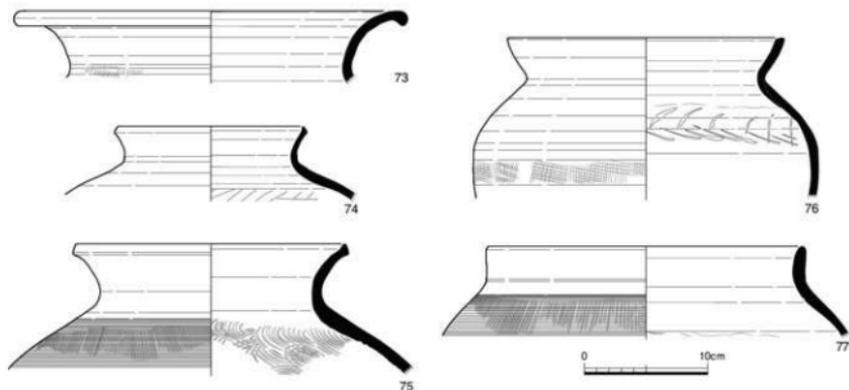


図60 南北溝 SD1347A 上層出土須恵器(2) 1:4

#### 4 SD1347B 下層土出土土器

第14次調査区のSD1347B下層から出土した土器は、整理用コンテナで81箱分である。破片数にもとづくと、出土土器は総計14,958点(土師器10,829点、須恵器4,129点)を数える。SD1347A埋立土とはやや異なり、土師器に対する須恵器の出土比率がわずかに増加している。これらのうち、口縁部や底部などの特定部位の破片であり、大まかにでも器種分類できた古代の土器は全体の約26%、計3,880点(土師器2,474点、須恵器1,406点)であった。土師器は、供膳具に杯A、杯B、杯蓋、杯C、杯G、杯H、皿A、皿B、皿蓋、皿C、鉢A、鉢C、鉢H、大型鉢、高杯A、高杯C、高杯G、高杯H、盤A、貯蔵具に壺A、壺B、煮炊具に甕、甕蓋、鍋、瓶、甕がある。土師器の供膳具と煮炊具の比率は、約3:2である。須恵器は、供膳具に杯A、杯B、杯G蓋、杯H、杯H蓋、杯蓋、皿A、皿B、皿蓋、椀A、椀B、鉢A、鉢E、鉢F、盤、高杯があり、貯蔵具に壺A、壺A蓋、壺B、壺C、壺K、長頸壺蓋、平瓶、甕、横瓶、提瓶、甕がある。須恵器では、供膳具の比率が全体の約89%と極めて高い。この他、ロクロ土師器が28点認められた。すべて供膳具であり、須恵器の杯B、杯H蓋、鉢Aに相当する器種を含む。なお、図示できた資料の口縁部残存率は土師器で平均約23%(約83')、須恵器で平均約23%(約81')を示す。

SD1347A上層出土土器群と比較すると、土師器の口縁部残存率はほぼ同等であるが、須恵器の口縁部残存率はより低い。

**土師器**(図61・62) 81～86は杯A。口径が124mmの小型式(81)と口径160～185mmの中型式(82～86)に分類可能である。径高指数は底部まで残存する3点(81・82・85)から得られた。81と85がそれぞれ24.8、20.9と浅手である一方、82は27.7である。残存する外形に鑑みて、83・84・86の径高指数は82の数値と近いと思われる。85はかなり浅手であり、杯Cにも分類できそうであるが、口縁端部の形状や口縁部の立ち上がりから杯Aに分類した。図示したすべての杯Aの底部外面はヘラケズリされており、85を除き、口縁部外面を横方向のヘラミガキで仕上げる。85では、口縁部外面には横方向のナデのみが施される。内面には二段放射暗文が施されるが、85では一段放射暗文がみられる。81・84の底部内面には螺旋暗文がみられる。

78～80は杯蓋。いずれもつまみは現存しない。復元外径は、159mm(78)、176mm(79)、188mm(80)である。外面は、78・80がヘラミガキ、79がヘラケズリにより調整する。

86～103は杯C。口径が小さいほうから、①115～124mm(86・87)、②125～144mm(88～97)、③145～165mm(98～102)、④170mm以上(103)に概ね分けられるが、

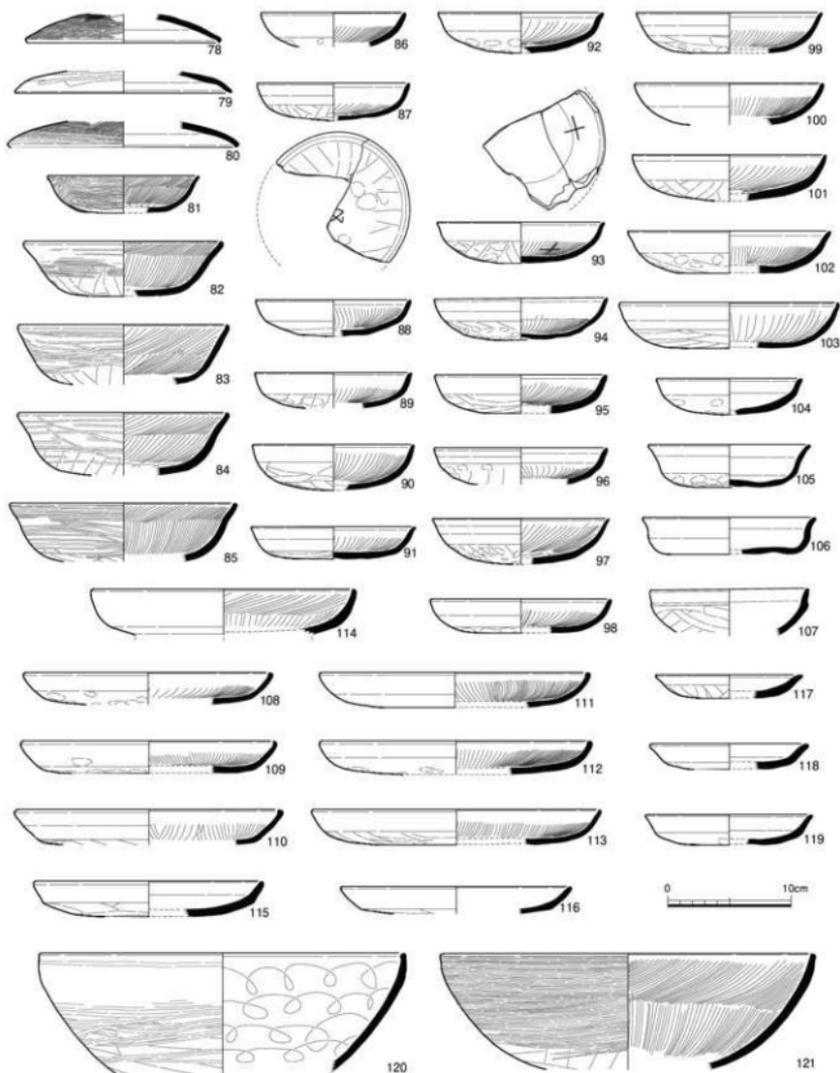


図61 南北溝 SD1347B 下層出土土師器(1) 1:4

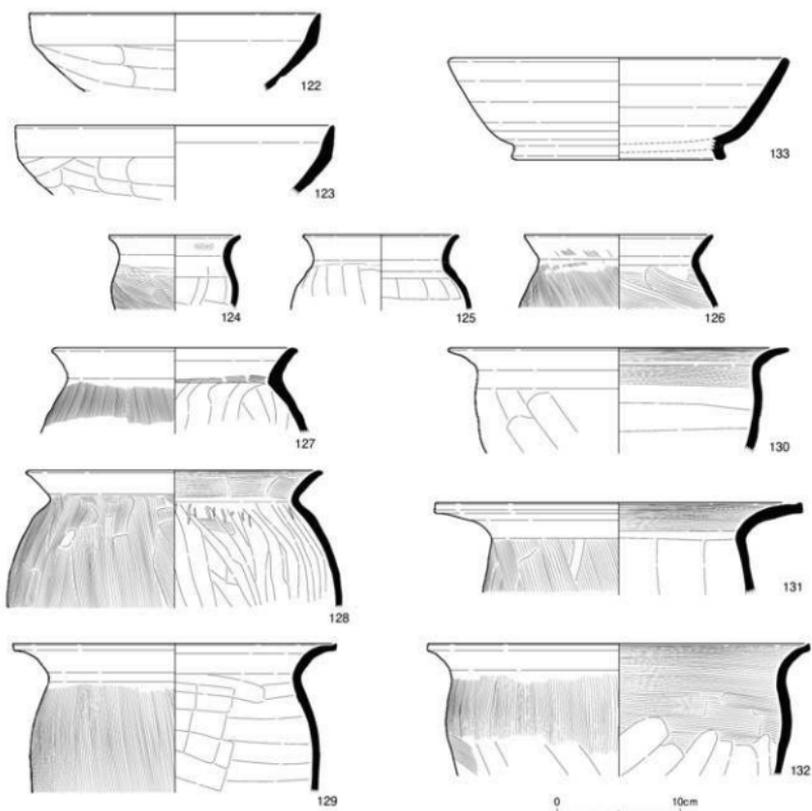


図62 南北溝SD1347B下層出土土師器(2) 1:4

漸移的に推移するため明確に区別することは難しい。径高指数は、①が249(88)、②の平均値が244(8点、中央値247、最小値199、最大値286、口縁部残存率平均31.2%)、③の平均値が206(3点、中央値210、最小値189、最大値220、口縁部残存率平均18.6%)、④が20.9(103)となり、口径が大きくなるほど浅手になる傾向が概ね認められる。底部外面は、口径の大小を問わず、ユビオサエの後にナデ調整(86・87・89・92～98・102)あるいはナデのみを施すもの(88・101)が主体を占めており、ヘラケ

ズリのみで仕上げるもの(90・103)やヘラケズリとナデを併用するもの(91・99・100)が少数認められる。87・92・94・96・97・101の底部内面には螺旋暗文がみられる。88・96は、内面に左上がりの一段放射暗文をもつ。87の底部外面中央には、「又」もしくは「又」を旁にもつ字の可能性がある刻書、あるいは記号がみえる<sup>7)</sup>。93の内面と102の底部外面中央には「十」のヘラ記号が見える。97・101の底部外面には葉脈圧痕を残す。

104～106は杯G。104は明赤褐色を呈し、底部外面

に指頭痕がみられる。105・106 はにぶい黄褐色あるいは暗灰黄色を呈する粗製の杯であり、強く外反する口縁部と平底が特徴的である。いずれも底部外面に指頭痕を残す。

107 は杯H。口縁部が短く、やや深手である。底部外面をヘラケズリにより調整する。

108～113 は皿A。復元口径は205～240mmに収まる。底部外面を、ユビオサ工後にナデで調整するもの(108・111～113)が多く、この他に、指頭痕のみ残すもの(109)とヘラケズリを施すもの(110)がみられる。109の底部内面には螺旋暗文がみえる。

114 は皿B。高台および底面の大半は欠損しているが、一部残存していた高台の剝離痕にもとづき分類した。復元口径は216mm。外面をナデ調整で仕上げ、内面には二段放射暗文を施す。

115・116 は皿H。復元口径は187mm(115)と188mm(116)である。底部外面をヘラケズリにより調整する。

117～119 は小型の皿。口径は119～135mmであり、径高指数は平均16.9である。いずれもにぶい黄褐色あるいは暗灰黄色を呈しており、杯Gに分類した105・106と胎土が類似する。口縁部は内外面ともにナデで調整し、底部外面はユビオサ工後にナデで仕上げる。

120・121 は大型鉢。外面は、下半部にヘラケズリを施した後、口縁部から底部付近にかけて横方向のヘラミガキで仕上げる。120の口縁部外面は器面の剝離が激しいが、ヘラミガキのわずかな痕跡を観察できる。120の内面には四段の螺旋暗文を施す。121の内面には二段放射暗文がみられる。

122・123 は鉢H。底部外面をやや粗いヘラケズリにより仕上げる。123は器壁がやや厚い。

124～126 は小型の甕。胴部外面は、124がヨコハケ、125がタテハケにより調整する。125の胴部外面は摩擦のため不明瞭であるが、タテハケ調整が施されていた可能性が高い。胴部内面は124・125がヘラナデ、126が左上がりのハケ目により調整する。

127 は中型の甕。復元口径200mm。胴部外面を細かいタテハケにより調整し、胴部内面を縦方向のヘラケズリにより仕上げる。

128～132 は、復元口径240mm以上のやや大型の甕。胴部外面は、縦方向のヘラナデを施す130を除き、タテ

ハケにより調整する。胴部内面は、縦方向のヘラケズリにより仕上げるもの(128)、横方向のヘラナデにより調整するもの(129・130)、縦方向のヘラナデにより調整するもの(131)、ヨコハケの後にナデを施すもの(132)がある。

**ロクロ土師器** (図62) 133は、須恵器の器種で杯Bに相当する。口縁部内外面をロクロナデで調整し、底部外面付近にはロクロケズリの痕跡を残す。復元口径277mm。

**須恵器** (図63・64) 140～145は杯A。口径が小さいほうから、110～120mm(140・141)、130～145mm(142～144)、199mm(145)に分かれる。比較的小型のものでは、底部外面をヘラ切り後に不調整とするもの(140・142)とナデを施すもの(141)がある。口径140mm以上の資料では、底部外面をロクロケズリで仕上げる(143～145)。143は外面に薄い降灰がみられ、部分的に釉化する。145は、その形態と質感から、尾張産の可能性がある。

146～154は杯B。口径が小さいほうから、135～145mm(146・147)、150～170mm(148～151)、175～180mm(152～154)に区分できる。比較的小型品では、底部外面をヘラ切り不調整とするもの(146・148・149)が目立つが、ヘラケズリとナデにより仕上げるものも稀に存在する(147)。口径160mm以上の資料では、底部外面をヘラケズリにより調整する(150～154)。147と152の外面には薄い降灰がみられ、147では部分的に自然釉が降着する。154は、杯底面が高台よりも下方に突き出る。

134～139は杯蓋。134・135はかえりをもつ杯蓋、136～139はかえりをもたない杯蓋。かえりをもつ杯蓋の外端径は、134が104mm、135が154mmである。134は杯Gの蓋と思われる。135は外面全体に薄い降灰がみられる。かえりをもたない杯蓋の口径は、145～165mm(136～138)に集まるが、口径181mmの大型品(139)も存在する。136・138の外面には薄い降灰がみられる。137の内面は全体的に黒変する。136は、その形態と質感から、尾張産の可能性がある。

155～160は椀A。口径を基準に、140～150mm(155～157)と160～185mm(158～160)に区分できる。図示したいずれの資料も、底部外面をロクロケズリにより仕上げる。158は、その形態と質感に鑑みて、尾張産と考えられる。161は丸底の椀。復元口径170mm。底部外面

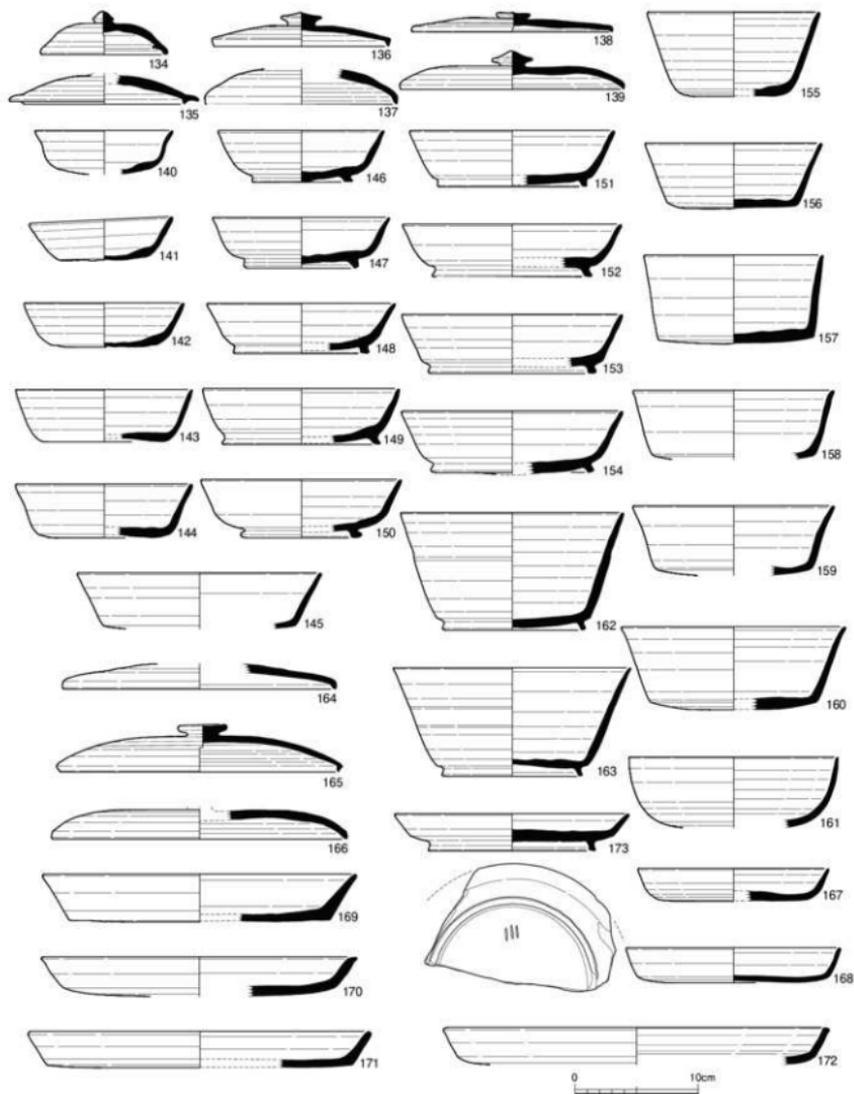


图 63 南北满 SD1347B 下層出土須惠器 (1) 1 : 4

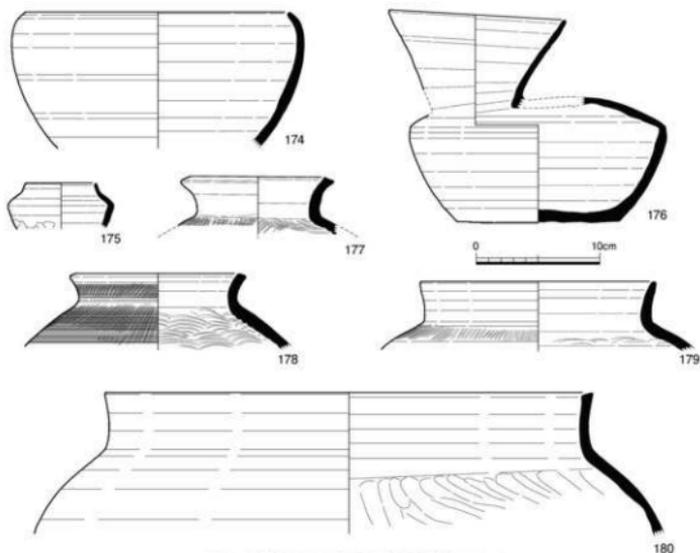


図64 南北溝 S1347B 下層出土須恵器(2) 1:4

をロクロケズリで仕上げる。

162・163は椀B。口径は、162が178mm、163が193mmである。いずれも胴部下半から底部外面にかけてロクロケズリで仕上げた後、高台を取り付けている。

167～172は皿A。口径155～175mmの小型品(167・168)と口径255～315mmの大型品(169～172)に区分できる。いずれも底部外面をロクロケズリで仕上げる。168の外面に薄い降灰がみられる。171の底部内面に、磨り消された同心円状当て具痕がわずかに残る。

173は皿B。口径は190mmと小ぶりである。底部外面にロクロケズリを施す。底部外面にヘラ記号あり。

164～166は皿蓋。口径は220～240mmに収まる。164の外全面に自然釉が降着する。166の口縁部内面には、重ね焼きの痕跡と思しき黒変がみられる。

174は鉢A。胴部外面下位をロクロケズリで仕上げる。

175は壺C。胴部外面下半を横方向のヘラケズリで調整する。肩部外面には薄い降灰がみられ、重ね焼きの痕跡が残る。壺蓋を被せて焼成した痕跡であろう。

176は平瓶。同一個体であるが、口頸部片と胴部片は

接合しない。底部付近の胴部外面にロクロケズリを施し、底部外面には指頭痕を残す。口縁部内外面に薄い自然釉の降着がみられ、胴部内外面には薄い降灰あり。

177は横瓶。口縁部と肩部の一部が残存する。肩部外面に格子タキを施し、肩部内面に同心円状当て具痕を残す。外面の一部に自然釉が降着し、口縁部内面には降灰と部分的な釉化がみられる。

178～180は甕。178は外反する口縁部をもつ甕。胴部外面に平行タキを施した後にカキ目で仕上げ、胴部内面には同心円状当て具痕を残す。179・180は直立する口縁部をもつ甕。179は、胴部外面に平行タキを施した後に、ロクロナデにより磨り消す。胴部内面の同心円状当て具痕も、ロクロナデにより磨り消される。180は、口縁端部が内傾する平坦面をなす。胴部外面を強めのロクロナデにより仕上げ、胴部内面にはロクロナデの後にやや不規則な左上がりのナデを施す。元来の調整痕を磨り消した可能性も考えられる。調整痕の磨り消しに鑑み、179・180ともに尻張産の可能性がある。

## 5 SD1347B 上層出土土器

第14次調査区のSD1347B上層から出土した土器は、整理用コンテナで42箱分である。破片数にもとづくと、出土土器は総計8,679点（土師器6,259点、須恵器2,420点）を数える。土師器に対する須恵器の出土比率は、SD1347B下層の場合とほぼ同様である。上記のうち、口縁部や底部などの特定部位の破片であり、大まかにでも器種分類できた古代の土器は全体の約24%、計2,056点（土師器1,239点、須恵器817点）であった。土師器は、供膳具に杯A、杯B、杯蓋、杯C、杯G、杯H、皿A、皿B、皿蓋、鉢A、鉢C、鉢H、大型鉢、高杯A、高杯C、高杯H、盤A、貯蔵具に壺A、壺B、煮炊具に甕、甕、甕、甕がある。土師器の供膳具と煮炊具の比率は、約2:1である。須恵器は、供膳具に杯A、杯B、杯G蓋、杯H、杯H蓋、杯蓋、皿A、皿B、皿蓋、椀A、椀B、鉢A、鉢F、盤、高杯があり、貯蔵具に壺A、壺A蓋、壺B、壺C、壺K、長頸壺蓋、細頸壺、平瓶、甕、提瓶、甕がある。須恵器では、供膳具の比率は全体の約88%であり、SD1347B下層とほぼ同様の高い数値を示す。この他、ロクロ土師器の杯小片が15点認められた。これらは供膳具と貯蔵具からなり、須恵器の杯H、皿、甕に相当する器種を含む。なお、図示できた資料の口縁部残存率は土師器で平均約18%（約64°）、須恵器で平均約23%（約84°）であり、あまり良好な残存状況とはいえない。

**土師器**（図65） 181・182は杯A。口径は、181が119mm、182が183mmであり、径高指数はそれぞれ24.7と30.5となる。いずれも底部外面にヘラケズリを施し、口縁部外面を横方向のヘラミガキで仕上げる。内面には二段放射暗文が施され、182では底部内面に螺旋暗文がみられる。

183～187は杯C。口径にもとづき、110～130mm（183・184）、145～165mm（185・186）、192mm（187）に概ね区分できる。底部まで残存する2点の径高指数はそれぞれ、28.9（183）および28.3（186）である。図示した資料はいずれも、底部外面をユビオサエの後にナデにより仕上げる。186のみ、口縁部外面にヘラミガキを施す。183・185・186の内面には、左上がりの一段放射暗文がみえる。

188は杯G。口縁部の外反は弱く、底部外面に指頭痕を残す。

189は鉢A。底部外面をヘラケズリにより調整し、口

縁部外面を横方向のヘラミガキで仕上げる。内面には暗文がみられない。

190は鉢H。底部外面をヘラケズリにより調整する。

191～193は小型の甕。いずれも胴部外面をタテハケで調整するが、胴部内面にヘラナデを施すもの（191・193）とヘラケズリにより仕上げるもの（192）がある。

194は中型の甕。胴部外面をタテハケにより調整し、胴部内面は横方向のヘラナデの後、下半部をハケ目により仕上げたと思われる。

195～197は大型の甕。胴部外面をタテハケ調整、胴部内面をヘラナデにより仕上げる。

198は甕B。胴部中位に取り付く把手は、先端部分が欠損する。胴部外面にはやや長いストロークのタテハケを施し、胴部内面を横方向のヘラナデにより調整する。須恵器（図11）204は杯A。口径は138mmである。底部外面をロクロケズリで調整する。底部内面の一部に降灰と自然軸の降着がみられる。

205～212は杯B。口径が小さいほうから、140～155mm（205～210）、190～250mm（211・212）に区分できる。底部外面をロクロケズリにより仕上げるもの（206・209・211・212）とヘラ切り不調整とするもの（207・210）がある。須恵器（図66）199～203は杯蓋。199～201はかえりをもつ杯蓋、202・203はかえりをもたない杯蓋。かえりをもつ杯蓋の外端径は、199が96mm、200が155mm、201が160mmである。199は杯G蓋と考えられる。200の外表面には薄い降灰がみられる。201は特徴的な陣笠形を呈する。かえりをもたない杯蓋の口径は、202が111mm、203が167mmである。202の外表面には薄い降灰がみられる。

213・214は椀A。口径はいずれも142mmである。底部外面をロクロケズリにより仕上げる。213は、その形態と質感から、尾張産の可能性が高い。

215・216は皿A。口径は、215が162mm、216が305mmである。いずれも底部外面をロクロケズリで仕上げる。形態と質感から、215は尾張産の可能性が高い。

217は鉢A。底部付近をロクロケズリで仕上げる。

218は壺A蓋。口径は91mm。降灰の影響か、外面の大部分が荒れる。

219は双耳壺。あまり見られない器種である。胴部外面を平行タタキとやや粗いカキ目により調整し、胴部内面を縦方向および左上がりのヘラナデにより仕上げる。

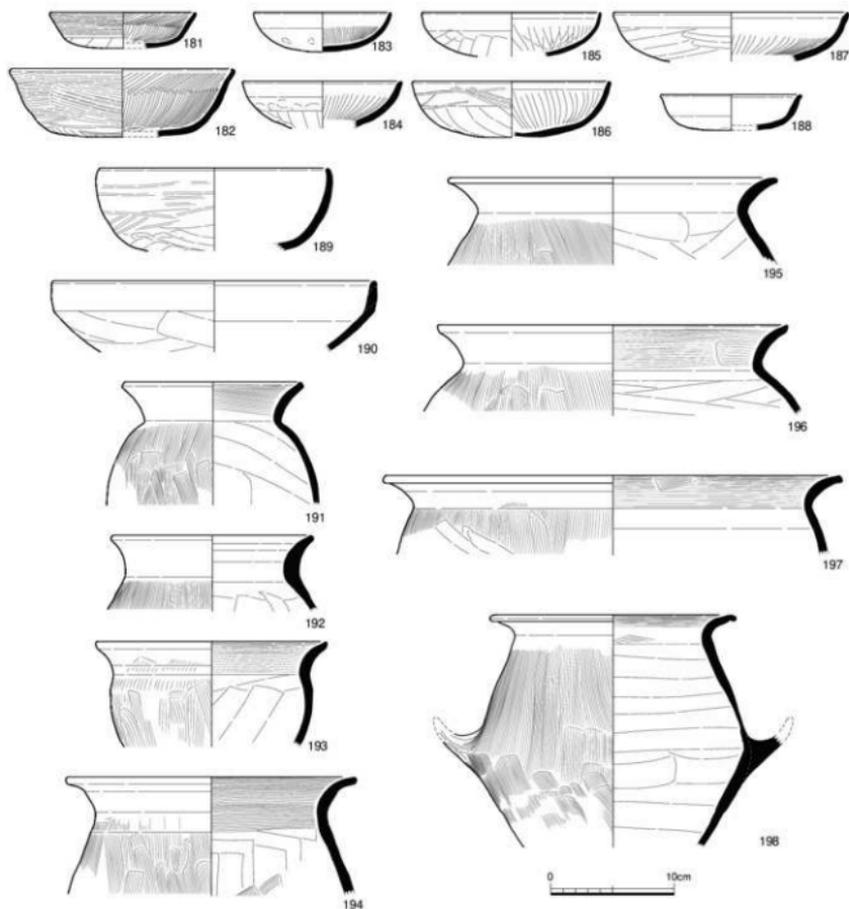


図 65 南北溝 SD1347B 上層出土土器類 1 : 4

把手は縦方向のヘラケズリにより調整する。胴部外面に薄い降灰がみられる。

## 6 SD1347 出土土器群の変遷

今回対象とした飛鳥Ⅳの土器群に前稿で報告した SD1347A 下層出土土器群をあわせて、以下では、石神遺

跡における飛鳥Ⅳの土器群の統計的変遷と型的特徴を確認しておきたい。

**統計的検討** 石神遺跡第 14 次調査 SD1347A・B 出土土器のうち、器種がある程度判明したものの個体数を示した(表 10)。なお、比較のため、第 14 次調査区の SD1347A 下層出土土器の個体数も右側に併記する。

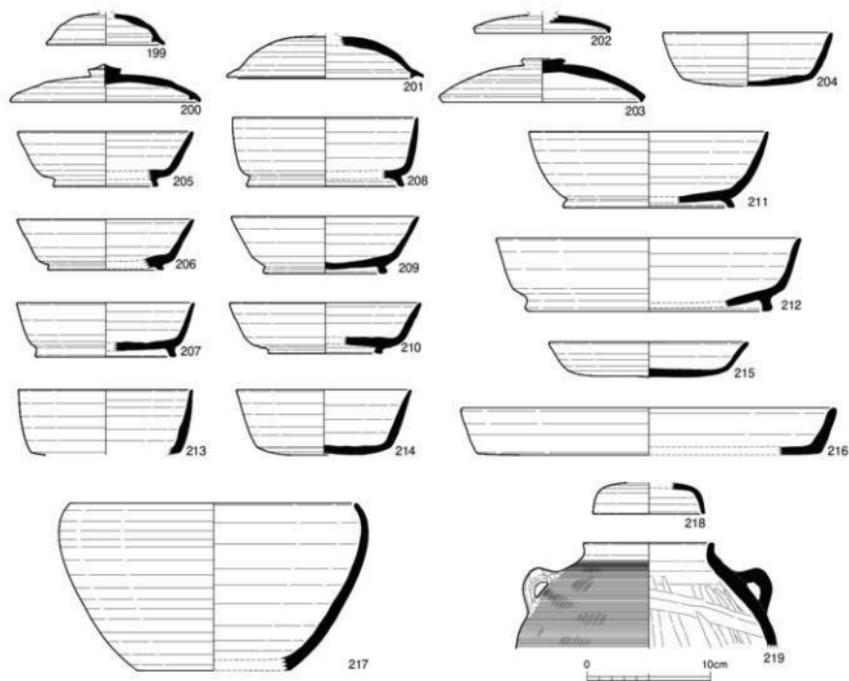


図 66 南北溝 SD1347B 上層出土須恵器 1 : 4

この表によれば、全体的な傾向として、須恵器の比率が徐々に増加することがわかる。具体的には、SD1347A 上層では土師器と須恵器の比率が 23 : 1 であったが、SD1347B 下層では 18 : 1 となり、SD1347B 上層では 15 : 1 にまで数的格差が縮小する。これに、前稿にて公表した SD1347A 下層出土土器のデータ (3 : 1) をあわせると、時期を追って漸進的に推移することが明確に理解できる。

土師器をみると、杯 C の出土数が概して多いことにまず目が行くが、他の杯類では杯 H の出土比率の推移が特徴的である。杯 H の供膳具全体における比率は、SD1347A 下層では約 5 % であるが、SD1347A 上層で 10 % にまで増加する。その後は減少に転じ、SD1347B 下層で約 3 %、SD1347B 上層では約 2 % にまで落ち込む。

これらのほか、高杯 A が SD1347B において SD1347A よりも高い頻度で出土する傾向がある。なお煮炊具では、SD1347B において甕の出土が目立つ。

須恵器では、杯蓋以外の供膳具のみで杯 A・B が概して目立つ。杯 B の出土数に高台の出土数をあわせた場合にも、SD1347A・B いずれの土層においても須恵器全体の 11 ~ 12 % の比率を示し、変化はみられない。もっとも多く出土した杯蓋は、SD1347A 下層・上層では全体の 17 % を占め、SD1347B 下層では 21 %、SD1347B 上層では 23 % に増加する。また、かえりをもつ杯蓋ともたない杯蓋の比率は、溝毎に異なる。SD1347A 下層・上層では両者の比率はおおよそ 1 : 1 であるが、SD1347B 下層では約 1 : 4、SD1347B 上層では 1 : 3.3 となり、かえりをもつ杯蓋の比率が 25 % を割り込む状況がみ

表10 第14次調査SD1347A下層・上層およびSD1347B下層・上層出土土器の器種組成

土師器(個体数)	SD1347A 下層	SD1347A 上層	SD1347B 下層	SD1347B 上層	須恵器(個体数)	SD1347A 下層	SD1347A 上層	SD1347B 下層	SD1347B 上層
杯A	11 (1.4)	10 (0.9)	12 (0.5)	4 (0.3)	杯A	18 (7.0)	23 (4.9)	32 (3.7)	19 (2.3)
杯B	0 (0)	2 (0.2)	0 (0)	0 (0)	杯B	13 (5.0)	14 (3.0)	35 (2.5)	18 (2.2)
杯B (高台のみ)	10 (1.3)	19 (1.7)	37 (1.5)	20 (1.6)	杯C	0 (0)	1 (0.2)	0 (0)	0 (0)
杯蓋	15 (1.6)	27 (2.4)	37 (1.5)	34 (2.7)	杯H	0 (0)	6 (1.3)	4 (0.3)	4 (0.5)
杯蓋 杯A/B (細分不可)	78 (9.9)	140 (12.8)	353 (14.3)	153 (12.3)	杯G蓋	7 (2.7)	7 (1.5)	9 (0.6)	2 (0.2)
杯C	228 (28.8)	243 (22.3)	487 (19.7)	223 (18.0)	杯H蓋	1 (0.4)	4 (0.8)	11 (0.8)	5 (0.6)
杯G	32 (4.0)	67 (6.1)	143 (5.8)	88 (7.1)	杯蓋 (かえり有)	25 (9.7)	38 (8.0)	60 (4.3)	43 (5.3)
杯H	27 (3.4)	53 (4.9)	42 (1.7)	18 (1.5)	杯蓋 (かえり無)	20 (7.7)	40 (8.4)	236 (16.8)	146 (17.9)
皿A	8 (1.0)	5 (0.5)	35 (1.4)	3 (0.2)	杯蓋 (細分不可)	13 (5.0)	14 (3.0)	15 (1.1)	45 (5.5)
皿B	0 (0)	6 (0.5)	10 (0.4)	4 (0.3)	杯・腕口縁部 (細分不可)	66 (25.5)	139 (29.3)	505 (35.9)	264 (32.3)
皿・ 皿蓋	2 (0.3)	0 (0)	10 (0.4)	3 (0.2)	杯・腕高台 (細分不可)	15 (5.8)	38 (8.0)	129 (9.2)	75 (9.2)
皿H	0 (0)	0 (0)	2 (0.1)	0 (0)	皿A	2 (0.8)	5 (1.1)	18 (1.3)	7 (0.9)
小型皿	0 (0)	0 (0)	6 (0.2)	0 (0)	皿B	0 (0)	1 (0.2)	11 (0.8)	7 (0.9)
鉢A	8 (1.0)	10 (0.9)	20 (0.8)	8 (0.7)	皿蓋 (かえり有)	0 (0)	0 (0)	2 (0.1)	1 (0.1)
鉢B	0 (0)	2 (0.2)	0 (0)	0 (0)	皿蓋 (かえり無)	3 (1.2)	5 (1.1)	23 (1.6)	6 (0.7)
鉢C	0 (0)	1 (0.1)	1 (0)	2 (0.2)	皿A/B (細分不可)	5 (1.9)	7 (1.5)	12 (0.9)	8 (1.0)
鉢H	27 (3.4)	9 (0.8)	41 (1.7)	14 (1.1)	腕A	7 (2.7)	4 (0.8)	17 (1.2)	7 (0.9)
大型鉢	1 (0.1)	1 (0.1)	13 (0.5)	14 (1.1)	腕B	0 (0)	0 (0)	4 (0.3)	3 (0.4)
片口付鉢	1 (0.1)	0 (0)	1 (0)	1 (0.1)	鉢A	5 (1.9)	5 (1.1)	27 (1.9)	13 (1.6)
高杯A	1 (0.1)	2 (0.2)	24 (1.0)	11 (0.9)	鉢D	0 (0)	1 (0.2)	0 (0)	0 (0)
高杯C	1 (0.1)	1 (0.1)	13 (0.5)	2 (0.2)	鉢E	1 (0.4)	2 (0.4)	2 (0.1)	0 (0)
高杯G	0 (0)	1 (0.1)	3 (0.1)	0 (0)	鉢F	0 (0)	1 (0.2)	13 (0.9)	6 (0.7)
高杯H	0 (0)	0 (0)	3 (0.1)	1 (0.1)	鉢 (細分不可)	1 (0.4)	1 (0.2)	10 (0.7)	10 (1.2)
高杯脚部	63 (8.0)	44 (4.0)	35 (1.4)	29 (2.3)	盤	1 (0.4)	2 (0.4)	8 (0.6)	10 (1.2)
甗A	0 (0)	0 (0)	3 (0.1)	1 (0.1)	高杯	4 (1.5)	2 (0.4)	14 (1.0)	10 (1.2)
甗	5 (0.6)	0 (0)	3 (0.1)	3 (0.2)	高杯脚部	15 (5.8)	18 (3.8)	31 (2.2)	13 (1.6)
甗B	1 (0.1)	3 (0.3)	5 (0.2)	4 (0.3)	甗A	4 (1.5)	1 (0.2)	2 (0.1)	4 (0.5)
甗A	5 (0.6)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	甗A蓋	3 (1.2)	3 (0.6)	6 (0.4)	8 (1.0)
甗B	2 (0.3)	1 (0.1)	0 (0)	0 (0)	甗B	2 (0.8)	0 (0)	3 (0.2)	3 (0.4)
甗C	0 (0)	0 (0)	1 (0)	0 (0)	甗C	0 (0)	0 (0)	4 (0.3)	2 (0.2)
甗 (細分不可)	4 (0.5)	8 (0.7)	8 (0.3)	52 (4.2)	甗K	0 (0)	0 (0)	15 (1.1)	2 (0.2)
罍	0 (0)	0 (0)	1 (0)	2 (0.2)	長頸甗蓋	0 (0)	0 (0)	1 (0.1)	2 (0.2)
罍A	1 (0.1)	3 (0.3)	0 (0)	0 (0)	頸甗蓋	0 (0)	6 (1.3)	0 (0)	3 (0.4)
罍B	0 (0)	1 (0.1)	1 (0)	0 (0)	甗 (細分不可)	6 (2.3)	31 (6.5)	8 (0.6)	19 (2.3)
罍 (細分不可)	0 (0)	0 (0)	5 (0.2)	0 (0)	平瓶	2 (0.8)	11 (2.3)	30 (2.1)	12 (1.5)
煮炊具類口縁 (細分不可)	174 (22.0)	280 (25.6)	751 (30.4)	344 (27.8)	瓶	4 (1.5)	2 (0.4)	4 (0.3)	1 (0.1)
煮炊具類把手 (細分不可)	36 (4.6)	53 (4.9)	87 (3.5)	78 (6.3)	瓶蓋	1 (0.4)	1 (0.2)	1 (0.1)	0 (0)
瓶	14 (1.8)	20 (1.8)	32 (1.3)	8 (0.7)	甕瓶	0 (0)	0 (0)	2 (0.1)	2 (0.2)
甕	10 (1.3)	17 (1.6)	81 (3.3)	55 (4.4)	甕	15 (5.7)	41 (8.7)	134 (9.5)	37 (4.5)
計	794 (100)	1092 (100)	2474 (100)	1239 (100)	計	259 (100)	474 (100)	1406 (100)	817 (100)

\*1 ( )内は各溝出土土器群内での% (小数点第二位を四捨五入)を表す。  
\*2 土師器・須恵器ともに杯腕部・甗類の底部片・脚部片は除外している。

られる。鉢Fは出土数が少ないものの、SD1347Bにおいて比較的高い頻度で出土する傾向がある。貯蔵具では、平瓶の存在がやや顕著であり、SD1347A上層も含むこれより上の層位において出土数が多い。とくにSD1347B下層では、平瓶は貯蔵具全体(158点)の約19%も占めている。

**型式の特徴** 土師器杯Cおよび須恵器杯A・杯Bに較べて、今回扱った石神遺跡第14次調査SD1347A上層およびSD1347B下層・上層出土土器群の型式の特徴をおさえ、SD1347A下層出土土器群と比較する。

土師器杯Cは、SD1347A上層では口径150mm以上の

中・大型品において底部外面のヘラケズリが主に認められるものの、全体的にオサエのみによるものが目立つ。SD1347Bは下層・上層ともに、口径に関わらず底部外面をオサエとナデにより仕上げるものが主体を占める。SD1347下層では、口径130mm程度の小型品と口径150mm程度の中型品の中に底部外面にヘラケズリを施すものが少数存在するが、SD1347B上層には底部外面をヘラケズリするものは存在しない。口径140mm以上の中・大型品の径高指数は、SD1347A上層で平均24.7(3点、中央値24.5、最小値23.5、最大値26.1)、SD1347B下層で平均22.6(5点、中央値22.0、最小値18.9、最大値26.2)を示す。

SD1347A 下層が平均 24.2 (13 点, 中央値 23.7, 最小値 19.3, 最大値 32.9) であることから, 径高指数が低下する(浅手化する)方向に漸移したとはただちに評価はできない。しかし, SD1347A から SD1347B にかけて浅手化が進むことは指摘できるだろう。

須恵器杯 A は, SD1347A 上層において口径 110mm 未満の小型品が目立つが, SD1347B 下層では口径 110mm 未満の小型品が欠落して口径分布が平準化する。底部外面は, 口径 130mm 未満の小型品でへら切り不調整あるいはナデ, 口径 130mm 以上ではロクロケズリによる調整の頻度が高い傾向は SD1347A 下層出土の資料でも認められ, SD1347A および SD1347B で相違がみられない。

須恵器杯 B は, 須恵器杯 A に比べて概して大きい傾向がある。SD1347A 上層では口径 100 ~ 180mm 程度の個体, また, SD1347B 下層では口径 130 ~ 180mm の個体 (主体は口径 150 ~ 170mm) がやや漸移的にみられる。これに対して, SD1347B 上層では口径 140mm 未満の個体が欠落し, 口径 140 ~ 160mm の個体を中心に口径 190mm 超の個体が少数みられるようになる。なお, SD1347A 下層出土の須恵器杯 B も口径 140 ~ 160mm に集中するものの, 口径 140mm 未満の個体もみられた。以上から, SD1347A から SD1347B にかけて, 杯 B の口径は大型化したとみてよさそうである。

## 7 おわりに

石神遺跡第 14 次調査 SD1347A・B 出土土器群は, 時間的先後関係にある。その推移一般を特徴的に示すのは, 統計的には須恵器の比率の漸増やかえりのある杯蓋の漸減, 土師器高杯 A の増加, 型式的には土師器杯 C の浅手化と調整の簡素化, また, 須恵器杯 A・B の相対的な大型化 (小型品の欠落) であった。こうした諸変化は, 石神遺跡第 8・9 次調査 SD1347A・B 出土土器や, B 期整地土と SD640 出土土器の間でもほぼ同様に認められ, 石神遺跡 B ~ C 期における一般的なトレンドであったと解釈できる。他方で, 第 14 次調査 SD1347A では土師器杯 H, 第 14 次調査 SD1347B では壺がより多く, 第 8・9 次調査では SD1347A・B ともに土師器皿 A, SD1347B においてのみ須恵器皿 A がより多くの比率を占めるなど, 調査区間での傾向差もまた認められた。

各器種の一般的な変化は, 石神遺跡を含む宮都への土器の供給元の変化や, 宮都での需要の増大にあわせて生

産工房における土器製作法の最適化過程などを反映していると考えられ, 7 世紀後半から末にかけての複雑で動態的な土器生産・流通システムの一部を, そうした変化に見出すことできるだろう。また, 調査区間にみられた器種組成のわずかな差異は, 溝の近傍に所在した施設の機能差を暗示している。したがって, 以上の諸傾向は単純な型式変化とはみなしえず, 石神遺跡の歴史の変遷や各時期の社会的・経済的位置づけを十分に理解しない限り, 適切に読み解くことは叶わない。このような大きな課題は, 総合的な視野に立った継続的な研究により, 将来あきらかにされるべきである。

(山藤正敏)

## 注

- 1) 尾野裕祐・森川実・大澤正吾「飛鳥地域出土の尾張産須恵器」[紀要 2016]。尾野裕祐・森川実・大澤正吾「飛鳥地域出土の湖西宮産須恵器」[紀要 2017]。森川実・大澤正吾「石神遺跡 B 期整地土・SD640 出土の土器群 - 石神遺跡第 3 ~ 5 次・第 10 ~ 12 次」[紀要 2018]。土橋明梨紗「石神遺跡 SKI244・1245・1246・1247 出土の土器群 - 石神遺跡第 7 次」[紀要 2019]。土橋明梨紗「石神遺跡出土の東北系黒色土器 - 石神遺跡第 3 ~ 8・11 次」[紀要 2020]。山藤正敏「石神遺跡 SD1347・1476 出土の土器群 - 石神遺跡第 8・9 次」[紀要 2021]。山藤正敏「石神遺跡 SD1347A 出土の土器群・木簡 - 石神遺跡第 14・15 次」[紀要 2022]。
- 2) 前掲註 1 山藤「石神遺跡 SD1347A 出土の土器群・木簡 - 石神遺跡第 14・15 次」, 註 4 (126 頁)。
- 3) 本報告は, SD1347A 上層とみなしえる土層のうち, 石神遺跡 A3 期の南北北溝 SD900 に対応する「南北溝②」として掘削された土層の一部から出土した土器は除外している。これは, 当該土層の埋属時期が今なお不確定と考えられるからであり, これらの土層を SD1347A 上層と確定するためには, 当時の調査資料のさらなる検証が必要である。
- 4) 本報告で扱う「下層」には, SD1347B を指す「南北溝①」の「下層」および「中層」のほか, 「南北溝①」(取り上げ土層未記載) も含んでいる。取り上げ土層未記載の「南北溝①」は, 2 件を除いて「南北溝①上層」の掘削日 (2001 年 7 月 27・30 日) 以降の取り上げ日を示していることから, 取り上げ土層未記載の「南北溝①」は実質的に「南北溝①中層」および「南北溝①下層」と同義であると判断した。したがって本報告では, 取り上げ土層未記載の「南北溝①」出土土器を, SD1347B 下層出土土器として扱うことにする。
- 5) 破片数のカウントは, 接合関係をあくまでも「点」とした, 確実に同一個体と考えられる破片をまとめて「点」とした。詳細については, 前掲註 1 山藤「石神遺跡 SD1347・SD1476 出土の土器群 - 石神遺跡第 8・9 次」[紀要 2021]、註 5 (139 頁) を参照。
- 6) 本稿でいう「口径」とは, 口径部外端で計測した直径を指している。なお, かえりをもたない杯・皿蓋については, 下方に折り返した口径部外端の外縁で「外端径」を計測した。
- 7) 図 61 の 87 にある刻書の釈文は史料研究室による。

# 川原寺瓦窯産の瓦の再検討

## 一第119-5次

### 1 はじめに

川原寺瓦窯 SY595 は、2003 年に川原寺北辺部でおこなわれた飛鳥藤原第 119-5 次調査において検出された瓦窯である(図 67)。その遺構や遺物については、すでに報告書(以下「報告」と表記)が刊行され詳細がきらかとなっている<sup>1)</sup>。「報告」においては、川原寺瓦窯で生産された瓦を比定した上で、川原寺創建期の瓦窯として知られていた五條市荒坂瓦窯、「弘福寺三綱寮」の記載などから大和国広瀬郡に存在したと想定される仮称、広瀬郡瓦窯を加えた 3カ所を川原寺創建期の瓦窯とし、そのうち荒坂瓦窯がもっとも早く採業したことはあきらかであるが、残る二つの瓦窯の先後関係は不明とした。

筆者は近年、川原寺出土軒瓦の再整理と研究を継続的におこなっており、川原寺瓦窯についても遺構、遺物の再検討をおこなった。その成果の多くは「報告」の記載を追認するものであったが、いくつかの点を新たにきらかにすることができた。以下、その概要を報告する。

### 2 川原寺瓦窯 SY595 と関連遺構の概要

発掘調査により川原寺創建期の整地層(下層)と奈良時代の整地層(上層)が確認され、それぞれにともなう遺構が検出された。このうち川原寺瓦窯 SY595 は川原寺創建期の遺構であるが、瓦窯の北東およそ 5.0 m の位置では、奈良時代の遺構として瓦溜 SX594、およびこれと同時に設けられた石組暗渠 SX593 が検出された(図 68)。以下、「報告」の記載にしたがい概要を確認する。

川原寺瓦窯 SY595 は、調査区中央部の西壁に瓦窯先端の焚口部がかかる形で検出された(PL21-1)。窯体の大部分は調査区外の西側丘陵斜面に延びる。焚口は幅 1.2 m で約 10° の傾斜をもつ。前庭部には灰原が広がるが遺物を含まない。掘立柱建物群、創建期の灰群の炭層より下層に位置するため、採業時期は創建期にさかのぼる。瓦窯の上部は削平され窯壁が高さ約 20cm までしか残らない。瓦窯の埋没土には遺物を含まない。瓦窯埋没後の整地層からは、焙着した平瓦の塊(以下、焙着瓦と表記) 2 点のほか、平城 III 期の土器が出土した。

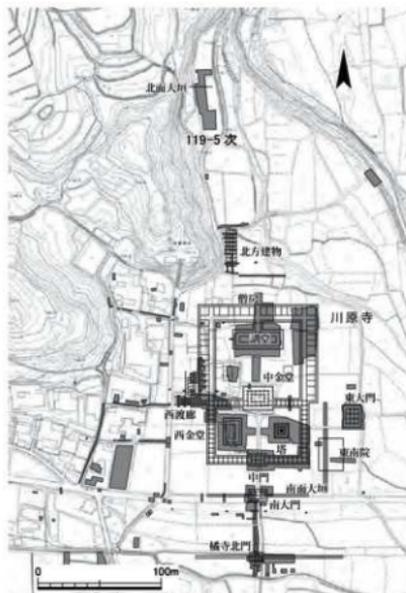


図 67 飛鳥藤原第 119-5 次調査区位置図 1:400

瓦溜 SX594 は瓦窯 SY595 の北東およそ 5.0 m に位置し、約 3.0 m 四方の範囲から生焼けの瓦や焼き歪みのある瓦を含む瓦片が大量に出土した。これらは瓦窯 SY595 で焼損した瓦と考えられるもの、出土した土器は瓦窯埋没後の整地層と同時期のため、奈良時代中頃に周辺一帯を整地した際に、すでに天井部が崩落していた瓦窯 SY595 を削平し、瓦を再廃棄した遺構と推測された。創建期の灰群の上層に位置する。このほか、瓦溜 SX594 の中央に設けられた東西方向の石組暗渠 SX593 があり、SX594 と同時につくられた遺構と考えられている。

以上のように、川原寺瓦窯 SY595 の窯体内や灰原などからは遺物が出土せず、瓦窯に関連する瓦溜 SX594 やそれと同時に設けられたと考えられる暗渠 SX593 も含め、出土状況から瓦窯で生産されたことが確定できる瓦はない。このことはすでに「報告」でも指摘されている。「報告」において、川原寺瓦窯で生産されたものと推定されたのは、焙着瓦、焼き歪みのある瓦、生焼けの瓦などである<sup>2)</sup>。



图 68 飛鳥藤原第 119-5 次調査遺構図 1 : 250 (左 : 創建期, 右 : 奈良時代)

### 3 川原寺瓦窯産の瓦

川原寺瓦窯産と推定された瓦の特徴は、すでに小谷徳彦氏があきらかにしている<sup>3)</sup>。今回、筆者も該当の資料を観察したが、小谷氏の観察結果と同様の見解に至った。以下、報告の記載および小谷分類にしたがい概要を説明する。なお、小谷分類は製作技法によるものであるため、これをまず説明したのち、胎土、焼成、色調の特徴を説明する。

#### (1) 丸・平瓦の特徴

焼着瓦には、平瓦が16枚焼着した塊と17枚焼着した塊があり、このほか瓦小片が焼着した平瓦も認められる(PL21-2)。いずれも凸面に密度13~15本/3cmほどの縄を使用したヨコ縄タタキを施す平瓦ⅢCであり、瓦窯SY595埋没後の整地層から出土した。焼き歪みのある瓦には、凸面にヨコ縄タタキないし叩き締めの方弧を描く縄タタキを施した後、タタキ目を磨り消す平瓦ⅠD、凸面に密度9~11本/3cmの縄を使用したヨコ縄タタキを施す平瓦ⅢB、凸面に密度9本/3cmの縄を使用した叩き締めの方弧を描く縄タタキを施す平瓦ⅣBがあり、これらは瓦窯SY595周辺から多く出土した。生焼けの瓦には、凸面にヨコ縄タタキを施したのち、ナデを施す丸瓦ⅠF、平瓦ⅣBがあり、これらは瓦溜SX594から集中して出土した(図69)。

ほとんどの平瓦には、凸面と側面の間、凹面と側面、両端面の間に面取りを施す。凹面は未調整で糸切り痕、布圧痕を明瞭に残すや、明確な模骨の枠板圧痕が認められない。色調は焼着瓦、焼き歪みのある瓦については暗青灰色から青灰色、生焼けの瓦は赤褐色から橙褐色を呈するものが多い。胎土はいずれも共通しており、粗い胎土で直径0.5cm以下の白色粒(長石)を非常に多く、直径1.0cm以下の白色粒(長石)をやや多く含む。

#### (2) 軒瓦、道具瓦の特徴

川原寺出土軒瓦の分類は、1960年刊行の報告書<sup>4)</sup>にしたがう。「報告」では、川原寺瓦窯産の軒瓦として、焼成不良の川原寺式軒丸瓦601型式C種(以下、川原寺601C

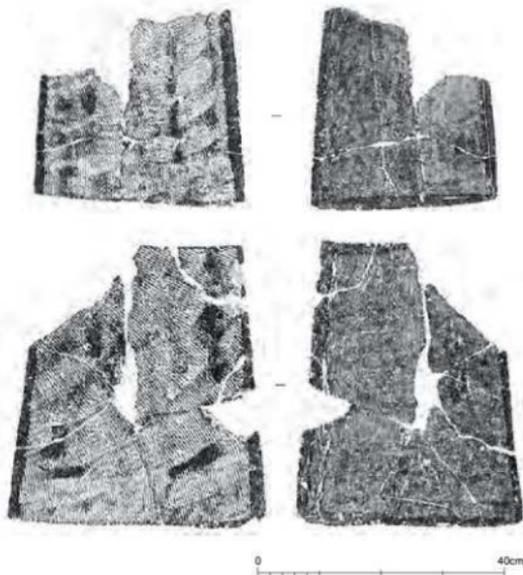


図69 瓦溜SX594出土平瓦ⅣB 1:1

と表記)、生焼けの川原寺式軒丸瓦608型式(以下、川原寺608と表記)のほか、これらと胎土の特徴が共通する川原寺式軒平瓦652型式(以下、川原寺652と表記)があげられている。このほか、今回の検討により、これらと胎土、焼成、色調が共通する焼成不良の鷗尾を抽出することができた。以下、それぞれの製作技法等の特徴を説明したのち、胎土、焼成、色調の特徴を説明する。

**川原寺601C** 川原寺601型式の製作技法の特徴は、金子裕之氏があきらかにしており、瓦当厚と瓦当表面の形状によりⅠ型からⅢ型に分類している<sup>3)</sup>。本稿でもその分類を踏襲し、それぞれ金子Ⅰ型などと呼称する。本例は瓦当が薄く瓦当裏面に平坦な金子Ⅲ型である(図70-3、PL22-1・2)。瓦当裏面にタテないしナナメ方向のナデないしケズリを施し、接合部に周に沿うナデを施す。瓦当側面下半はヨコケズリを施し范端痕や榫痕を残さないが、瓦当面から1.3cm程度まではこのヨコケズリが及んでおらず、軽いオサエ程度の調整に留まる。丸瓦部の厚さ



図70 飛鳥藤原第119-5次調査出土軒瓦 1：4

1～3：川原寺601C（1：范傷1段階、2：范傷3段階、3：范傷5段階）、4：川原寺608、5：川原寺652

が2.7cm程度と非常に厚い。丸瓦部先端の端面に円弧に沿う太い刻み目、凸面側に太いたて刻み目を付ける。丸瓦部は瓦当表面の高い位置に取り付けており、丸瓦部先端の差し込みはほぼない。接合部に少量の支持粘土を付加する。

川原寺601Cの范傷進行については、花谷浩氏、小谷氏があきらかにしており、1～5段階に分類可能である<sup>6)</sup>。本例は、そのうち范傷がもっとも進んだ5段階に該当する。

しかし、川原寺出土の他の5段階の製品では生じていない范傷も一部に認められることから、范傷5段階の中でも遅れて生産された可能性がある。この点については、川原寺だけでなく、和田庵寺など川原寺以外からの出土例を含めた范傷5段階の製品を、さらに詳細に検討する必要がある。**川原寺608** 直立縁の外縁上面に鋸歯文を残すものと鋸歯文を削り取ったものがあるが、本例は鋸歯文を削り取

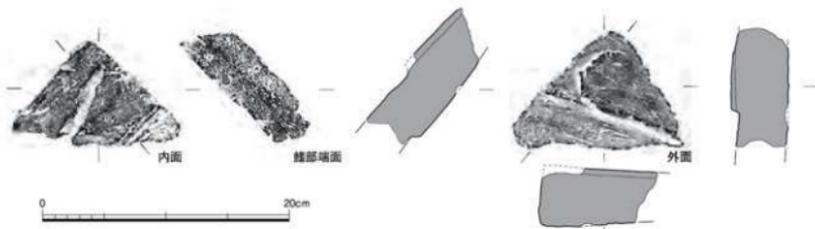


図71 飛鳥藤原第119-5次調査出土鰯尾 1:4

ったものである(図70-4、PL.22-3)。瓦当側面にはケズリないしナデを施し、端部痕や櫛型痕などは認められない。瓦当表面から丸瓦部凹面との接合部にかけて、ユビナデツケ、ユビオサエによる細かい凹凸や圧痕を多数残す。この調整により瓦当表面は中凹みとなり、中央部付近の厚さは1.5cm程度と薄い。丸瓦部の取り付け位置は高く、接合部の支持粘土の量は多い。

**川原寺652** 瓦当部左側面から5.0cm程度、瓦当面から6.0cm程度が残る小片(図70-5、PL.22-4・5)。頸部が剥離するため残存する弧線は二重であるが、全体のバランスからみて、欠損する頸部にもう一重の弧線が巡る三重弧文とみられる。凹面は未調整で布圧痕、糸切痕を明瞭に残すが、瓦当面付近は、瓦当面から幅3.0cm程度の範囲にヨコヘラケズリを施し、さらにそのヨコヘラケズリによる面と瓦当面の間に幅0.5cm程度のヨコナデを施す。側面付近は、幅1.0cm程度の面取り風のケズリを施しており、川原寺出土の四重弧文軒平瓦651型式や平瓦の側面に多く認められる朝先状の加工をおこなっているものと考えられる。この面取り風のケズリと凹面の間に、さらに幅2.0cm弱のタテケズリを施す。頸部の剥離面には、ナデないしユビオサエによるとみられる細かい凹凸を残す。(清野孝之)

**鰯尾** 鰯尾の破片であり、粘土紐の積み上げ単位で水平に剥離しており、頂部にいたる屈曲部付近の破片と考えられる(図71、PL.22-6)。厚さ4.5cm。内外両面に正段をもち、厚さ0.4cm程度の粘土を薄く貼り足した上で、段の削り出しをおこなう。段を削り出した後にナデ調整をおこなう面と、ナデ調整を省略して削り出しの痕跡を明瞭に残す面があり、前者が外面、後者が内面と考えられる。縦帯片や胴部片を欠いているため、全体の様相や時期を特定することは困難であるが、川原寺所蔵の創建

期のもとみられる初唐様式の鰯尾とは胎土・焼成が大きく異なり、ややにぶい赤褐色を呈する。(道上祥武)

**胎土・焼成・色調の特徴** 軒瓦、鰯尾の胎土、焼成、色調の特徴はほぼ一致しており注目される。まず胎土については粗く、直径0.5cm以下の白色粒(長石)を非常に多く含む。次に焼成・色調については、焼き歪みのある瓦、焙着瓦は暗青灰色ないし青灰色を、生焼け・焼成不良の瓦は赤褐色ないしややにぶい赤褐色、橙褐色、褐色を呈するものが多い。これらの胎土、焼成、色調の特徴は、川原寺瓦窯産と推定される丸・平瓦ともほぼ共通しており、川原寺瓦窯産の瓦の特徴と考えることができよう。

**軒瓦・道具瓦の分布** 川原寺瓦窯産と推定される軒瓦等のうち、川原寺瓦窯SY595周辺から出土したものは軒丸瓦の川原寺601C、川原寺608各1点で、いずれも瓦窯埋没後の整地層からの出土である。瓦溜SX594周辺からは川原寺608が5点、そのやや北側からも1点出土している。川原寺652および鰯尾は、瓦窯SY595から南へ15m以上離れた調査区南部からの出土である。瓦窯および瓦溜周辺から出土したものが大半を占めるが、やや離れた場所からも少量ながら出土していることから、瓦窯周辺を含む一帯の整地によって若干の瓦が移動したものと考えられる。

#### 4 川原寺瓦窯産の川原寺601Cの様相

川原寺瓦窯の採集時期や仮称、広瀬部瓦窯との先後関係を探るためには、範傷進行や技法の変化が明らかな川原寺601Cが手がかりとなる。飛鳥藤原第119-5次調査出土の川原寺601Cのうち、川原寺瓦窯産とされてきたのは前掲の焼成不良の1点のみであるが、これまで説明してきた川原寺瓦窯産の瓦の特徴もふまえ、本調査出土のその他の川原寺601Cについても再度、検討する。

川原寺 601C は調査区全体で 16 点出土し、うち範傷段 1 段階が 1 点、1～2 段階が 3 点、3 段階が 5 点、3～5 段階が 1 点、5 段階が焼成不良の 1 点。範傷 1 段階と 1～2 段階、3 段階と 3～5 段階はそれぞれ製作技法や胎土・焼成・色調の特徴がほぼ共通する。このほか、範傷段階不明で胎土・焼成・色調の特徴が前者と共通する小片が 3 点、後者と共通するものが 2 点ある。

範傷 1 段階の製品は金子 I 型 (図 70-1)。瓦当裏面に丁寧なタテないしナメズリを施す。瓦当側面下半は極めて丁寧なミガキに近いナデないしケズリを施し範端痕や櫛型痕を残さないが、瓦当面から 0.5cm 程度の範囲に、このナデないしケズリが及ばない部分がある。丸瓦部の取り付け位置は高い。丸瓦部先端を観察できるものがなく、先端の刻み目や差込みの深さは不明である。胎土は精良で直径 3mm 以下の黒色・白色粒を少量含む。焼成は良好で、硬質で灰白色から青灰色を呈するが、範傷 1～2 段階のものには、やや焼成が甘く軟質で、灰白色を呈するものがある。

範傷 3 段階の製品は、いずれも金子 III 型 (図 70-2、PL22-7)。瓦当裏面にナメズリないしナデを施す。瓦当側面下半はヨコナデないしケズリを施し、範端痕や櫛型痕を残さないが、瓦当面から 1.3cm 程度の範囲にこのナデないしケズリが及ばないものがある。丸瓦部は厚さ 1.5cm 程度と薄く、取り付け位置は高いものとやや高いものがある。丸瓦部先端を観察できるものは、凹凸面にタテ刻み目、先端に円弧に沿った刻み目を付ける。丸瓦部先端の差込みは深い。胎土は密ないしやや密で直径 2mm 以下の砂粒をやや多く含む。焼成が良好で灰色を呈するものと、やや良好で暗灰色ないし青灰色を呈するものが多いが、焼成がやや甘く軟質で、灰色を呈するものが混じる。

これらはいずれも、川原寺で出土する同段階の製品と共通した特徴をもち、うち範傷 1 段階および 1～2 段階の製品は荒坂瓦窯産と推定される。一方で、川原寺瓦窯産と推定される焼成不良の川原寺 601C とそれ以外を比べると、製作技法の特徴がはっきりと異なり、胎土も川原寺瓦窯産の特徴とは異なる<sup>7)</sup>。

したがって、今回検討した 16 点の川原寺 601C のうち、川原寺瓦窯産と推定されるのは焼成不良の 1 点に限定される。わずかに 1 点であるため現時点では明確にしたいものの、この製品が範傷 5 段階であり、そのなかでも遅れて生産された可能性があること、加えて他の川原寺

601C とは明確に区別できる特徴をもつことは注目しておきたい。今後、この焼成不良の 1 点と共通する特徴をもつ資料を抽出していくことにより、川原寺瓦窯とそのほかの瓦窯との関係、操業の先後関係を明確にすることができると期待される。

## 5 まとめ

今回の検討により、川原寺瓦窯産と推定される瓦の特徴をより一層明確にすることができた。そのうち、特に研究が進んでいる川原寺 601C の特徴をあきらかにできたことは大きな成果である。今後、川原寺出土の膨大な資料のなかから川原寺瓦窯産の瓦を見分ける作業が必要である。その作業により、川原寺瓦窯における瓦の生産と供給の実態を把握するとともに、川原寺造営の一端に迫ることが可能になるものと期待する。

本研究は JSPS 科研費 JP20H01362 による成果の一部を含む。 (清野)

### 注

- 1) 「川原寺寺域北限の調査—飛鳥藤原第 119-5 次発掘調査報告—」奈文研、2004
  - 2) 瓦窯 SY595 は調査区にごく一部がかかるのみであるため、隣接する未調査地にこれ以外の窯が存在した可能性は残る。本稿では、飛鳥藤原第 119-5 次調査出土瓦を分析対象とし、瓦の特徴から、出土地の直近に所在する瓦窯で生産されたと推定できる瓦を抽出するという手法をとるが、これらが厳密に瓦窯 SY595 のみに由来するものかどうか、出土状況から特定できない以上、確定することは不可能である。本報告においては、「川原寺瓦窯産 (の瓦)」と表現するが、瓦窯 SY595 だけでなく、それに隣接して存在した可能性のある瓦窯の製品も含むことになる。
  - 3) 前掲註 1 文献、および小谷徳彦「川原寺の丸・平瓦」『古代瓦研究 III』奈文研、2009。
  - 4) 「川原寺発掘調査報告」奈文研、1960。
  - 5) 金子裕之「軒瓦製作技法に関する二、三の問題—川原寺の軒瓦瓦を中心として—」『文化財論叢』奈文研、1983。
  - 6) 花谷浩「飛鳥の川原寺式軒瓦」『古代瓦研究 III』奈文研、2009。
  - 7) 小谷徳彦「川原寺の創建瓦」『古代瓦研究 III』奈文研、2009。
- 7) 範傷進行と分布の関係については、瓦窯 SY595 周辺の瓦窯埋没後の整地層から焼成不良の川原寺 601C 1 点のほか、範傷 3 段階の 1 点も出土している。これを含む範傷 3～5 段階の製品、および製作技法、胎土、焼成、色調等の特徴が範傷 3～5 段階の製品と共通する 9 点は、調査区全体から偏りなく出土している。これに対し、範傷 1～2 段階、および製作技法、胎土、焼成、色調等の特徴が範傷 1～2 段階の製品と共通する 7 点は、いずれも瓦窯から離れた調査区南部から出土している。限られた情報ではあるが、川原寺 601C の古い段階の製品が供給された施設は、寺城北辺部付近よりやや南へ離れた位置に存在した可能性が考えられる。

## Ⅱ 平城宮跡等の調査

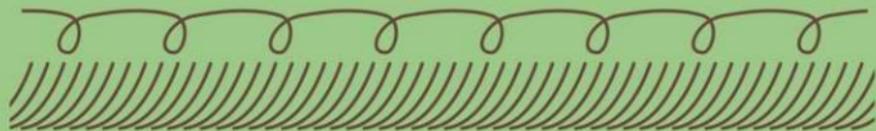


表 11 2021・2022 年度 都城発掘調査部（平城地区）発掘調査一覧

調査次数	調査地区	遺 跡	調査期間	調査面積	調査地	担当者	調査要因	掲載頁
(2021年度)								
644次	6BFO-B	法華寺庭園	2022.1.24～2.14	16.75㎡	奈良市法華寺町	大澤正吾	名勝保存整備	99
645次	6BFO-B	法華寺境内	2022.1.17～2.9	14.38㎡	奈良市法華寺町	桑田調也	防災設備改修	99
646次	6ADB-S	平城宮西北部	2022.2.14～3.4	90㎡	奈良市二条町	桑田調也	住宅建設	89
(2022年度)								
647次	6BFO-D	平城京左京一条二坊十坪・一条桑間路	2022.4.4～4.22	70㎡	奈良市法華寺町	山崎有生	住宅建設	109
648次	6ACA-R	平城宮北面大垣	2022.7.25～7.29	30㎡	奈良市佐紀町	山崎有生	住宅建設	95
649次	6BKF-C	興福寺東金堂院	2022.7.5～11.18	335㎡	奈良市登大路町	畑中健志	学術調査	*
650次	6AFGO・P	平城京左京三条一坊二坪	2022.9.26～2023.1.26	686.5㎡	奈良市二条大路南	浦 春子	施設建設	*
651次	6BFO-C	法華寺境内	2022.10.11～10.19	10.4㎡	奈良市法華寺町	川畑 純	名勝保存整備	99
652次	6ADC-R	平城宮西北部	2022.10.24～11.7	18㎡	奈良市二条町	高野 麗	住宅建設	89
653次	6BFO-D	法華寺旧境内・海龍王寺	2022.11.2～12.16	262.6㎡	奈良市法華寺町	川畑 純	宅地造成	*
654次	6BSD-F	西大寺小塔院	2023.1.12～2.3	146㎡	奈良市西大寺小坊町	田中龍一	住宅建設	115
655次	6BSD-Q	西大寺弥勒金堂	2023.3.1～4.4	47.1㎡	奈良市西大寺小坊町	田中龍一	住宅建設	129

・このほか、平城地区では2件の工事立会に対応した。

※第649・650・653次調査については、以下の理由により、本書には収録していない。

第649次調査：整理作業等の都合により、「発掘調査報告2024」で報告予定。

第650次調査：2023年度以降も調査を継続し、事業全体の調査終了後に正式報告書を発行予定。

第653次調査：2023年度も調査を継続するため、「発掘調査報告2024」で報告予定。

表 12 2022 年度 都城発掘調査部（平城地区）現場班編制 ※総担当者

春	夏	秋	冬
	和田一之輔（考古第一）	※浦 春子（考古第一）	
丹羽 崇史（考古第二）		川畑 純（考古第三）	小田 裕樹（考古第二）
			※田中 龍一（考古第三）
桑田 調也（史 料）	※畑中 健志（史 料）	馬場 基（史 料）	山本 祥隆（史 料）
※山崎 有生（遺 構）	日黒 新悟（遺 構）	高野 麗（遺 構）	西田 紀子（遺 構）
		道上 祥武（考古第三：研修）	
総括：部長 船崎 和久		写真担当：企画調整部写真室	学報担当：神野 恵（考古第二）
			今井 晃樹（考古第三）

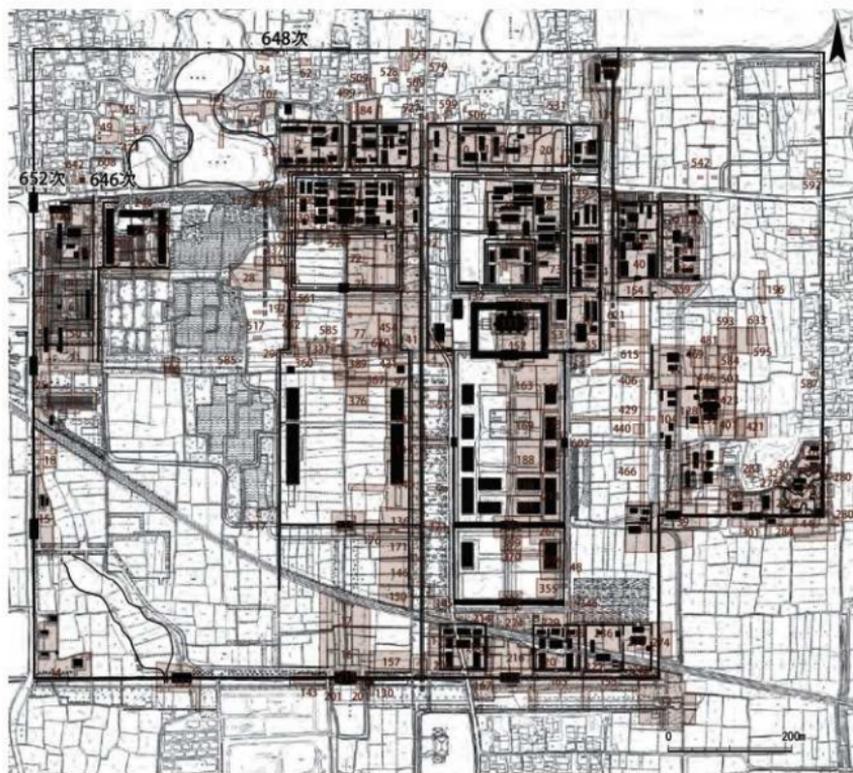


図72 平城宮発掘調査位置図 1 : 8000

## 1 平城宮の地理的環境

都城発掘調査部平城地区が発掘調査をおこなう地域のうち、平城京は奈良盆地の北、現在の奈良市に所在する。平城京の北端に位置する平城宮は、約1km四方の区画の東に、南北約755m、東西約265mの張り出し部が取りつく非対称な平面形を呈し、その面積は約124haにおよぶ。北には奈良山丘陵が東西に展開し、東には菟川、西には秋篠川が南へ向かって流れる。宮内は北高南低の地勢で、現在の標高は65～75mである。

これまでの発掘調査やボーリング調査により平城宮の旧地形がはっきりになった。北方の丘陵から南へ2つの支丘が伸延し、その支丘上には第一次大極殿および内裏と第二次大極殿、東院等の宮中樞部が並び建つ。第一次大極殿の西側は北西から南東へ向かう谷となっており、その上流には灌漑池である御前池、佐紀池がある。内裏・第二次大極殿・東区朝堂院と東院地区の間にも南北に走る谷が存在し、その北には水上池があり現在も谷の水源となっている。2つの谷は朱雀門から壬生門のあたりで平地化して南へ延びる。宮の西南部は旧秋篠川の流域であり、流路部分は低湿地、河川の両岸は微高地を形成している。

平城京遷都後、平城宮は次第に田畑と化す。戦後、土地を国有化する以前は、内裏や第一次大極殿地区の北方に集落が存在するほかは、ほぼ水田であった。

## 2 平城宮の歴史的環境

平城宮造営以前、宮の範囲にはいくつかの遺跡が確認されている。宮西南の微高地には、弥生時代後期の竪穴建物や方形周溝墓が存在した。このほか、壬生門付近、朝集院付近でも弥生土器が出土している。

内裏の北方には市庭古墳、その南には神明野古墳など5世紀の前方後円墳が存在したが、平城宮造営時に削平されたことがあきらかになった。また、東院地区には、5世紀の埴輪窯や埴輪棺もみついている。東区朝堂院から朝集院の範囲には、古墳時代の方墳や竪穴建物、同時代の土器、木製品が多量に出土した小河川などが存在した。古墳時代の集落跡と考えられる。

平城京遷都の詔は元明天皇により和銅元年(708)2月に宣布され、同年3月には造宮卿が任命、造宮工事はほ



図73 平城宮跡周辺を南から望む(2023年5月撮影)

どなく開始された。地鎮祭や2度の行幸を経て和銅3年(710)3月10日に平城京に遷都した。この年から延暦3年(784)の75年間、平城京は日本の都であった。天平11～17年(740～745)、聖武天皇が恭仁京、難波京、紫香楽宮に遷都を繰り返した時期を境に、平城遷都後は第二次大極殿を新設し、その南の東区朝堂院、朝集院を宮の中樞部とするなど、平城宮の構造は大きく変化する。長岡京遷都後に平城太上天皇が一時平城宮に居住するも、同天皇の没後は徐々に田畑化し、大きな開発もなく現代に至る。そのため、第二次大極殿や東区の朝堂などは基壇が高まりとして残存していた。その周囲の地形には宮殿や官衙等の区画を反映した地割りが保存されており、平城宮の構造を復原する上で貴重な情報となっている。

幕末の北浦定政により平城宮の範囲が認知され、その後、棚田嘉十郎・溝辺文四郎など地元の有志による保存運動によって、平城宮跡は大正12年(1922)に国史蹟に指定された。昭和27年(1952)年には国の特別史蹟となり、平成10年(1998)には世界文化遺産「古都奈良の文化財」に登録され現在に至る。

奈文研による平城宮跡の継続的な発掘調査は、昭和30年(1955)に第一次調査を開始して以来、令和4年(2022)現在、平城宮の面積の38%ほどを発掘調査している。宮は築地大垣で囲まれ宮城門が設けられる。第一次大極殿院と中央区朝堂院からなる中央区、内裏・第二次大極殿院・東区朝堂院・朝集院で構成される東区、これら2つの中樞部のほか、東宮と菟池を中心とする東院地区、官衙区画、菟池等の存在があきらかになった。(今井規樹)

# 平城宮西北部の調査

## —第 646・652 次

### 1 調査の概要

平城宮西北部において個人住宅の建て替えにともなう学術調査を実施した。ここでは平城第 646・652 次調査について報告する。

### 2 遺跡の位置と環境

調査地は、平城宮の西北部に位置する。周辺では、奈文研による小規模な調査が実施されている（図 74）。第 646・652 次調査地の南を東西に通る奈良県道谷田奈良線に面した数次にわたる調査では、同一の場所に繰り返し掘り直された東西方向の素掘溝を確認している。このうち、第 174-17 次調査では近世～近代の溝を検出し（昭和 61 年平城概報）、第 164-21 次調査では近代の大溝の下層に土器や木簡を含む奈良時代の東西溝 SD12340 を確認しており、宮内東西道路北側溝の可能性が指摘されている（昭和 60 年平城概報）。

また、第 646 次調査地の西隣でおこなった平城第 642 次調査では、8 世紀初頭から 12 世紀初頭まで機能していたと考えられる東西方向の素掘溝 SD20311 を検出した。SD20311 は、第 164-21 次調査で検出した東西溝 SD12340 と同一の溝である可能性が高く、奈良時代を通じて機能した、佐紀池から秋篠川への排水を目的とした水路の一つと考えられている（紀要 2022）。

第 646・652 次調査では、SD12340・20311 の延長部分の検出が予想された。（桑田訓也・高野龍）

### 3 第 646 次調査

#### (1) 調査の経過

**調査に至る経緯** 個人住宅建設にともない、遺構面の遺存状況の把握を目的として発掘調査を実施した。

**作業の経過** 調査期間は 2022 年 2 月 14 日から同年 3 月 4 日までである。2 月 14 日に基準点測量および調査区の設定、レベル移動をおこない、重機掘削を開始した。重機掘削と並行して、2 月 17 日に人力による遺構検出を開始。2 月 18 日に全景写真を撮影。2 月 21 日から実測を開始、2 月 24 日・25 日に全景写真を撮影。3 月 3 日に

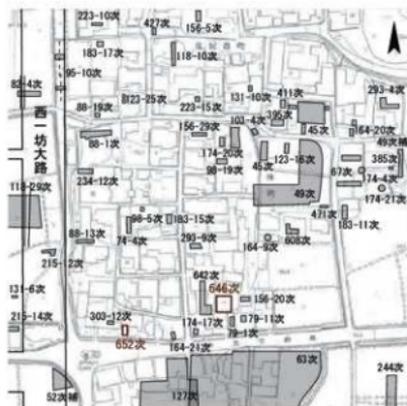


図 74 第 646・652 次調査区位置図 1: 3000

遺構面保護のための砂を撒いた後、3 月 4 日に埋め戻しを完了して調査を終了した。

本調査では、発掘調査開始と並行して、出土遺物の洗浄・分類等の作業に着手し、調査終了後も継続して整理作業をおこなった。

#### (2) 調査の方法

調査区は東西 9 m、南北 10 m、調査面積は 90m<sup>2</sup>である。調査では、GNSS 測量機を用いたネットワーク型 RTK-法で調査区内に基準線を設定し、縮尺 1/20 を基本に平面図を作成した。標高は平城 No.14 (X=-145.153672、Y=-19.244829、H=69.071 m) を基準として平城第 293-9 次調査 (1998 年度) で設置した基準点からオートレベルで直接水準測量をおこなった<sup>1)</sup>。表土および掘乱土、遺物包含層は基本的に重機で掘削し、奈良時代の整地土以下は、人力により遺構検出および掘削作業をおこなった。写真記録はデジタル撮影でおこなった。

#### (3) 基本層序 (図 76)

現地表から①表土・造成土 (40～130cm)、②褐色砂質土 (遺物包含層、最大厚 35cm、調査区西平のみ)、③にぶい黄褐色砂質土 (奈良時代の整地土、最大厚 30cm)、④灰黄褐色砂質土 (地山)。地山は北から南に緩やかに下がる。遺構検出は、③の上面および④の上面 (ただし奈良時代の東西溝の周囲を除く) でおこなった。検出面の標高は 69.3 m (現地表下 70 cm) 前後である。

#### (4) 検出遺構

③層の上面では、調査区西南部で東西溝 2 条 (奈良時代 1 条、近世以降 1 条)、調査区東部で土坑 3 基 (いずれも平

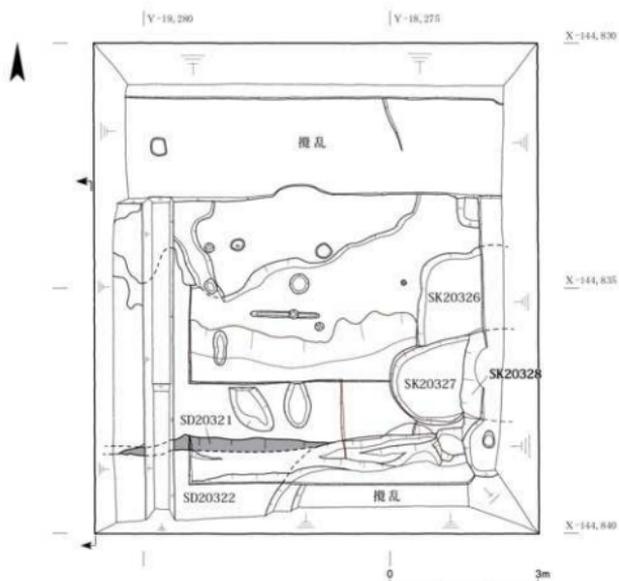


図75 第646次調査区遺構図 1:100

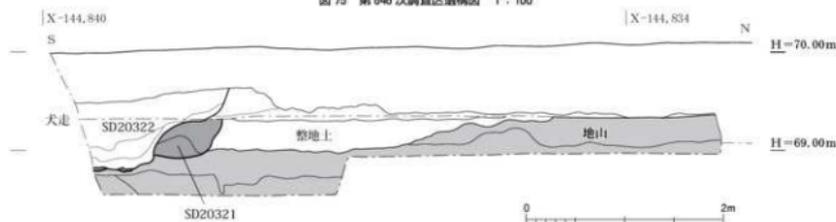


図76 第646次調査区西壁土層図 1:50

安時代末頃)を検出した(図75.PL23-1)。④層の上面では、顕著な遺構は認められなかった。

**東西溝 SD20321** 調査区西南部で北肩を検出した。東西3.5m以上、南北1.5m以上、深さ約50cm。西と南は調査区外に続き、東は攪乱に壊される。東西溝 SD20322 と重複し、それより古い(図76)。出土遺物から、奈良時代の遺構とみられる。北肩が直線状でほぼ正方位に合うことや、遺構の断面形状、周辺の調査成果などからみて、東西方向の素掘溝の可能性が高いと判断した。

**東西溝 SD20322** 調査区西南部で北肩を検出した。東西3.5m以上、南北1.4m以上、深さ約80cm。西と南は

調査区外に続き、東は攪乱に壊される。東西溝 SD20321 と重複し、それより新しい。北肩は直線的で、東でやや北に振れる。出土遺物から、近世以降の遺構とみられる。古代以来の落ち込みを踏襲している可能性がある。

**土坑 SK20326** 調査区東部で検出した。東西1.7m以上、南北2.0m以上、深さ約25cm。さらに調査区の東に延びる。土坑 SK20327・20328 と重複し、それらより古い。埋土に瓦器を含む。

**土坑 SK20327** 調査区東部で検出した。東西2.2m以上、南北約1.7m、深さ約40cm。さらに調査区の東に延びる。重複関係から、土坑 SK20326 より新しく、土坑 SK20328

表13 第646次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦		軒平瓦		その他	
型式	点数	型式	点数	種類	点数
6307	1	6641	1	伏間瓦	1
巴(近世)	2	近世	1		
時代不明	1				
軒丸瓦計	4	軒平瓦計	2	その他計	1
	丸瓦	平瓦	磚		
重量	7.792kg	8.917kg	0.273kg		
点数	67	129	1		



図77 第646次調査出土軒瓦 1:4

より古い。埋土に古代の瓦を含む。

**土坑SK20328** 調査区東部で検出した。東西0.8m以上、南北約1.8m、深さ約40cm。さらに調査区の東に延びる。土坑SK20326・SK20327と重複し、それより新しい。出土した瓦器や土師器皿の年代観から、12世紀前半ごろの遺構とみられる。(桑田)

#### (5) 出土遺物

**瓦磚類** 本調査で出土した瓦磚類は表13のとおりである(PL23-2)。軒丸瓦は4点出土した。図77-1は6307型式B種。平城瓦福年のⅢ-1期で、これまで平城宮北面大垣付近や宮内の西北部で比較的多く出土している。そのほか近世の巴文瓦が2点、時期不明のものが1点ある。軒平瓦は2点出土した。図77-2は6641型式F種。頸部は貼り付け削り出し段頸で、頸幅5.5～6.0cm。藤原宮式である。そのほか近世のものが1点ある。

道具瓦では、近世とみられる伏間瓦が1点出土した。丸瓦は67点(約7.8kg)、平瓦は129点(約8.9kg)が出土した。丸瓦にはほぼ完形の個体が1点ある。全長39.4cm、玉縁部の長さ5.7cm、広端幅14.8cm、厚さは1.2～1.5cm。狭端側の個体には部分的に分割破面が残る。

磚は1点(約0.27kg)が出土した。完存する辺がないため本来の大きさは不明である。(川畑 純)

**土器・土製品** 調査区からは古代から近代の須恵器、土師器、瓦器、陶磁器などが整理用コンテナにして1箱程度出土した。西排水溝からは奈良時代の土師器甕片や須恵器杯A・杯B・皿Bなどが出土した。図78-1は、褐

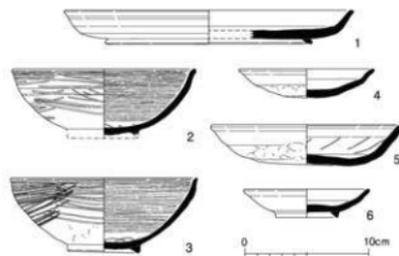


図78 第646次調査出土土器 1:4

色砂質土層から出土した須恵器皿D。奈良時代の須恵器供膳具のなかでも希少な器種である。SK20328からは11世紀前半(大乗院福年Ⅱ-A期)<sup>21)</sup>の土器が比較的多く出土した。図78-2・3は川越福年Ⅱ段階の瓦器碗。図78-4・5は大小の土師器皿。5は内面にコテのアタリが観察できる。6は高台付きの皿で、平安京の白色土器に類するものであろう。4～6はいずれも白色を呈し、この時期に特有の胎土である。(神野 恵)

## 4 第652次調査

### (1) 調査の経過

**調査に至る経緯** 個人住宅建替えにともない、遺構面の遺存状況の把握を目的として発掘調査を実施した。

**作業の経過** 調査期間は2022年10月24日から11月7日までである。10月21日に基準点測量および調査区の設定、レベル移動をおこない、10月24日に重機掘削を開始した。重機掘削と並行して人力による遺構検出を開始し、10月26日に全景写真撮影をおこなった。平面図と壁面土層図を作成した後、サブトレンチを設定して地山を確認した。10月28日に掘削作業と遺構検出作業を終了し、10月31日から遺構面保護のための砂を撒いたのち、埋め戻しをおこない調査を終了した。出土した遺物は発掘作業終了後に洗浄・分類・註記作業を実施したのち、主要遺物について実測図化作業をおこなった。

### (2) 調査の方法

調査区は東西3m、南北6m、調査面積は18m<sup>2</sup>である。調査では、GNSS測量機を用いたネットワーク型RTK法で調査区内に基準線を設定し、縮尺1/20を基本に平面図を作成した。標高は平城No.14(X=-145.153.672, Y=-19.244.829, H=69.071m)を基準として平城第293-9次調査(1998年度)で設置した基準点からオートレベルで直接水準測量をおこなった<sup>21)</sup>。造成土、旧耕作土、床

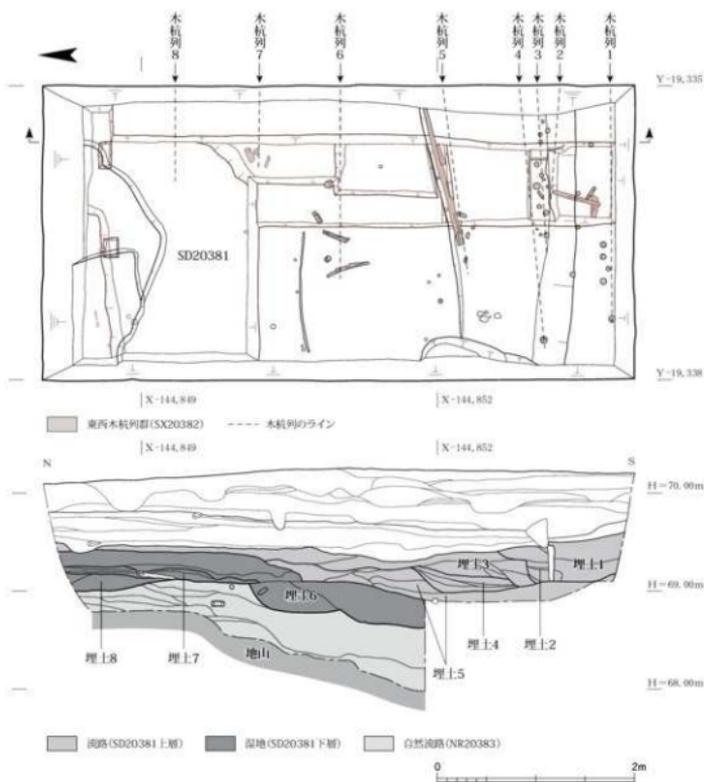


図79 第652次調査区遺構図・東壁土層図 1:50

土は重機で掘削し、床土下部以下は遺物の包含状況を観察しながら一部重機での掘削をおこなったが、基本的には人力により掘削および遺構検出作業をおこなった。その後、サブトレンチを設定し、地山上面まで掘り下げた。写真記録はデジタル撮影でおこなった。

### (3) 基本層序

層序は、上から①造成土(30～60cm)、②旧耕作土・床土(20～30cm)、③湿地および流路SD20381の上層埋土である灰オリブ粘土(砂混じり)および灰～灰黄砂(5～60cm)、④湿地および流路SD20381の下層埋土である灰オリブ粘土(砂混じり)(20～50cm)、⑤自然流路NR20383の堆積土である灰オリブ粘土(20～95cm)、⑥青灰粘土(地山)である(図79)。③・④層は、それぞれ上層と下層に分けることができ、各層の下部には砂が堆積し、層位は北か

ら南へ向かって高くなる。遺構検出は、③層と④層の上面でおこなった。遺構面の標高は69.3～69.5mである。

### (4) 検出遺構

調査区全体で湿地および流路SD20381、東西木杭列群SX20382、自然流路NR20383を検出した(図79.PL24-1)。**湿地および流路SD20381** 近世以降に埋め立てられたと考えられる湿地および東西流路である。調査区全体に広がり、検出面からの深さは最深部で約70cmである。北岸は調査区西北部で検出したが、南岸は調査区外にあるとみられ、全体の平面規模など、その全容は不明である。

埋土は北から南に向かって堆積している。埋土の粒度は南にいくにつれ大きくなり、上層の埋土1～5は砂あるいは砂質土で、下層の埋土6～8は粒度がより小さく、より粘性の強い粘砂土あるいは粘土となる。南側の埋土

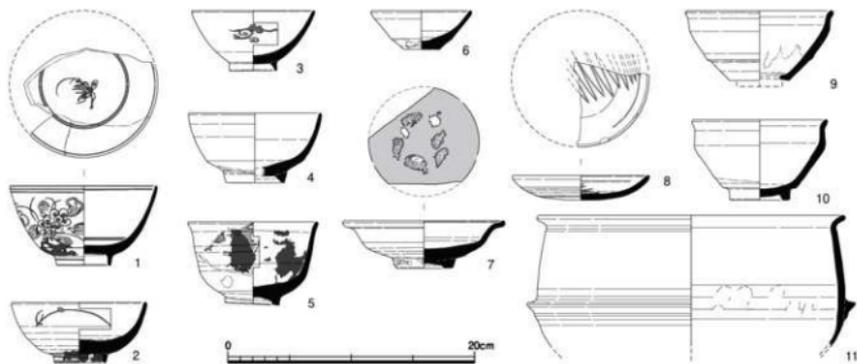


図80 第652次調査湿地および流路SD20381出土土器・陶磁器 1:4

1～5は比較的流れの早い流路の埋土であった一方で、北側の埋土6～8は、湿地あるいは流れのゆるやかな流路の埋土と考えられる。埋土から近世の遺物が出土したため、いずれも近世以降の堆積である。また、調査区北壁では、土層の観察により、埋土6の上層で稲とみられる植物根の痕跡を確認した。さらに、調査区東壁で確認した埋土の切り替わりの位置に対応して、後述の東西方向の木杭列群SX20382が打ち込まれている。

また、近世の絵図では、調査地一帯が水田とされる<sup>41</sup>。本調査地は、元々は湿地あるいは流路だったが、調査地の北側にあった既存の水田を南へ拡張するために、湿地あるいは流路を人工的に埋め立てた際の埋土が埋土1～8であると考えられる。また、埋立土の各層の下部には流水に伴う砂が堆積している。そのため、各段階の埋め立て後は埋立土の南側を水路として、水田耕作に使用していたとみられる。

**東西木杭列群SX20382** SD20381上で東西方向に並ぶ木杭列を8条検出した。木杭列5・6の北側では、それぞれ直径約5cm、長さ約1.5mの横材とみられる丸太状の木材を1本、直径約3cm、長さ約1.3mの横材とみられる竹材を1本検出した。これらは、縄状の有機質で木杭の北側に固定されており、木杭と併せて欄状の遺構を形成していたとみられる。木杭の打ち込まれた層の上面は北から南へ徐々に標高が高くなるとともに、木杭によって形成される土留めがその北側の層よりも層位的に上位になることや、木杭の遺存状況は南側の方が良好であることから、木杭列は南にいくにつれ年代が新しくなるとみられる。水田を南側へ拡張する際に、木杭の北側を一

段高く造成し、南側を一段下げて排水した際の土留めおよび護岸に使用されたものとみられる。また、SD20381の埋土に近世以降の遺物を含むことから、SX20382も近世～近代の遺構であると考えられる。

**自然流路NR20383** SD20381の下層で検出した自然に形成された湿地状の流路あるいは湿地と考えられる。調査区西北部で北岸を検出したが、南岸は確認できず、平面規模は不明である。また、サブトレンチにより、調査区中央付近で深さが約95cmであることを確認したが、それより南は安全確保のため地山上面まで掘り上げていないことから、深さは明らかでない。埋土に近世以降の遺物を含むことから、近世以降に埋め立てられたとみられる。  
(高野)

#### (5) 出土遺物 (PL.24-2)

**土器・土製品** 調査区からは整理用コンテナ2箱分の土器・陶磁器が出土した。なかでも湿地および流路SD20381からは江戸時代後半頃の陶磁器、土釜、すり鉢、瓦質土器などがまとまって出土した。

図80-1～3は肥前系の染付碗。1は丸みを帯びた深手の染付で18世紀頃のもの。やや黒みを帯びた絵付けに、釉薬は白みがかかった乳白濁色を施す。2はやや器高が低い碗で、見込を円状に軸刺さず。3は小型の染付碗。外面3ヵ所に呉須で雲文を描く。4～7は17世紀頃の唐津焼。いずれも明橙色の素地に透明感のない灰緑色の釉を漬け掛ける。4・5は碗で、4は胴部の下方に稜線をもつ。6は平らな底部から直線的に口縁部が開く小碗で、底部外面に糸切りの痕跡を残す。7は口縁端部が強く外反する折縁皿で、見込みに軸はげと目あとが残

る。8は内外面にオリブ色の鉛釉を施した土師質の皿。内面にジグザクの篋青きを施す。灯明皿であろうが、残存する部分に灯火痕は確認できない。9・10は17世紀の瀬戸美濃の天目茶碗。11は土釜。口縁端部は短く外反するだけで、肥厚しない。鈿は水平に短く引き出され、鈿部の下に突線が巡るなど、北和地域では珍しい器形をしており、他地域から搬入された可能性が高い。外面全体に煤が付着し、内面は鈿より下の部分にとくに暗褐色の光沢がある使用痕が残る。(神野)

**瓦磚類** 古代から近世にかけての丸瓦16点(約44kg)、平瓦85点(約121kg)が出土した。いずれも細片で、本来の大きさや製作技法等の詳細は不明である。また、磚2点(約1.1kg)が出土した。そのほか、軒瓦や道具瓦等は確認できなかった。(川畑)

**木製品** 漆塗碗2点、加工板2点、組み合わせ部材1点が出土した(PL24-2)。漆塗碗はともに外面は黒漆塗、内面は赤漆塗である。1点は外面に「丸に三つ引き」文様の痕跡がある。底面には高台をもつ。高台付け根から少し上の位置に稜線があり、そこから器壁が緩やかに立ち上がる一文字腰碗である。復元径9.6cm、器高39cm、高台の高さ0.4cm。横木取り。NR20383出土。もう1点は漆塗碗の口縁部付近の破片で、前者に比べて器形が扁平で蓋の可能性がある。長さ3.9cm、幅5.1cm、厚さ0.6cm。縦木取り。SD20381出土。

細長い加工板のうち1点は上端、下端ともに切断される。横方向に緩やかに湾曲し外面2箇所に横方向の圧痕が観察できる。圧痕は籬の痕跡と考えられ、樽あるいは結物桶の側板と考えられる。長さ29.8cm、幅4.7cm、厚さ0.7cm。板目。NR20383出土。もう1点は上端、下端ともに切断される。下端の両側部部分には、それぞれ1か所ずつ直径0.3cmの半円孔がある。長さ13.3cm、幅3.8cm、厚さ0.4cm。板目。SD20381出土。

組み合わせ部材は両端を納状に作り出す。中央は半円状にくぼむ。紐ずれ等の痕跡か。横断面の形態はカマゴコ状を呈する。長さ23.3cm、幅3.7cm、厚さ2.2cm。NR20383出土。

**石製品** 砥石が1点出土した。長さ17.0cm、幅6.6cm、厚さ2.9cm。表面と一側面に使用による摩耗が見られ、表面には擦痕も残る。泥岩製。SD20381出土。(浦 善子)

**獣骨類** 湿地および流路SD20381からシカ科の橈骨、自

然流路NR20383からウシの踵骨が出土した。シカ科の橈骨は、完存で近位端・遠位端ともに癒合が完了している。橈骨の全長(GL)は181.69mmとニホンジカよりも小形であるため、シカ科に同定した。(山崎 健)

## 5 まとめ

第646次調査では、奈良時代に、南に向かって下がる旧地形を埋め立て、東西方向の素掘溝を掘削している状況を確認した。周辺の調査と同様、柱穴などの遺構は確認できず、調査区周辺は平城宮内ではあるものの活発な土地利用がおこなわれなかった区画である可能性がさらに強くなった。

隣接する第642次調査で検出した東西溝SD20311の北側は、今回検出した東西溝SD20321の北側よりも1.5～2m南に位置する。遺構検出面の標高差や後世の攪乱を考慮に入れても、なお無視しがたい差であり、両者の関係については、今後の検討課題である。

第652次調査では、調査区の大半で近世以降の湿地および流路SD20381、自然流路NR20383を検出した。これらは第164-21次の上層、第174-17次で検出した近世～近代の溝と一連のものである可能性が指摘できる。しかし、第164-21次の下層で検出した奈良時代の東西溝は確認できなかった。本調査地においても本来は存在していたが、SD20381やNR20383により削平されたと考えられる。

一方、SD20381の堆積の様子や木枕列群を検出したことから、近世以降の水田拡大の実態を知る資料を得た。また、調査区の西北部で流路の岸を検出したことから、調査区より北側では奈良時代の整地土や遺構が遺存している可能性が高いと思われるため、今後の調査成果に期待したい。(桑田・高野)

## 注

- 1) 平城No.14は2013年に滅失。
- 2) 神野恵・尾野善裕「興福寺系土師器編の編年」『名勝旧大乗院庭園発掘調査報告』学報第97冊、2018。
- 3) 前掲註1。
- 4) 「五ヶ村園」(1724年)より(奈良国立文化財研究所「平城宮北辺地域発掘調査報告書」、1981)

# 平城宮北面大垣の調査

## 一第648次

### 1 調査の経過

**調査に至る経緯** 当調査は奈良市佐紀町における個人住宅建設にともなう発掘調査である。特別史跡平城宮跡内にあたり、遺構面および北面大垣の遺存状況の確認を目的として実施した。

**作業の経過** 2022年7月20日に基準点測量および調査区の設定、レベル移動をおこなった。7月25日から重機掘削を開始し、順次人力掘削に切り替えて遺構検出をおこなった。7月28日に調査区全景写真の撮影をおこない、同日に遺構実測をおこなった。7月29日に追加調査をおこない、同日に遺構面保護のための砂を敷き、埋め戻しと撤収をおこなって発掘作業を終了した。

当調査では出土遺物が少量であったことから、調査と並行して洗浄・分類・註記作業を実施し、主要な遺物を実測図化した。

### 2 遺跡の位置と環境

調査地は、特別史跡平城宮跡の北端、平城宮北面大垣想定位置に該当する。当調査区付近では奈文研が数次にわたる調査を実施している(図81)。約210m東では、北面大垣 SA2300 やその前身の東西掘立柱塼 SA2330 の遺構を検出した第23次調査区(「平城報告Ⅸ」)が位置する。約104m東の第191-4次調査(「昭和63年平城概報」)では SA2330 を検出している。西隣には第34次調査区(「平城報告Ⅸ」)、約17m東には第156-3次調査東区(「昭和59年平城概報」)が位置するが、これらの調査区においては北面大垣に関連する遺構は検出していない。第34次調査区では中近世の東西溝 SD4315 および近世の土坑 SK4326 を検出している。さらに約60m西には SA2330 を検出した第164-1次調査区(「昭和60年平城概報」)が位置する。

### 3 調査の方法と成果

**調査の方法** 第34次調査区と一部重複させ、北面大垣想定位置に東西5m、南北6mの30㎡の調査区を設定した。調査では、GNSS測量機を用いたネットワーク型RTK法で調査区内に基準線を設定し、縮尺1/20

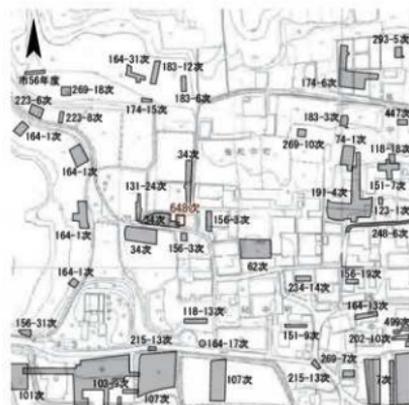


図81 第648次調査区位置図 1:3000

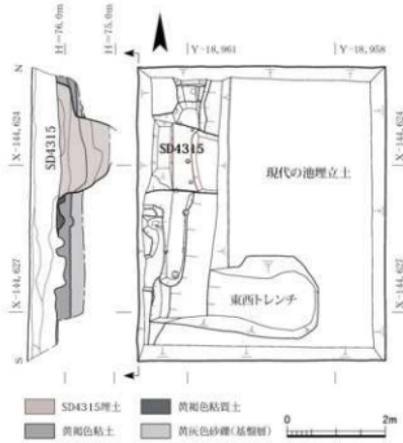


図82 第648次調査区遺構図・西壁土層図 1:100

を基本に平面図を作成した。標高は平城No.14 ( $X = -145.153.672$ ,  $Y = -192.44.829$ ,  $H = 69.071$  m) を基準として第314-1次調査(2000年度)で設置した基準点からオートレベルで直接水準測量をおこなった<sup>1)</sup>。調査区の大半は現代の溜池の範囲に位置しており、真砂土で埋め立てられていた。重機掘削によりその真砂土を地表面から約0.6m除去したが、安全確保のため掘削範囲を土層の遺存状態がよい西辺部と北面大垣想定位置に限定した。東西方向のサブトレンチを設定し、重機で真砂土を除去し、遺構の確認をおこなった。調査区西辺部では、重機掘削

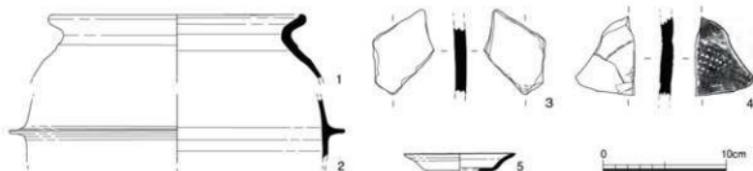


図 83 第 648 次調査東西溝 SD4315 出土土器 1 : 4

表 14 第 648 次調査出土瓦葺類集計表

軒丸瓦		軒平瓦		その他	
型式	点数	型式	種	種類	点数
古代	1			平瓦(中世)	1
				割製平瓦 (近世~近代)	5
軒丸瓦計	1	軒平瓦計	0	その他計	6
重量	1.228kg	8.647kg	0	0	0
点数	7	48	0	0	0

により表土・近現代造成土を除去した後、人力掘削に切り替え、遺構検出をおこなった。東西溝 SD4315 を検出し、完掘を目指したが、現地表からの深さが約 1.5 m 以上となったため、安全確保のため掘削を停止した。写真記録はデジタル撮影でおこなった。

**基本層序** 調査区の大部分は現代の溜池によって削平され、真砂土で埋め立てられていた。その真砂土と池埋土、池底面の基盤層（いわゆる地山、後述の黄灰色砂礫層）以外の堆積土が残っていたのは調査区西辺部だけであった。その層序は、現地表から表土（厚さ約 5 cm）、近現代造成土（約 55 cm）、黄褐色粘質土（約 15 cm）、黄褐色粘土（約 30 cm）、黄灰色砂礫（基盤層）の順である（図 82）。遺構検出は、削平が少ない地点では黄褐色粘土層の上面で、削平が著しい地点ではさらに下層の黄灰色砂礫層の上面でおこなった。検出面の標高は 74.6 ~ 76.2 m である。

**検出遺構** 中近世のものとみられる東西溝 SD4315 を検出した（図 82、PL.25-1）が、北面大垣 SA2300 や東西堀 SA2330 は確認できなかった。

**東西溝 SD4315** 調査区西北部で検出した東西方向の素掘溝（PL.25-1・2）。溝幅は約 2.4 m、検出面からの深さ 1.1 m 以上。埋土は 5 層に分けられ（最上層から第 1 ~ 5 層と呼称）、上層（第 1 ~ 3 層）と下層（第 4・5 層）に大別できる。埋土から 16・17 世紀の土器類や中世の瓦類が出土した。第 1 ~ 3 層の深さならびに断面形状は、第 34 次調査で検出した SD4315 とほぼ一致する。一方で、第 34 次調査の SD4315 では第 4・5 層に相当する層は確認できていない。よって、第 1 ~ 3 層は SD4315 の東延長部で、

第 4・5 層は重複する下層遺構の可能性もある。

（山崎有生）

## 4 出土遺物

**土器・陶磁器類** 表土・包含層・SD4315 等より、古代から近現代までの土器・陶磁器類が整理用コンテナ 1 箱分出土した。SD4315 からは土師器・瓦質土器等が出土した。いずれも小片であるが、遺構の年代の手がかりとなる資料を報告する（図 83）。

1・2 は土師器の土釜の口縁部と胴部<sup>2)</sup>。内外面ともナデ調整。鈿より下方に煤が付着する。胴部中央に鈿がつく大和 I 型<sup>3)</sup>に該当し、16 世紀頃のものともみられる。3 は瓦質土器の破片。器種は不明だが、良好な焼成と煙しを保つ。4 は器種不明の陶器。外面に格子目状のタタキがあり、内面は 3 か所で段差があり、粘土の継ぎ目の痕跡とみられる。5 は土師器の皿。内外面ともナデ調整。興福寺系土師器皿分類の F 類と特徴が近く、大乗院福年 III - C 期（1560 ~ 1660 年頃）相当のものともみられる<sup>4)</sup>。

以上のように、SD4315 は 16 世紀以降の土器類を含み、遺構の上限年代を示す。

（丹羽崇史）

**瓦類** 出土瓦類は表 14 のとおり。軒丸瓦は残存状況が悪く、古代の瓦としか判定できない。

（今井規樹）

## 5 まとめ

中近世の東西溝 1 条を検出した。第 34 次調査で検出した東西溝と一連とみられるが性格は不明である。北面大垣や東西堀の遺構は確認できなかったが、これは現代の溜池等による削平が著しかったためと推測される。（山崎）

### 註

- 1) 平城 No.14 は 2013 年に滅失。
- 2) 1・2 は接合しないが同一個体の可能性がある。
- 3) 菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』、1983。
- 4) 神野忠・尾野善裕「興福寺系土師器の福年」『名勝旧大乗院庭園発掘調査報告』字報第 97 冊、2018。

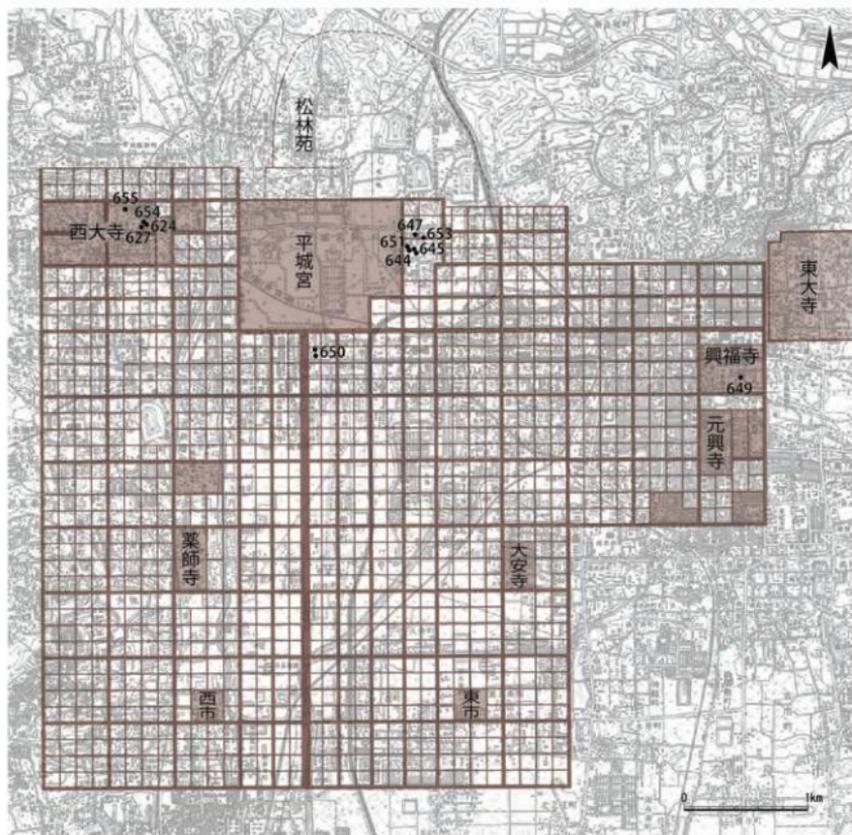


図 84 平城京発掘調査位置図 1 : 4000

## 1 平城京と寺院の地理的環境

都城発掘調査部平城地区が発掘調査をおこなう平城京は奈良県西北部に位置する奈良盆地の北部、奈良市・大和郡山南市に所在する。京城は、東西約4.3km、南北約4.8kmの方形区画の東に、東西約1.6km、南北約2.1kmの張り出し部（外京）をもつ非対称形を呈する。

京の北・東・西は山に囲まれ、南には平野部が展開する。まさに風水にかなった地形に立地している。京の北に広がる奈良山丘陵は標高100～140mほどで、その北斜面には、平城宮や京内の寺院に瓦を供給した窯跡が複数存在する。平城宮北方にあたる丘陵のなだらかな南斜面には、4世紀末から5世紀前半に営まれた佐紀盾列古墳群が存在し、奈良時代には松林苑が造営された。左京の北に位置する丘陵南斜面には奈良時代の天皇陵がいくつか存在する。外京には東の春日山からのびる支丘が張り出し、その丘上に造営した興福寺は標高90mほどと京内では最も高い。平城宮は65～75m、最も低い羅城門付近は50m前後である。京の西縁は西ノ京丘陵にかかり標高は95mほどである。

右京を流れる秋篠川は、平城宮の造営が一段落した後には宮外に流路を付け替え、運河として用いられ京の西市に通じていた。左京の佐保川や菰川の一部も運河として利用された可能性は高い。このほか、東の春日山・高円山から流れ出る数条の河川は左京城を通り羅城門付近で佐保川に合流し、南へと向かう。

## 2 平城京と寺院の歴史的環境

平城京は、7世紀の下ツ道を基準に造営され、南北の中軸線上には朱雀大路が造営された。京内は条坊道路が縦横に配され碁盤状を呈していた。京の外周を囲む羅城は南面のみで、北・東・西面は条坊道路が京城を隔る境界であった。条坊道路に囲まれた方形の坊には、離宮、宮外官衙、東西の市、貴族の邸宅や庶民の宅地が確認されている。近年では諸国の出入機関である「調廊」の存在を示唆する成果も出ている。

京内には官宮の大寺院が造営された。慶徳後、京城は徐々に田地化され、次第に大寺院の門前に人口が集中する。なかでも東大寺と興福寺、元興寺の門前廻は、中世



図 85 南西からみた西大寺周辺（2023年5月撮影）

以降、奈良の中心地となり、近世には幕府の直轄地となった奈良町が成立する。奈良町一帯は現在も開発が進み、奈良時代の遺構は希少であるが、奈良町の西方、南方の地は、近年まで水田が広がる農村地帯であり、古代の条里を色濃く残している。

奈良時代から法燈を伝える大安寺、薬師寺、興福寺、元興寺、西大寺、法華寺、唐招提寺などは、多くの歴史的建造物を有し、その境内は国史跡に指定されている。これらの寺院は、京外の東大寺や春日大社なども含めて世界文化遺産「古都奈良の文化財」の構成資産となっているところも多い。昭和41年（1966）に「古都における歴史的風土の保存に関する特別措置法」が施行され、奈良市がその対象となった。その後、平城宮跡と聖武天皇陵、春日山付近の東大寺・興福寺・元興寺・新薬師寺、西の京の薬師寺・唐招提寺は歴史的風土特別保存地区に指定され、建物や街並みなどの保存がはかられている。

平城京城における発掘調査の原因の多くは、都市開発による事前の調査である。その結果、国の史跡や名勝に指定され保存された遺跡も多い。平城京朱雀大路跡（史跡）、頭塔（史跡）、平城京左京三条二坊宮跡庭園（特別史跡・特別名勝）、旧大乗院庭園（名勝）、法華寺庭園（名勝）などがある。また、長屋王、藤原仲麻呂など、貴族の邸宅の位置がきらかになった。寺院の調査では、現境内の範囲外で奈良時代の建物遺構を確認しており、創建時の伽藍復元に大いに貢献している。このほか、条坊道路や庶民の宅地が随所で見つかり、奈良時代の都の様子がうかがい知ることが可能となった。（今井規樹）

# 法華寺境内および 法華寺庭園の調査

—第 644・645・651 次

## 1 概要

光明宗法華寺では、2018年にとりまとめた「名勝法華寺庭園保存活用計画」に基づき名勝法華寺庭園の保存整備事業を進めている。奈文研では光明宗法華寺からの委託を受け、2019年度から保存整備事業にともなう発掘調査を継続的に実施している。ここでは、2021・2022年度に名勝法華寺庭園の保存整備事業および法華寺境内の消火設備改修工事にともない実施した平城第644・645・651次調査について報告する(図86)。

## 2 遺跡の位置と環境

法華寺は、天平17年(745)の平城京遷都に際し、光明皇后が平城宮東院に東接する父藤原不比等旧宅を施入して創建した寺である。はじめは宮寺と呼ばれたが、ついで大和国の因分尼寺に当てられ総因分尼寺とも称された。平安時代に衰退したが、鎌倉時代に叡尊が復興し金堂等を再建、その後、戦国時代に焼失。再び豊臣秀頼が復興するという長い歴史をもつ。もともとの伽藍中心部は現境内の南側、住宅密集地に広がっており、現在の南門がちょうど講堂の位置を踏襲するという位置関係にある。現在の法華寺境内は、旧境内の北半にあたる。

法華寺境内における既往の発掘調査には、茶室・茶庭築造にともなう事前調査によって礎石および掘立柱を使用した東西棟建物がみつかった第79-2・10次調査(昭和47年平城概報)、境内西南で収蔵庫建設に先立って調査されやはり礎石建物がみつかった第98-17次調査(昭和51年平城概報)、浴室北側の茶室建設に先立つ事前調査で奈良時代の掘立柱建物が重複してみつかった第151-16次調査(昭和58年平城概報)などがある。また、本堂、鐘樓の修理の際にも広く調査されているが、当地域の全体像や移り変わりについての所見はなお不鮮明である。

1952年には本堂の解体修理にともなう発掘調査がおこなわれ、本堂の下で桁行7間(柱間10尺等間)、梁行4間(柱間9尺等間)の東西棟の二面廂建物を検出し、1954年にはその南側(本堂前面)でも同規模の東西棟建物を確認した<sup>1)</sup>。本堂下の建物は当初掘立柱と礎石を併用していた

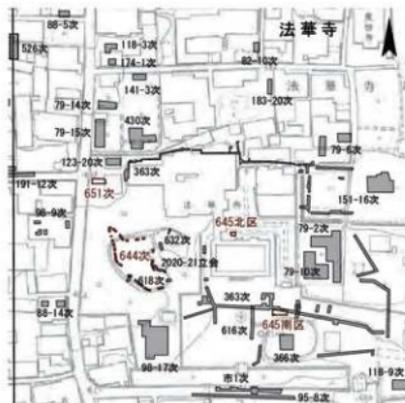


図86 第644・645・651次調査区位置図 1:2000

が、後に掘立柱を礎石へ変えたこと、本堂前面の建物は当初掘立柱建物であったが、後に礎石建へと建て替えられたことも判明した。

2003年度の防災施設改修工事に先立つ第363次調査では、本堂前面の東西棟建物SB8600の東で、それと同規模と推定される東西棟建物SB8601を新たに検出した(『紀要2004』)。

2019年度の防犯施設改修・増設にともなう第616次調査では、SB8601の柱想定位置で重複する2基の柱穴を検出し、掘立柱建物の段階で2時期以上の建て替えがおこなわれた可能性を指摘した(『紀要2020』)。

名勝法華寺庭園は法華寺客殿にともなう庭園である。法華寺本堂西辺の築地堀に囲まれた一画にあたる「主庭」は、客殿のうえの御方からの眺望を意図し、中央に池を配して南の正面に位置する出島上の築山には枯滝石組みと枯流れを設ける。その背後には常緑樹の混植による高生垣がまわる。上の御方から南西方向には、土橋越しに岩島や対岸にある築山の石組を望むことができる。

2019年度から保存整備事業の一環として発掘調査を実施しており、2019年度の第618次調査では池護岸の崩壊原因および構築技法の解明を目的に、池南半部の岸について調査した(『紀要2020』)。

2020年度の第632次調査では、池の北半部を対象に、築山景石の状況の確認および池護岸の状況を解明することを目的として調査をおこない、築山北面の景石の一部は原位置を保っていないことなどが判明した。また、これと並行して実施した庭園護岸改修工事にともなう立会

(第2020-24次)では、古代の柱穴とみられる遺構を検出している(「紀要2021」)。

### 3 第644次調査

#### (1) 作業の経過

名勝法華寺庭園の石組護岸修理にともなう発掘調査である。計21カ所の修理箇所について、石組護岸修理に必要な掘削範囲・掘削深度の中で、古代の遺構の有無を確認した。各修理箇所の呼称と位置は図87に示した。

調査期間は2022年1月24日から2月14日までである。1月24日に現地協議。2月1日に旧トレンチ(第618次3トレンチ)再掘、19区表土掘削。2日に17・18・カ・19区を完掘、17区で凝灰岩を検出。3日に17区の凝灰岩を精査し写真撮影。4日に13・14・21区を完掘。7日に7・8・9・9b・10・11区を完掘。8日に2・3・ア・4・5・6区を完掘。9日に4区の写真撮影。14日に1・15区を完掘。記録を作成して調査を終了した。

本調査では、発掘調査と並行して、出土遺物の洗浄・分類等の作業を実施し、調査終了後も継続して整理作業をおこなった。

#### (2) 調査の方法

発掘調査は石積護岸の修復工事と同時並行でおこなった。調査では基準点平城№54(X=-145.389.024, Y=-18.064.600, H=61.364m)から、トータルステーションで調査区内に基準線を設定し、縮尺1/20を基本に平面図を作成した。標高は、オートレベルで直接水準移動をおこなった。掘削および遺構検出作業は、すべて人力でおこなった。写真記録はデジタル撮影でおこなった。

#### (3) 基本順序

現地表から表土(厚さ5cm程度)、石組護岸裏込土(約60cm)、地山(緑灰色細砂層、現地表下約60cm、標高67.0m付近)である。掘削範囲・深度は、基本的に石組護岸裏込土内(下層は粗砂・上層は砂質土もしくは粘質土)におさまるが、部分的に地山とみられる緑灰色細砂層(8・11・17)および庭園盛土の可能性ある黄褐砂質土(11区)を検出した。

#### (4) 検出遺構

いずれの調査区においても、古代の遺構は確認できなかった(図88、PL.26~29)。11・17区では最下面で地山とみられる緑灰色細砂層を検出したが、確実な古代の遺構は未検出である。17区(中島西北角)の緑灰色細砂層上



図87 第644次調査の調査区位置と呼称 1:500

面では、東西・南北それぞれ約75cm、厚さ約35cmの凝灰岩切石を検出した(PL.28-6)。上面は平坦面をなし、上半部を台形状に、下半部を逆台形状に斜めにカットする。二上山産か。切石の下面に瓦が入り込むため原位置を保っていないとみられるもの、全体は未検出であり用途や時期などの詳細は不明である。礎石や仏像台座、石塔の部材などの可能性がある。(大澤正吾/文化庁・桑田調也)

#### (5) 出土遺物

石組護岸裏込土を中心に瓦類、土器類が出土した。**瓦磚類** 本調査で出土した瓦磚類は表15のとおりで、軒丸瓦9点、軒平瓦17点、丸瓦60.5g、平瓦330g、磚1点、このほか道具瓦、刻印瓦などが出土した。軒丸瓦は細片が多く、以下では軒平瓦で残りのよい資料についてのみ記述する(図89、PL.29-3)。

図89-1は6681Fで、凹面ヨコケズリ、曲線頸で凸面はタテ縄タタキ後に頸部をヨコナデする。21区出土。2は6714Aで、凹面の瓦当縁から後方へ7cmほどの幅でヨコケズリするも布目が残る。曲線頸で頸部はタテケズリ、凸面はタテ縄タタキを施す。5区出土。3は6716Cで、凹面ヨコケズリ、段頸で頸長は7cm、凸面はナデ調整。ア区出土。6716Cは大安寺で多く出土しており、法華寺旧境内ではごく少ない。以上は奈良時代の軒平瓦である。4は平安時代の軒平瓦で、凹面ヨコケズリ、曲線頸で頸部から凸面にかけてタテケズリ。5区出土。5は唐草文で園縁が巡る。凹面には布目がみられる。ア区出土。6は均整唐草文と珠文で、法華寺22と同範であろう<sup>2)</sup>。1区出土。7は唐草文で周囲に園縁が巡る。法華寺23と同範であろう。2区出土。以上は鎌倉時代の軒平瓦である。8は室町時代の軒平瓦で、半截菊花文と水波文。18区出土。9は中心飾りが蓮華文系である。2区出土。10は半

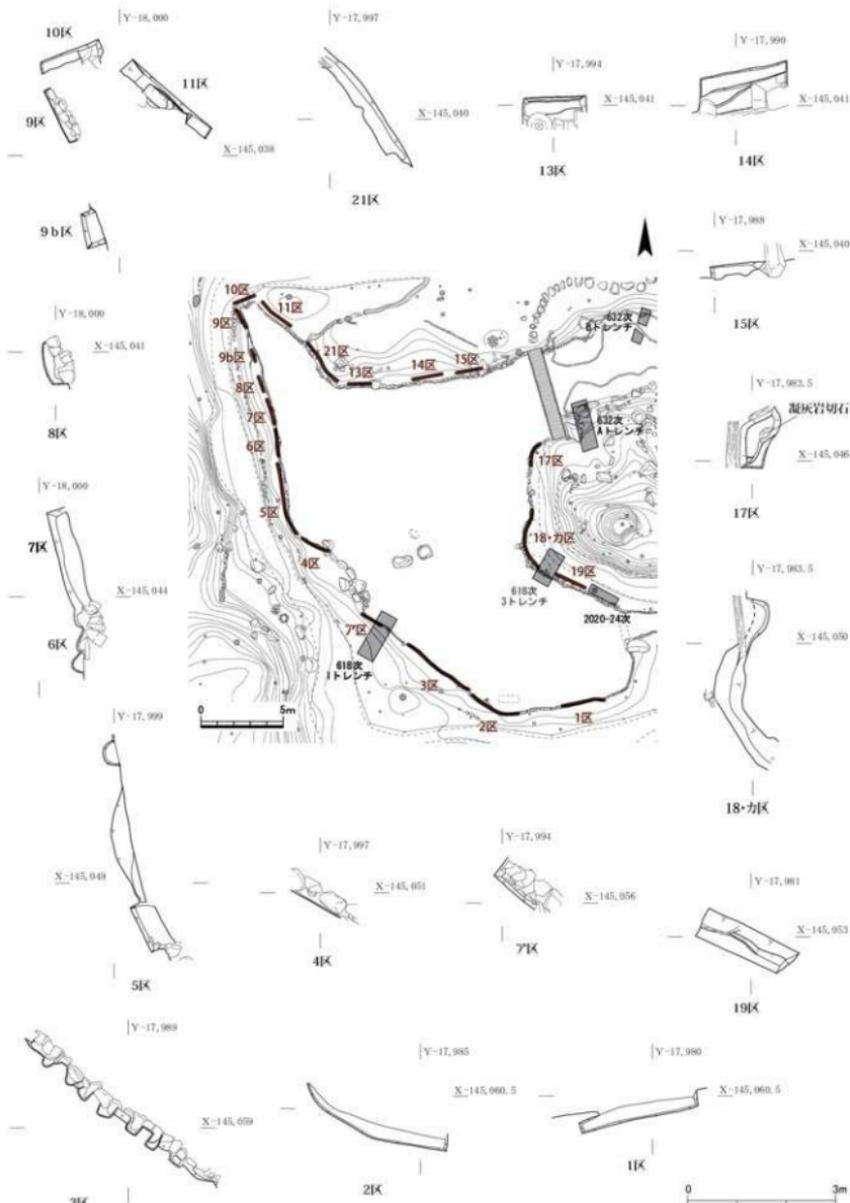


図88 第644次調査区遺構図 1:100 (調査区位置図は1:300)

裁菊花唐草文の軒棧瓦である。2区出土。11と12は中心飾りが不明、別造である。いずれも14区出土。以上は江戸時代の瓦である。表中の伏間瓦の刻印は「瓦佐」である。

(今井晃樹)

**土器・陶磁器類** 各トレンチより、古代から近現代までの土師器・須恵器・瓦質土器・施釉陶器・染付など、整理用コンテナ1箱分の土器・陶磁器類が出土した。深鉢形・浅鉢形・楕鉢形の瓦質土器を比較的多く含む。(丹羽崇史)

**鉄 滓** 5区から鉄滓が4点出土した。うち1点は楕形鉄滓。残存長6.1cm、厚さ1.8cm。

**石 材** 板状ないし塊状の花崗岩、安山岩、片麻岩片が計9点出土した。17区の石橋下から出土した板状の花崗岩片がもっとも大きく、長さ38cm、厚さ6cm程度。

(和田一之輔)

表15 第644次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦		軒平瓦		軒棧瓦	
型式	種 点数	型式	種 点数	種類	点数
62S	A 1	66B1	F 1	近世	1
菊花文(近世)	1	6714	A 1		
巴 (中世)	2	6716	C 1	軒棧瓦計	1
(近世)	2	平安	2	その他	
中世	1	鎌倉	2	丸瓦 (刷印)	1
近世	1	室町	1	平瓦 (刷印)	4
型式不明	1	近世	6	棧瓦 (完形)	1
		時代不明	3	箱裏斗瓦	1
				伏間瓦	2
				(刷印)	1
				鬼瓦	1
				飾り瓦	1
				特殊磚	1
軒丸瓦計	9	軒平瓦計	17	その他計	13
	丸瓦		平瓦		磚
重量	60.541kg		330.386kg		0.497kg
点数	445		2716		1
					凝灰岩
					0.145kg
					2

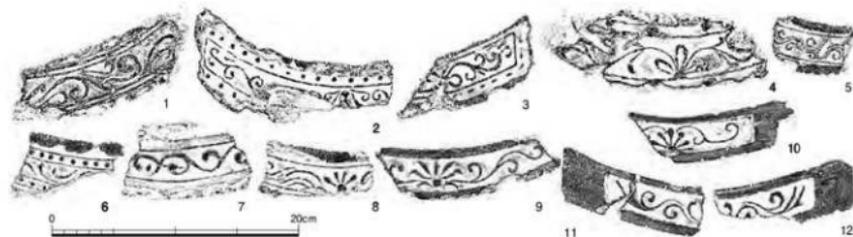


図88 第644次調査出土軒平瓦 1:4

## 4 第645次調査

### (1) 作業の経過

史跡法華寺旧境内における消火設備改修工事にとまなう発掘調査である。工事箇所のうち、一斉解放弁バルブピットを設置する本堂の裏手(北区)と本堂の前庭部分(南区)の2ヵ所については発掘調査を実施し(図86)、その他の部分については工事立会に対応した。2ヵ所の発掘調査区は、北区が本堂の下で検出した東西棟建物のすぐ北側、南区がSB8600とSB8601の間にあたり、奈良時代の顕著な遺構は想定されていない場所である。想定の場合、および奈良時代以降の顕著な遺構の確認を主たる目的として調査を実施した。

調査期間は2022年1月17日から2月9日までである。1月12日・13日に工事業者による縄張り、14日に調査区の座標測量とレベル移動。17日に南区の掘削を開始し、調査区を東に拡張した。24日に北区の掘削を開始、南区の全景写真を撮影。27日に北区の全景写真を撮影、28日に北区を引き渡し。31日に南区をさらに東へ拡張。2月3日に南区の全景写真を撮影。9日に南区に遺構面保護のための砂を撒いた状態で引き渡し調査を終了した。

本調査では、発掘調査と並行して、出土遺物の洗浄・分類等の作業を実施し、調査終了後も継続して整理作業をおこなった。

### (2) 調査の方法

調査区は、北区は東西1.7m、南北1.4mの2.38㎡、南区は一部を第363次調査区と重複させて東西6m、南北2mの12㎡として設定した。

北区は、すべて人力で掘削・遺構検出をおこなった。

南区は、表土・遺物包含層の掘削は重機で、遺構検出・掘削作業は人力でおこなった。調査では、GNSS測量機を用いたネットワーク型RTK法で調査区内に基準線を設定し、縮尺1/20を基本に平面図を作成した。標高は平城No.54 (X=-145.389,024, Y=-18,064.600, H=61.364 m) からオートレベルで直接水準移動をおこなった。写真記録はデジタル撮影でおこなった。

### (3) 基本層序

**北区** 現地表から①表土(厚さ10~15 cm)、②近世以降の遺物包含層(約25 cm)、③黄褐色シルト(整地土、5~10 cm)、④黄褐色粘質土(地山)である(図90)。③層および④層上面で遺構検出をおこなった。検出面の標高は約67.2 m(現地表下約40 cm)である。

**南区** 現地表から①表土・造成土(10~25 cm)、②にぶい黄褐色砂質土(遺物包含層、調査区東部のみ、約10 cm)、③黄褐色粘土(地山)、④にぶい黄褐色粗砂(地山)である(図91)。③層上面で遺構検出をおこなった。検出面の標高は66.6~66.3 m(現地表下15~40 cm)である。

### (4) 検出遺構

**北区** 調査区東部の③層上面で時期不明の落ち込みSX11712を検出したほかには、近世以降の擾乱のみの確認にとどまり、顕著な遺構は認められなかった(図90、PL30-1)。

**南区** ③層上面で柱穴1基・土坑5基(古代1基、中近世3基、時期不明1基)を検出した(図91、PL30-2)。

**東西棟建物 SB8601** 調査区東北隅の第363次調査区との重複部分で、身舎西北隅柱の柱穴を再検出した。調査区東南隅付近は、身舎西妻柱の想定位置にあたるが、後述の土坑SK11706を検出したのみで、礎石の据付・抜取痕跡や掘立柱の柱穴などは検出できなかった。

**土坑 SK11706** 調査区東南隅で検出した。東西0.5 m以上、南北0.3 m以上、深さ約30 cm。埋土はしまりの悪い灰黄褐色粗砂で、植物種実・木片を含む。埋土の様相から、第363次調査で検出した池SG8605の延長部とみられる。池SG8605は、「大和名所図会」(寛政3年(1791)刊)に描かれている鐘樓を取り巻く池に比定されている(「紀要2004」)。

**土坑 SK11707** 調査区中央部で検出した。東西1.6 m以上、南北1.8 m以上、深さ約55 cm。埋土に土器・瓦を多く含む。完形の灯明皿がまとまって出土した。

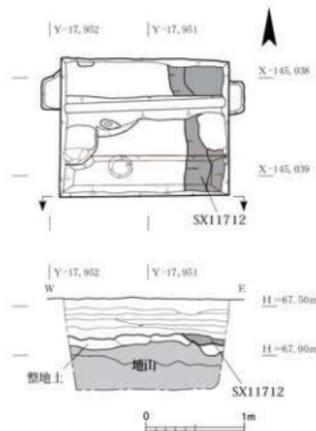


図90 第645次調査北区 遺構図・南壁土層図(東西反転) 1:50

**土坑 SK11708** 調査区中央部で検出した。東西1.0 m以上、南北0.7 m以上、深さ55 cm以上。さらに西(既設管の下)と南(調査区外)に続く。土坑SK11707と重複し、それより古い。出土土器から、平安時代中頃の遺構とみられる。古代の瓦が多量に廃棄されており、周辺の瓦葺建物の修理や廃絶に関わる可能性がある。

**土坑 SK11709** 調査区西北隅で検出した。東西0.5 m以上、南北0.3 m以上、深さ45 cm以上。

**土坑 SK11711** 調査区西南部で検出した。第363次で検出した落ち込みの北の続き。西屑は既設管を越えて北に伸びず、管の下で北東に折れると推定される。第363次の所見とあわせると、東西0.3 m以上、南北1.2 m以上、深さ40 cm以上。さらに東(既設管の下)に続く。時期不明。(桑田調也)

### (5) 出土遺物

**瓦葺類** 本調査で出土した瓦葺類は表16に示したとおりで、主な瓦葺の出土量は、軒丸瓦23点、軒平瓦15点、丸瓦86kg、軒平瓦234kg、磚2kgである。以下、残りのよい軒瓦のみ記述する(図92、PL31-1)。

図92-1は6282Baで丸瓦部が残存、瓦当から約15 cmのところ焼成後に穿孔した釘孔が1か所ある。2は6301I、外区外縁に線刻面文が残る。8は6285Aで調整等は磨滅のため不明。3は新形式の軒丸瓦である。中

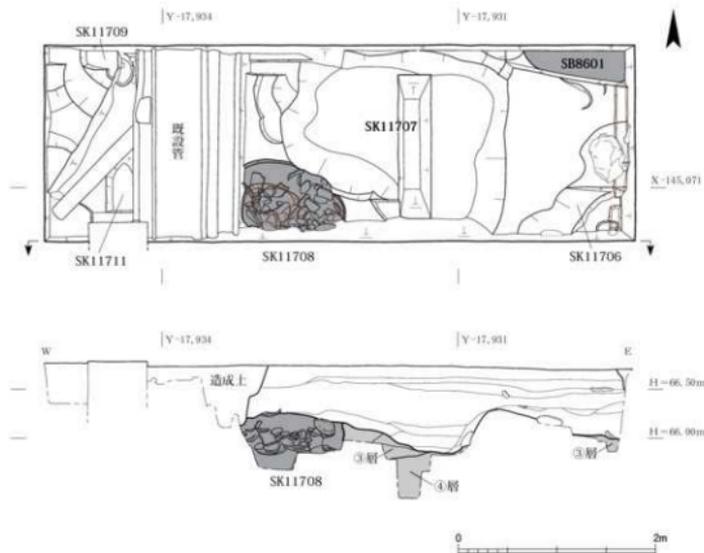


図91 第645次調査南区 遺構図・南壁土層図(東西図) 1:50

房は全体にやや突出し、蓮子は磨滅のため不明瞭だが1+8あるいは9の可能性がある。蓮弁は複弁8弁で独立間弁、外区の珠文は20であろう。外区外縁は低い直立縁で線刷歯文がある。瓦当個縁には范端痕が残る。9は6671B、頸部は欠損している。以上は奈良時代の軒瓦である。4の軒丸瓦は、中房蓮子が1+4、中房周囲には圈縁が巡る。蓮弁は単弁16弁、外区には20の珠文を飾る。外縁に鋸歯文はなく、瓦当個縁には范端痕がみられる。平安時代中期の瓦であろう。表16に示した6721型式も含めて、1~4、8・9はSK11708から出土した。7は6667A、段頸だが調整等は不明、SK11706から出土した。5は巴文軒平瓦、6は「法」字文の薬師寺96型式。5・6は鎌倉時代の軒瓦でSK11707から出土した。(今井見樹)

**土器・土製品** 本調査では、整理用コンテナ4箱分の土器・土製品が出土した。うち2箱分が遺構からの出土である。土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・陶磁器といった古代から近現代までの資料を含む。遺構の年代に関わる土器を示す(図93, PL.31-2)。1・2はSK11708出土、

表16 第645次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦		軒平瓦		その他	
型式	種点数	型式	種点数	種類	点数
6282	Ba 1	6667	A 1	平瓦(刷印)	2
	H 1	6671	B 1	鬼瓦(中世)	1
6285	A 1	6721	? 1	瓦(近世)	1
6301	I 1	古代	2	用途不明道具瓦	1
巴(中世)	1	平安	1	井戸枠磚	2
兼096	3	鎌倉	2		
新型式(奈良)	1	中世	4		
古代	2	近世	1		
平安	1	型式不明	1		
中世	8	時代不明	1		
近世	1				
時代不明	2				
軒丸瓦計		軒平瓦計		その他計	
23		15		13	
丸瓦		平瓦		磚	
重量		重量		重量	
86.189kg		234.421kg		2,378kg	
点数		2,394		4	
				凝灰岩	
				1,535kg	

3~12はSK11707出土である。

1・2は黒色土器の碗。いずれも貼り付け高台。1は内黒のA類で、森降分類<sup>3)</sup>の畿内系Ⅲ類。2は両黒のB類で、畿内系Ⅳ類。1は10世紀、2は10世紀後半~11世紀に位置づけられる。

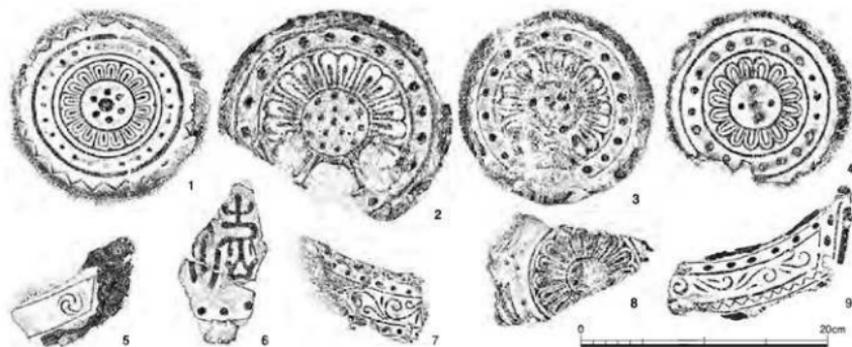


図92 第645次調査出土軒瓦 1:4

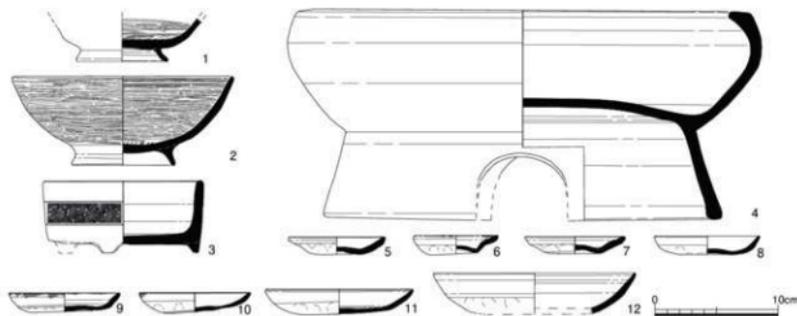


図93 第645次調査出土土器 1:4

3・4は瓦質土器。3は佐藤重聖分類<sup>4)</sup>の小型浅鉢型土器I類、4は浅鉢型土器VI-A類。3は15世紀中頃～16世紀第3四半期、4は16世紀第3四半期～17世紀初頭に位置づけられる。

5～12は土師器皿。形態・サイズにはヴァリエーションがあるが、口径8～9cmのものが最も多い。いずれも外面底部は指オサエ、口縁部と内面はナデ調整。5～7はいわゆる「へそ皿」。5・6・9・10は灯明皿で、12は全体に煤が付着する。いずれも16世紀第2四半期頃の奈良市HJ482次SX14出土品<sup>5)</sup>に様相が近い。

以上のようにSK11708からは11世紀、SK11707からは16世紀第3四半期～17世紀初頭を下限とする土器類

が出土し、遺構の年代の上限を示す。(丹羽崇史)

**有機質遺物** 木端2点と木炭14.3gが出土したほか、SK11706からナツメヤナシ亜科などの種実13点が出土した。

**鉄器** 角釘の茎が2点出土した。いずれも厚さ3～5mmの小型品で、残存長3cm程度。

**石材** SK11707から粘板岩片、安山岩片と流紋岩片が各1点、包含層(灰赤土)から安山岩片が2点出土した。後者の安山岩には表面が赤変して発泡しているものがあり、被熱の可能性がある。なお、SK11707からは黒色の焼土と木炭も少量出土している。(和田一之輔)

## 5 第561次調査

### (1) 作業の経過

名勝法華寺庭園の西北部に所在する蔵の改修および周辺部の造成にともなう事前の確認調査である。

10月11日に調査区の設定、レベル移動をおこない、10月12日に人力による掘削を開始した。10月14日には調査区全景写真の撮影をおこなった。10月18日に遺構図および土層図を作成し、埋め戻しに着手した。10月19日に埋め戻しを完了し、現場の撤収をおこない、発掘作業を終了した。出土遺物の洗浄・整理作業は発掘作業と並行しておこなった。なお、10月14日には「名勝法華寺庭園保存整備委員会」の現地視察と調査指導を受けた。

### (2) 調査の方法

現在の法華寺西辺の築地塙と蔵の間の西から東に下る傾斜地に、東側を通るU字溝を一部よける形で東西5.5m、南北3.0mの調査区を設定した。調査地は法華寺境内西北隅、名勝法華寺庭園の西北の最奥にあたるため重機等の搬入が不可能であり、すべて人力により掘削をおこなう必要があった。そのため、まず南側の幅2m分のみ掘削をおこない、調査状況を踏まえて当初設定した調査範囲まで拡張する方針とした。しかし後述のとおり調査の結果、調査地付近は近現代の盛土により厚く造成されていることが判明したため拡張はおこなわなかった。そのため、最終的な調査面積は東西5.5m、南北2.0mの10.4㎡となった。

発掘作業は、人力により表土を除去したのち、調査区の南辺および東辺のみ幅約70cmのサブトレンチを設定して掘り下げをおこなった。サブトレンチ内の西部では近世以前の整地土の可能性がある黄褐色砂質土の上面まで掘削をおこなった。サブトレンチ内の東部では湧水のため掘削が困難となったため、黄褐色砂質土の上に堆積する褐斑灰色シルト層中までの掘削とした。本調査の目的は調査地周辺の造成計画にともなう地下遺構への影響の有無の確認であったが、上記掘削により遺構面への影響がないことが確認できたため、調査を終了した。

調査終了時には遺構面保護と掘削停止面の明示を目的に砂を散布した上で埋め戻しをおこなった。

調査ではGNSS測量機を用いたネットワーク型RTK法で調査区内に基準線を設定し、縮尺1/20を基本に平

面図を作成した。標高は平城No54 (X=-145.389024, Y=-18.064600, H=61.364 m) からオートレベルで直接水準移動をおこなった。写真記録はデジタル撮影をおこなった。

### (3) 基本層序

現地表から①表土(厚さ10~55cm)、②近現代の造成土(30~45cm)、③近現代の旧表土(10~20cm)、④灰褐色シルト(5~30cm)、⑤褐斑灰色シルト、⑥黄褐色砂質土である(図94)。

④の灰褐色シルトは奈良時代~近世の遺物を含む遺物包含層である。⑤の褐斑灰色シルトは奈良時代~近世の遺物を含み、検出した上面が比較的平坦であるため遺物包含層または近世の整地土の可能性が高い。⑥の黄褐色砂質土は掘削をおこなっておらず性格の詳細は不明だが、土質が均質で非常に締まりが良いため近世以前の整地土の可能性が高い。

⑤の褐斑灰色シルトは調査区東半で現地表下約1.3m、標高約68.0mからみられ、最も深い調査区東端で標高約67.6mまで確認した。⑥の黄褐色砂質土は調査区西半で現地表下1.0~1.2m、標高68.0~68.2mで確認した。

### (4) 検出遺構

明確な遺構は確認できなかったが、土層観察等により現地形の形成および旧地形に関する所見を得た(図94、PL32-1)。

調査区のスグ西側には現在の法華寺境内の西辺となる築地塙が南北に通っており、調査区周辺はその築地塙に向かって東から西に向かって80cmほど高くなっている。調査では現地表下約60~90cmの標高68.4m付近で旧表土を、その下で近世の遺物を含む遺物包含層である灰褐色シルトを確認したが、灰褐色シルト上面の標高は調査区東端で約68.20m、西端で約68.45mであり、その傾斜は現地表面に比べ緩やかである。すなわち、現在みられる西側に向かって高くなる地形は近現代の造成およびその後の表土の堆積によって形成されたことがわかる。

近世以前の遺構面については一部で可能性のある層を検出したが詳細は不明である。ただし、本調査成果を踏まれば周囲は本来は西および北に向かって緩やかに標高が高くなる地形であった可能性が想定できる。

### (5) 出土遺物

**瓦類**(PL32-2) 表土および近現代の造成土を中心に大量の瓦類が出土したが、発掘作業と並行して現地

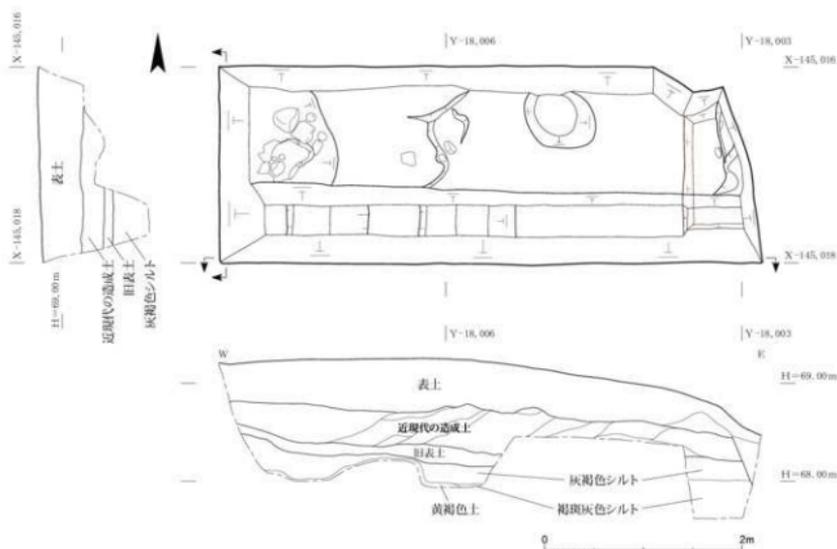


図94 第651次調査区遺構図・西壁・南壁土層図(南壁は東西反転) 1:50

選別をおこない、古代・中世に属するとみられるものと近世以降でも特徴的なもののみ持ち帰り、整理作業の対象とした。整理作業の対象とした瓦磚類は丸瓦121点(約30.9kg)、平瓦480点(約76.6kg)で、その概要は表17のとおりである。なお、整理作業の対象外とした瓦は調査区の埋め戻しに合わせて埋め戻した。

軒丸瓦は5点出土した。古代の型式不明のもの1点、中世の巴瓦2点(図95-1・2)、近世以降の巴瓦2点がある。軒平瓦は4点出土した。3は鎌倉時代の素文縁唐草文軒平瓦で「薬師寺報告」における薬師寺321型式と同范である。平瓦は広端部凸面側を斜めに削りそこに瓦当の粘土を貼り付け、そのうえでさらに外縁の下辺のみ別の粘土を加えて成形している。凸面には凹型台の圧痕がみられる。これまで薬師寺のほか海龍王寺からも出土しており、建長5年(1253)頃の法華寺金堂の再建時に用いられたものとされる(『紀要2020』)。軒平瓦はほかに近世のものが3点出土した。

鬼瓦は中世のものが2点出土した。外縁付近のみの遺存であり詳細は不明である。

そのほか蟻羽瓦や目板瓦といった道具瓦が出土しているが、いずれも近世以降のものである。

なお、これらの軒瓦、鬼瓦等はいずれも表土および近

表17 第651次調査出土瓦類集計表

軒丸瓦		軒平瓦		軒椽瓦	
型式	点数	型式	点数	型式	点数
古代	1	薬師寺321	1	近世	2
巴(中世)	2	近世	3		
(近世)	1			軒椽瓦計	2
(近世～近代)	1			その他	
				蟻羽瓦(近世)	1
				鬼瓦(中世)	2
				目板瓦	1
				用途不明道具瓦	1
軒丸瓦計	5	軒平瓦計	4	その他計	5
		丸瓦		平瓦	
重量		30.853kg		76.635kg	
点数		121		480	

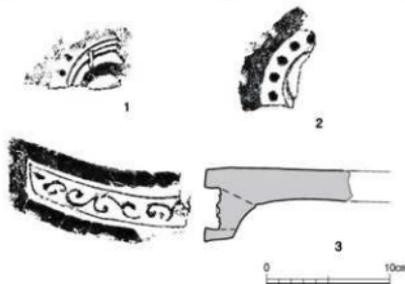


図95 第651次調査出土軒瓦 1:4

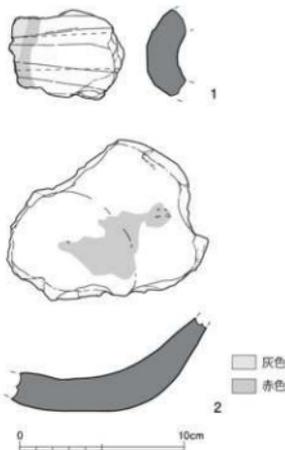


図96 第651次調査出土冶金関連遺物 1:3

現代の造成土からの出土である。(川畑 純)

**土器・土製品** 本調査区からは整理用コンテナ1箱分の土器が出土した。いずれも小片で、古代の須恵器・土師器を少量含むが近世の瓦質土器や陶磁器が主体である。近現代の造成土からは染付碗や瓦質土器の鉢片が出土し、灰褐色シルト層からはS字状の口縁部を呈する瓦質土器のすり鉢や灯明皿として転用した土師器小皿が出土した。いずれも近世以降に位置づけられる。(小田裕樹)

**冶金関連遺物** 埴塀片1点、輪羽口片1点が出土した。輪羽口片(図96-1、PL32-3-1)は胴部の表面に長軸方向の成形痕が明瞭に残る。地の色調は橙褐色で、先端部は灰色～薄灰色に変化する。残存長7.0cm、残存幅5.5cm。近現代の造成土出土。埴塀片(図96-2、PL32-3-2)は底部付近のみが残存し、口縁にむけて緩やかに立ち上がる。内面、外面ともに色調は明橙褐色で、内面の一部が赤褐色に被熱変色する。残存器高5.8cm。残存深さ3.7cm。底部の厚さ2.0～2.3cm。残存部から復元した最大径は約16cm。表土出土。

**金属製品** 鉄角釘(PL32-3-3)が1点出土した。残存長7.3cm。灰褐色シルト出土。このほかに表土、近現代の造成土から不明金属片が数点出土した。出土層位から判断すると、いずれも近世以降の遺物とみられる。(浦 響子)

## 6 まとめ

今回の調査では、狭小ながら名勝法華寺庭園および史跡法華寺旧境内の比較的広い範囲での発掘調査をおこなった。その成果は次のとおりである。

第644次調査では21ヵ所で発掘調査をおこなったが、ほとんどの調査区で掘削は石組護岸の裏込土内におさまった。地山を確認した3ヵ所(8・11・17区)についても、古代の遺構は確認できなかった。ただし、17区で検出した凝灰岩は、古代の遺構に由来する可能性があるものとして注目される。

第645次調査では「大和名所図会」に見える近世の寺観の復元や、不明な点が多い平安時代の境内の様相解明に寄与しうる情報を得ることができた。

第651次調査では明確な遺構は確認できなかった。一方で、土層の観察等により現状の地形の形成および旧地形の様相を明らかにすることができ、法華寺旧境内の地形の変遷の復元に資するデータを得ることができた。

(大澤・森田・川畑)

### 註

- 1) 浅野清「大和法華寺に於ける新発見について」『大和文化研究』創刊号、1953。奈良県教育委員会文化財保存課「重要文化財法華寺本堂南門鐘樓修理工事報告書」1956。なお、本堂前面の建物(SR8600)は、平成第363次調査の成果によると、梁行も10尺等間とされる(配要2004)。
- 2) 『大和古寺大観』第5巻、岩波書店、1978、解説、54頁図40参照。以下、法華寺の型式番号は上記本による。
- 3) 森隆「黒色土器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社、1995年。
- 4) 佐藤聖聖「大和における瓦質土器の展開と西期」『中近世土器の基礎研究』XI、1996。
- 5) 奈良市埋蔵文化財調査センター「南都出土中近世土器資料集-奈良町高天町遺跡(旧第559次調査)出土資料-」奈良市教育委員会、2014。



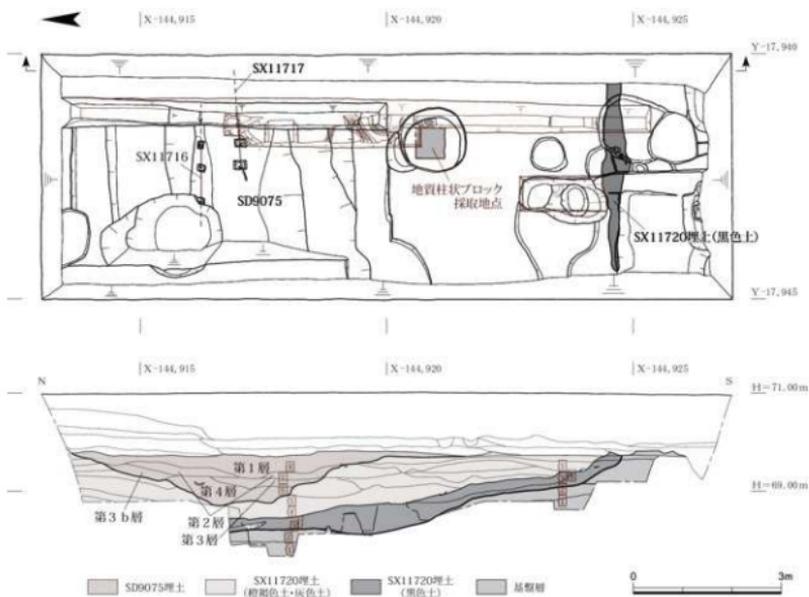


図98 第647次調査区透視図・東壁土層図 1:100

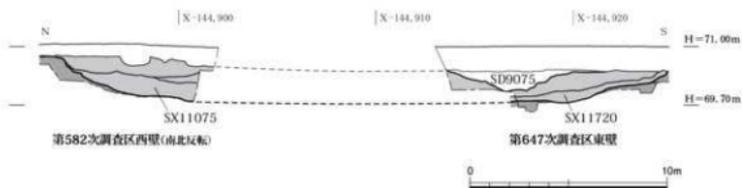


図99 東西溝状窪地SX11075・11720の対応関係 1:250

**一条条間路北側溝SD9075** 調査区北部で検出した東西方向の素掘溝(PL33-2)。溝幅は約6.3m、検出面からの深さは約1.0m。埋土は大別して4層に分かれる(最上層から第1~4層と呼称)。また北層で浅い段を確認した(第3b層)。調査区東方の第417・426次調査で検出したSD9075と南北位置がほぼ一致しており、この西延長に

あたるとみられる。出土遺物から、SD9075は平安時代まで機能していた可能性がある。

**東西杭列SX11716・11717** 調査区北部、一条条間路北側溝SD9075の範囲内で検出した東西方向の2条の杭列。東西杭列SX11716はSD9075の北層付近で計4本、東西杭列SX11717はSD9075のほぼ中央で計3本検出した。

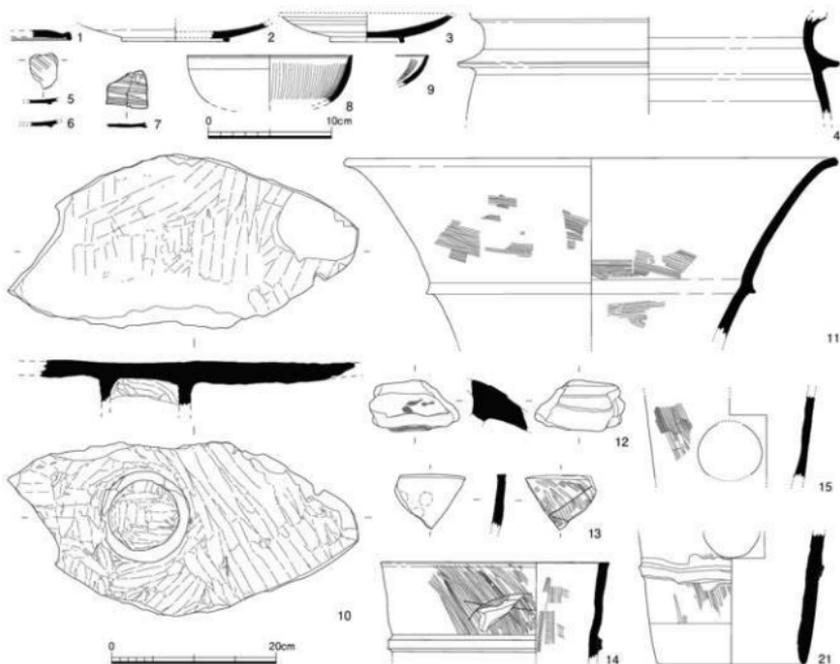


図100 第647次調査出土土器・埴輪 1:4 (1~9) 1:6 (10~15・21)

いずれも直径は約7cm、杭の上端の標高は約69.0m。取り上げた杭の長さは約1mに及び、先端は褐灰色細砂層に達していた。杭列同士の間隔は約80cmだが、それぞれの杭の間隔は36~68cmと一定でない。SX11716はSD9075の北屑付近に位置することから、溝北屑の護岸の一部である可能性がある。SX11717の西側で原位置を留めない杭1本が出土した。SX11717の一部であった可能性がある。

**東西溝状落込 SX11720** 調査区中央で確認した落ち込み(PL34-1)。調査区東端に設けたサブトレンチの土層観察によると幅11m以上、検出面からの深さ1.6m以上。検出した範囲での最下部の標高は約68.1m。調査区南部から北にかけて落ち込み、調査区外北方へと続く。

埋土は概ね3層に大別される(上から橙褐色土、灰色土、黒色土)。黒色土は東西溝状落込の底面に沿って確認でき

るが、その厚みは一定せず(20~60cm)、一部は検出面に露出する。また、黒色土は腐植土が主体とみられ、上下2層に分かれる。上層では広葉樹とみられる葉を確認し、古墳時代から奈良時代前半の遺物が出土した。下層では大型の自然木が複数並んだ状態を検出したが、枝同土を編み込んでいる状況は確認できなかった。その最下部の標高や埋土の構成から、第82・8・82・9・151-19次で検出した落ち込みや、第582次調査で検出した東西溝状落込SX11075に対応する可能性が高い(図99)。これらの遺構と一連のものと考えた場合、南北幅が約31m、全長は東西100m以上におよぶことになる。出土遺物から、谷状の地形を平城京造営時に埋め立てたものと考えられる。(山崎有生)

#### (4) 出土遺物

**土器・土製品** 本調査では、整理用コンテナ9箱分の

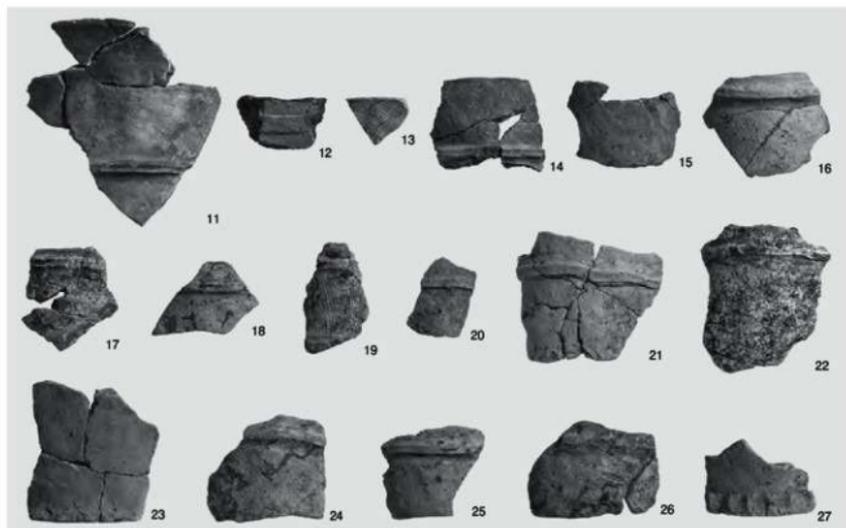


図101 第647次調査出土埴輪(黒R不詳)

土器類・土製品が出土した。うち8箱分が遺構からの出土品である。土師器・須恵器・緑釉陶器・埴輪・陶棺・陶磁器といった古墳時代から近現代までの資料を含む。遺構の年代に関わる土器を1～9、それ以外の注目すべき遺物を10～27に示す(図100・101)。1～7はSD9075出土(1・2は第1層、4～6は第2層、7は第3b層)、8～27はSX11720出土である。

1は須恵器杯B蓋。口縁部が屈曲する。2・3は緑釉陶器皿、4は土師器羽釜、5～7は黒色土器A類の椀。これらは8世紀後半から9世紀の様相を呈する。

8・9は土師器杯C。暗文を施し、平城宮土器I・IIの8世紀前半に位置づけられる。10は須恵質陶棺の底部から脚部。両面ともナデ調整。円筒形の脚部の径は約11cmで、須恵質陶棺としては脚が小型化したものである。こうした特徴は7世紀前半のものともみられる<sup>2)</sup>。

11～27は埴輪(PL34-2)。11・12は黒斑を有し、川西幸福年<sup>3)</sup>のⅢ期(5世紀前葉)の埴輪。11は朝顔形埴輪の口縁部で、内外面ともヨコハケ調整。12は蓋形埴輪の笠部。外面中央に扁平な突帯をもち、内面に赤色顔

料を確認できる。13～27は無黒斑のⅤ期(6世紀)の埴輪。透孔は円形(15・21)。突帯は低平な断面台形状をなす。いずれも外面は一次タテハケ調整のみで、内面はナデ調整。ただし、14・20・22・23は内面にタテハケ調整がみられる。13・14は口縁部片で、ヘラ記号を描く。14のヘラ記号は京都府長岡京市塚本古墳に類例があり<sup>4)</sup>、口縁部内面のミナナメハケ調整をもつ点も共通する。21～26は底部。21のみ底部調整がみられ、底端部内面を削る。27は形象埴輪の基台部。底端部に接する位置に指頭圧痕を残す底部突帯をもち、倒立技法で製作される。

以上のようにSD9075からは9世紀、SX11720は8世紀前半を下限とする土器類が出土し、遺構の年代の上限を示す。

(丹羽崇史)

**瓦磚類** 表18のとおりである。このうち平城宮式軒丸瓦6291Aと重弧文軒平瓦は一条路間路北側溝SD9075第2層出土で奈良時代の瓦である(図102)。

このほか近世の巴文軒丸瓦3点は近世以降の擾乱から出土している。

(今井晃樹)

**木製品・自然遺物** 東西溝状落込SX11720黒色土から

表 18 第 647 次調査出土土瓦種類集計表

軒丸瓦	軒平瓦		その他	
	型式	種 点数	型式	種 点数
6291	A	1	重弧文	1
巴 (近世)		3	近世	5
巴? (近世)		1	土管	2
軒丸瓦計	5	軒平瓦計	6	その他計
丸瓦		平瓦	掃	凝灰岩
重量	15.214kg	59.314kg	1.293kg	0.616kg
点数	128	601	5	1
				レンガ
				0



図 102 第 647 次調査出土軒瓦 1 : 4

自然木、葉等が整理用コンテナ 6 箱分出土した。人為的な加工が残るものに、割裂材、木端、燃えさしがある。割裂材は長さ 28.3 ~ 31.4cm で、表面に加工痕跡が残る。また、木材加工時に排出された木端が数点のほか、切断痕跡の残る自然木がある (図 103)。

また、同層からは樹皮の残る丸太材が出土した。残存長 96.0cm、幅 13.0cm、厚 7.4cm。表面に草茎等の植物質が多く付着していた (図 104)。

東西溝状落込 SX11720 下層の黒色土から出土した葉は 160 点ある。種同定の結果は広葉樹のイチイガシ? 1 点、アラカシ? 1 点、シラカシ? 3 点、ケヤキ 4 点、マメザクラ 1 点、フジ属 105 点、トチノキ 10 点、その他 35 点である<sup>5)</sup>。(浦 啓子)

#### 4 堆積構造の調査

**試料と方法** 調査区東壁周辺において、東西溝状落込 SX11720 と SD9075 の埋没過程を検討するため、2 通りの方で地質切取試料を採取した (図 98)。1 つは東壁から採取した地質切取試料で、スチロール製の角型ケース (221 × 141 × 37mm) を使い、切り出す対象の壁面を浮き出させるようにして試料を採取した。試料採取にあたっては、東壁土層図 (図 98) に示すとおり東壁北測線 (NL-①~⑧) と南測線 (SL-①~⑤) の 2 測線を設定した。さら



図 103 SX11720 出土木材



図 104 SX11720 出土丸太材

に SX11720 を検出する際、植物遺存体がまとまって出土する層位が確認された。そこで SX11720 の埋土と併せ植物遺存体の産状を調べるため、縦 400mm × 横 400mm × 高さ 550mm 程度の地質柱状ブロック (NH647-SOIL) を調査区中央部の SX11720 南側で採取した (図 98)。

スチロール製角型ケースで採取した地質切取試料は、研究所に持ち帰った後に整形し、層相写真撮影、層相観察をおこなった。その後、フジフィルム社製 X 線撮像装置 (μFX-1000) とイメージングプレートを用いて地質構造の撮像をおこなった。イメージングプレートのスキャナーには、富士フィルム社製 IP スキャナー (DYNAMIX™ HR<sup>2</sup>) を用いた。また堆積構造を 3 次元的に検討するため、奈文研の所有する高出力 X 線 CT (HXCT-1 M-SP) を用いて X 線撮像をおこなった。撮像した断層画像は、後再

構成処理をおこなった後、Python 3.11とOpen CVを用いてX線透過度および検出テクスチャー形状から構成粒子径の判別をおこない、関心領域(ROI)を任意の色調に定め3次元構築した。3次元構築にあたっては、日本ビジュアルサイエンス社製EXFact21を用いた。

一方、地質柱状ブロックは、研究所に持ち帰った後に整形(縦×横×高さ:320×341×524mm)し、HiXCT-1M-SPで撮像をおこなった。撮像はHybrid方式を選択し、水平解像度を0.1mm/pixel、鉛直解像度を0.5mm/pixel、断層厚を0.5mm/slice、断層ピッチを0.5mm、さらに1 scan set/断層画像に設定した。結果的に計1.047断層を撮像し、スチロール製角型ケースで採取した地質切取試料と同様の分析を加えた。

本報告では、地質柱状ブロックの解析結果を報告し、同試料に挟在する植物遺体群の種類やその放射性炭素年代、さらにスチロール製角型ケースで採取した地質切取試料に対する分析結果は改めて報告する。

**結果** 地質柱状ブロックの分析結果をPL35に示す。ROI分析は2つの方法でおこなった。1つはPL35-1・3に示す粒子径を主体にROI抽出をおこなったもので、PL35の凡例Aに対応する。Wentworth (1922)の粒度階区分に従って閾値を設け、各領域に凡例の通り色調を与えた<sup>4)</sup>。ただしCT撮像粒子最小値は0.1mmであり、シルト最大径0.062mmを超えるため、シルトと極細粒砂との境界は不明である。もう1つはPL35-2・3・4に示すX線透過度、すなわち物質密度を主体にROI抽出をおこなったもので、PL35の凡例Bに対応する。両者は基本的に相関するが、後者の物質密度解析では、前者の粒度組成で表示する領域を可能な限り透過し、植物遺体群の層位分布に注目して分析結果を表示している。

これらの結果から、地質柱状ブロックは下位よりI～Vの堆積区分からなることが明らかとなった。I層は混重角礫～中礫砂からなり、植物遺体を多く挟在する。II層は混小礫砂からなり、淘汰が悪い。やや不明瞭だが斜交ラミナが形成されていることから流れ込み堆積物である可能性がある。III層は混重角礫中～細粒砂からなる。IV層は植物遺体群、混礫砂、細粒砂までの細粒子が重層構造を形成する。V層は大礫を含む砂礫層に極細砂以下の細粒子を挟在する。礫層は水平的に並んでおり、整地礫面であると考えられる。I・IV層に挟在する植物遺

体群は、木質遺体が直交するように配置し、その直上、直下に草本遺体が配置していることから(PL35-4)、敷葉・敷粗朶の土木構造であるとみてよいだろう。加えて、PL35-5に示す断面で、I層をさらに下層に貫通する杭状の遺物を確認した(PL35-6)。

結果として、地質柱状ブロックで観察されたII層以外は人為的な造成土であり、II層も雨で流れ込むなど土木工事の過程で形成したものである可能性が高い。さらに東西溝状落込SX11720の埋土は、その構造から平成第530次調査で検出した敷葉・敷粗朶構造(「紀要2016」)を想起させる。

今後、この地質柱状ブロックを解体しながら、より詳細な構造の分析を進める予定である。(村田泰輔)

## 5 まとめ

当調査では、平成第417・426次調査で検出した一条条間路北側溝SD9075の西延長部分を検出した。また、一条条間路北側溝SD9075のさらに下部からは東西溝状落込SX11720の南岸を確認した。同様の東西溝状落込は第582次調査だけではなく、周辺の調査区などで検出し、全幅が約31mにおよぶことが明らかとなった。この成果から、平城京造営にあたってまず谷状地形を造成し、その上に条坊を施工していることが判明した。

当調査の成果は、法華寺旧境内の北方の条坊の実態や、平城京造営期前後における造成工事を考える上で貴重な成果と言える。(山崎)

### 注

- 1) 平成第95-2、164-14、293-7次調査においては一条条間路北側溝にSD1140の番号が付されている。
- 2) 宮本康治「堂山3号墳出土陶棺の位置づけとその系譜」『堂山古墳群』大府教育委員会、1994。陶棺の年代などの位置づけについては朝島孝氏(奈良国立博物館考古学研究所)よりご教示をいただいた。
- 3) 川西宏幸「岡崎埴輪論」『考古学雑誌』第64巻第2号、1978。
- 4) 長岡京市埋蔵文化財センター「長岡京市埋蔵文化財調査報告書54」、2010。
- 5) 業の採取および整理作業は上中央氏子(長岡京博物館特別研究員)にお世話になりました。記して感謝いたします。なお、業の同定は古生態研究所により、科学研究費助成金(21K13140:代表者浦善子)による成果を一部含む。
- 6) Wentworth, C. K. 1922. A Scale of Grade and Class Terms for Clastic Sediments. *Jour. of Geology*, Vol.30 No.5, pp.377-392.

# 西大寺小塔院の調査

一第 624・627・654 次

## 1 はじめに

今回報告する平城第 624・627・654 次調査の調査区は、いづれも平城京石京一条三坊七坪に位置し、西大寺小塔院の想定地にあたる(図 105)。本報告では、昨年度に実施した平城第 654 次調査の成果を中心とし、すでに『紀要 2021』で概要報告をおこなった平城第 624・627 次については、遺物の整理作業が終了したため、あわせて報告する<sup>1)</sup>。

## 2 遺跡の位置と環境

西大寺は、天平宝字 8 年(764)に、孝謙太上天皇(のちの称徳天皇)が、藤原仲麻呂の乱に際して、四天王像の造立を発願したことはじまる。西大寺の伽藍の中でも、諸寺に分配された百万塔が納められていた場所が小塔院である。小塔院は、宝亀元年(770)に完成したとされ(続日本紀)、堂宇の構成が「西大寺資財流記帳」(以下、資財帳)に記されている。

・・・(前略)・・・

四王院

・・・(中略)・・・

小塔院

檜皮堂一字〈長七丈。廣四丈。〉

檜皮細殿一字〈長七丈。廣二丈。〉並板敷。

北檜皮房〈長九丈。廣二丈七尺。〉

次檜皮小房〈長九丈。廣一丈二尺。〉

食堂院

・・・(後略)・・・

このように小塔院には、檜皮葺きの建物が 4 棟存在したことが窺えるものの、その配置や基礎構造(礎石建物か掘立柱建物か)は不明である。小塔院の位置については、資財帳の各院の記載順によって想定されている。各院の記述は、金堂院の後、十一面堂院、西南角院、東南角院、四王院、小塔院、食堂院と続いており、配置に沿って、反時計回りの順番で記されたと考えられている。このことから、四王院の北、食堂院の南の一角が小塔院に比定されている。



図 105 第 624・627・654 次調査区位置図 1:3000

今回報告する調査地の周辺では、食堂院(平城第 404・410・415 次<sup>2)</sup>、市 15 次<sup>3)</sup>等)、金堂院(平城第 409・422・505・521・655 次、『紀要 2007』・『同 2008』・『同 2012』・『同 2014』・本書 129~142 頁)、四王院の四王堂周囲の防災工事ともなう調査(平城第 174~25 次)<sup>4)</sup>等がおこなわれているが、これまで小塔院周辺では調査がなされていなかった。なお、調査区北方の食堂院における調査では、食堂院東辺区画施設の西南落溝に比定される溝を検出していることから<sup>5)</sup>、小塔院の東辺にあたる第 624 次調査区では、小塔院東辺区画施設の西南落溝が検出されることが想定された。また、第 627・654 次調査区はともに小塔院の中軸付近にあたる。既往の西大寺の伽藍復元案では、中軸上に堂舎が並んでいる可能性が示されており<sup>6)</sup>、小塔院の堂舎に関わる遺構の存在が想定された。(田中龍一)

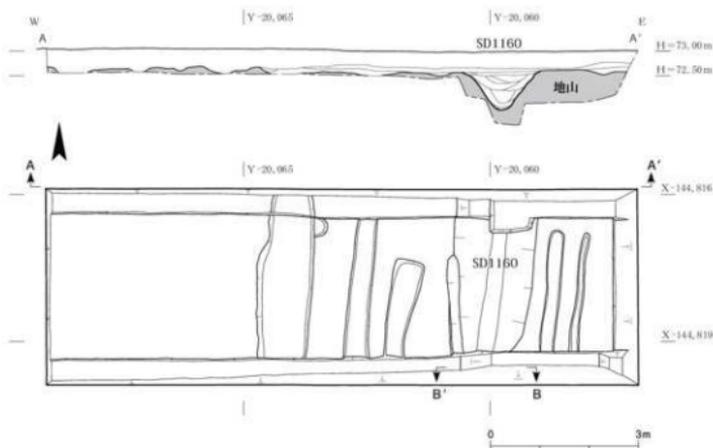


図 106 第 624 次調査区遺構・北壁土層図 1:100

### 3 第 624 次調査

#### (1) 調査の経過

**調査に至る経緯** 本調査は、西大寺小坊町における共同住宅建設にともなう発掘調査である。奈良県文化財保存課および奈良市教育委員会と協議の上、事業者からの受託事業実施申し込みを受けて奈文研が受託事業として調査を実施した。

**作業の経過** 調査期間は 2020 年 6 月 22 日から 6 月 24 日までである。6 月 22 日に基準点測量および調査区の設定、レベル移動と現場の設営をおこない、重機掘削を開始した。重機掘削の終了後、人力による遺構検出を開始した。6 月 23 日に遺構検出および遺構掘削を終了し、平面図作成と壁面土層図の作成をおこなった。6 月 24 日に調査区全景写真を撮影し、遺構面保護のための砂を撒いたのち、埋め戻しを完了して調査を終了した。本調査では、調査終了後に洗浄・分類・註記作業を実施したのち、主要遺物について実測図化作業をおこなった。

#### (2) 調査の方法と成果

**調査の方法** 小塔院の東辺区画施設の存在を予測し、調査区は東西 12 m、南北 4 m と東西に長く設定した。調査面積は 48 m<sup>2</sup> である。X・Y 座標はネットワーク型

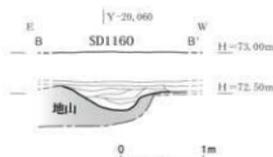


図 107 第 624 次調査区 SD1160 南壁土層図 1:60

RTK-GPS 測位 (VRS 方式) でおこない、標高は旧平城 No.14 (X=-145,126.190, Y=-19,244.829, H=69.071 m) からオートレベルで直接水準測量をおこなった<sup>7)</sup>。表土および攪乱土、耕作土、床土については基本的に重機で掘削し、床土下部以下は人力による遺構検出・掘削作業をおこなった。写真記録はデジタル撮影でおこなった。

**基本層序** 現地表から表土・攪乱土 (厚さ 20～40 cm)、その下に部分的に耕作土・床土 (10～20 cm) があり、青灰色シルト (地山) となる。遺構検出は地山上面 (標高 72.4～72.5 m) でおこなった (図 106)。

**検出遺構** 調査区の東半で南北溝 SD1160 を検出した (図 106・107, PL.36)。幅 1.5 m、深さは調査区北端で約 0.8 m、南端で約 0.3 m の茶掘溝である。約 4 m 分検出した。断面は逆台形状を呈する。溝は南北の調査区外へ続くが、底面の高さから北流していたと考えられる。埋土は灰褐

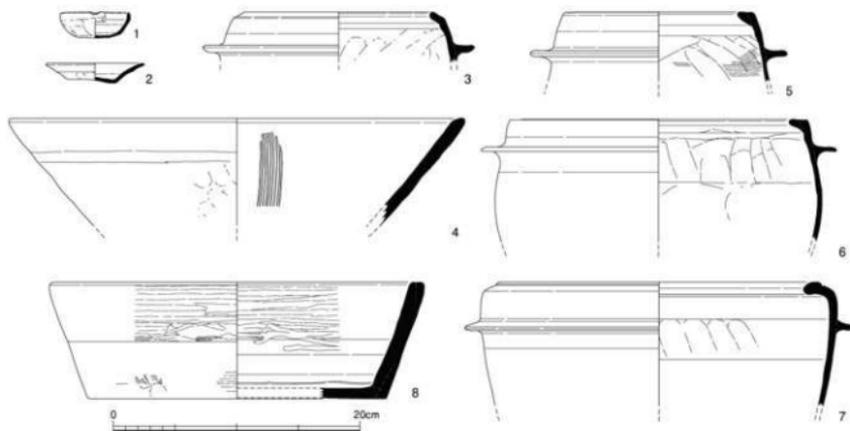


図108 第624次調査出土土器 1:4

色～灰色の粘質土で、埋土中に土器片や瓦片を含む。最下層の粗砂層からは14世紀前半から15世紀前半頃の土器が出土しており、中世まで機能した溝と考えられる。

(浦 啓子・田中)

### (3) 出土遺物

**土器・土製品** 第624次調査区からは整理用コンテナ2箱分の土器・土製品が出土した。中・近世の土師器・瓦質土器・陶磁器が中心で、わずかに奈良時代の須恵器・土師器などを一部含む。このほか緑釉陶器・龍泉窯系青磁片が出土した。これらの大半はSD1160からの出土であり、以下SD1160出土土器について記述する<sup>\*)</sup>(図108)。

1～4は灰褐色土層出土。1は土師器小皿。口径5.7cmで完形である。2は土師器皿。口径8.0cm。灰褐色を呈し、いわゆる白土器である。3は土師器羽釜。口縁部が内傾し、端部を丸くおさめる。4は瓦質のすり鉢。間隔の狭いすり目を疎に配置する。5～8は灰色粘土層出土。5～7は大和H型の土師器羽釜。5・6は口縁部が強く内傾し、端部を丸くおさめる。水平方向に延びる突帯を貼り付ける。5は体部が丸みをもち、外面にスガが顕著に付着する。7は口縁端部を肥厚する。体部外面にやや短い突帯を貼り付ける。灰色粘土層と灰褐色土層出土の破片が接合した。8は瓦質土器鉢。器壁が厚く、端部を平坦につくる。このほか最下層からは土師器羽釜の体部から突帯部の

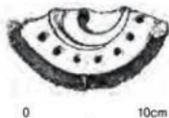


図109 第624次調査出土土軒瓦 1:4



図110 南北溝SD1160出土漆椀 約1:2

破片が出土している。

SD1160出土土器はいずれも室町時代(14世紀前半から15世紀前半頃)に位置づけられる。(小田裕樹)

**瓦磚類** 第624次調査区から出土した瓦磚類はごくわずかである。丸瓦は122点(14.034kg)、平瓦は282点(21.018kg)、磚1点(0.179kg)が出土した。図109は近世の巴文軒丸瓦である。(田中)

**その他の遺物** 南北溝SD1160から漆椀が1点(図110)、砥石が1点出土している。(和田一輔)

#### (4) 小 結

第 624 次調査区では、南北溝 SD1160 を検出した。本調査区の北側でおこなった平成第 404・415 次調査では、西大寺食堂院の東辺区画施設の西南落溝を踏襲したと解釈できる数条の溝を検出している。もっとも古い南北溝 SD931 は幅約 3 m、深さ約 0.6 m が残存する。溝心を  $Y = -20,060.6$  ととらえ、これまでの西大寺伽藍の復元に用いられてきた平城京右京の条坊の振れ「北で  $0^{\circ} 19' 50''$  西偏、西で  $0^{\circ} 18' 58''$ 」<sup>9)</sup> によって南に延長すると、本調査区の南北溝 SD1160 の溝心 ( $Y = -20,059.7$ ) に一致する。

このことから、南北溝 SD1160 は小塔院の東辺区画施設の西南落溝を踏襲した溝である可能性が高い。溝の最下層からは中世の遺物が出土していることから、古代の溝の位置を踏襲しつつ、中世まで機能した溝と考えられる。

(浦)

## 4 第 627 次調査

### (1) 調査の経緯

**調査に至る経緯** 本調査は、西大寺小坊町における個人住宅建設にともなう発掘調査である。調査地は西大寺小

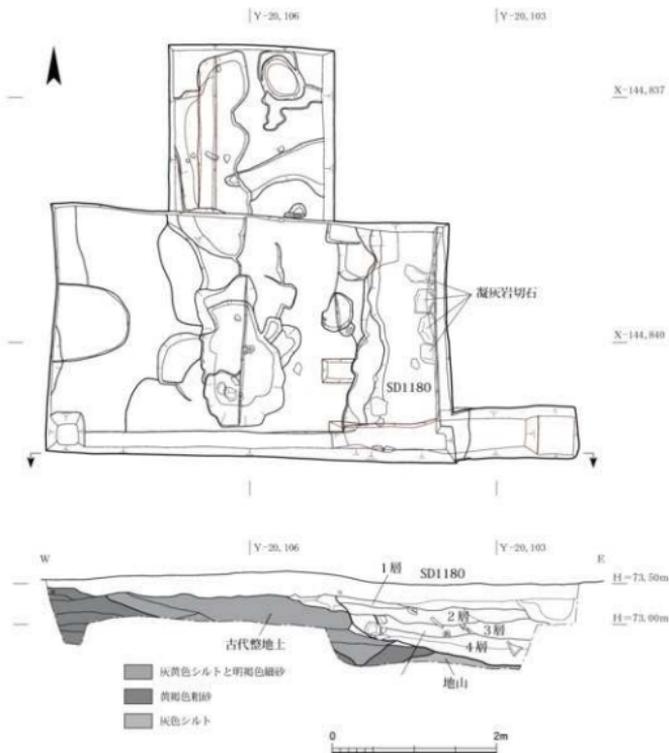


図 111 第 627 次調査区遺構図・南壁土層図 (東西反転) 1 : 60

塔院の東西中軸付近にあたり(図105)、遺構面および遺存状況の把握を目的として調査を実施した。

**作業の経過** 調査期間は2020年8月4日から8月11日までである。調査に先立ち、7月31日から8月3日にかけて基準点測量および調査区の設定、レベル移動をおこなった。8月4日に重機掘削を開始し、終了後、人力による遺構検出作業をおこなった。8月6日から遺構面の作成、8月7日には東拡張区の遺構検出・図面作成をおこない、東拡張区を含む調査区を埋め戻した。8月11日に北拡張区の遺構検出・図面作成ののち埋め戻しをおこなって、同日中に調査を終了した。調査終了後に洗浄・分類・註記作業を実施したのち、主要遺物について実測図化作業をおこなった。

## (2) 調査の方法と成果

**調査の方法** 当初、東西5m、南北3mの調査区を設定したが、検出遺構が調査区外に延びることが判明したことから北側と東側に拡張をおこなった。最終的な調査面積は約21㎡である。

X・Y座標はネットワーク型RTK-GPS測位(VRS方式)でおこない、標高は旧平城No.14(X=-145,126.190, Y=-19,244.829, H=69.071m)からオートレベルで直接水準測量をおこなった<sup>10)</sup>。表土および攪乱土については基本的に重機で掘削し、表土下部以下は人力により遺構検出および掘削作業をおこなった。写真記録はデジタル撮影でおこなった。

**基本層序** 表土(厚さ約30cm)の下に、調査区中央では灰黄色シルトと明褐色細砂が互層となる層が、調査区西半では黄褐色細砂の層が広がる(厚さ約80cm)(図111)。これらは古代にさかのぼる整地土とみられる。遺構検出はこれらの上面でおこなった。検出面の標高は73.2m前後である。これらの下層には遺物を含まない灰色シルト層が広がる。

**検出遺構** 調査区の東端、および東方拡張区で南北大溝SD1180を検出した(図111, PL.37-1・2)。幅2.8m以上、深さは約70cmで、南北約3m分を検出した。東側は検出できず、溝幅は不明である。埋土は上層(1～3層)と下層(4層)に分けられ、上層には炭粒が混じり、溝底付近から多量の瓦や凝灰岩4点が出土した。埋土には中世の瓦や中世の土器を含むが、上層から下層にかけて出土した土器に大きな時期差がないことから、江戸時代前期

まで存続し、一時に埋め立てられたとみられる。調査区南方の平城第174-25次ではこの溝に対応する遺構は検出していない。(山崎有生・田中)

## (3) 出土遺物

**瓦磚類** 第627次調査区から出土した瓦磚類の内訳を表19に示す。瓦磚類はSD1180を中心に出土しており、軒丸瓦は22点、軒平瓦は8点を数えるが、大半が中・近世に属する(図112, PL.37-3)。

**軒丸瓦** 1は6236Aで西大寺創建瓦。焼成は軟質で、全体的に摩耗が激しい。SD1180第4層出土。2は西大寺181A。小型の巴文軒丸瓦で、瓦当面の直径は9cm。SD1180第3層出土。3は巴文軒丸瓦。珠文はやや大振り。瓦当面の粘土は極めて薄く、丸瓦の先端は無加工である。SD1180出土。4・5は同範の巴文軒丸瓦。小ぶりの珠文を密に配置する。4は、瓦当表面はやや粗い指ナデで、凹凸が残る。SD1180第2層出土。5は巴文の中心に、径1mmほどの極めて小さな突起が認められる。異範だが、同様の突起をもつ事例が法隆寺出土瓦にある<sup>11)</sup>。コンパス針痕であると指摘されており、範作成時の痕跡であると考えられる。包含層出土。6は巴文軒丸瓦。珠文は大振りで、珠文帯の内側には圈線が巡る。内区は巴文の尾部がわずかに残るのみである。珠文帯は範傷が顕著で複数の珠文が繋がっている状況もみられる。外縁頂部を含む瓦当面には、離れ砂が付着する。SD1180第4層出土。7は巴文軒丸瓦。珠文は大振りで、珠文帯の内側には圈線が巡る。瓦当面には離れ砂が付着しており、文様の表出は浅い。鎌倉時代か。SD1180第3層出土。8は巴文軒丸瓦。珠文は大振り、外縁頂部を含む瓦当面には、離れ砂が大量に付着する。室町時代。SD1180第2層出土。

表19 第627次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦		軒平瓦		その他	
型式	種 点数	型式	種 点数	種類	点数
6236	A 1	西345B	1	平瓦	1
巴(鎌倉)	3	西348A	1	刷印(菊花)	1
(室町)	2	鎌倉	1	(タタキ)	1
(中世)	2	室町	2	磚(楕圓)	1
西181A	1	中世	1	凝灰岩	3
鎌倉	1	時代不明	2	花崗岩	1
中世	1			安山岩	1
時代不明	11				
軒丸瓦計		軒平瓦計		その他計	
22		8		9	
丸瓦		平瓦		凝灰岩	
重量	58.675kg	130.238kg	1.569kg	43.157kg	0
点数	301	958	3	23	0

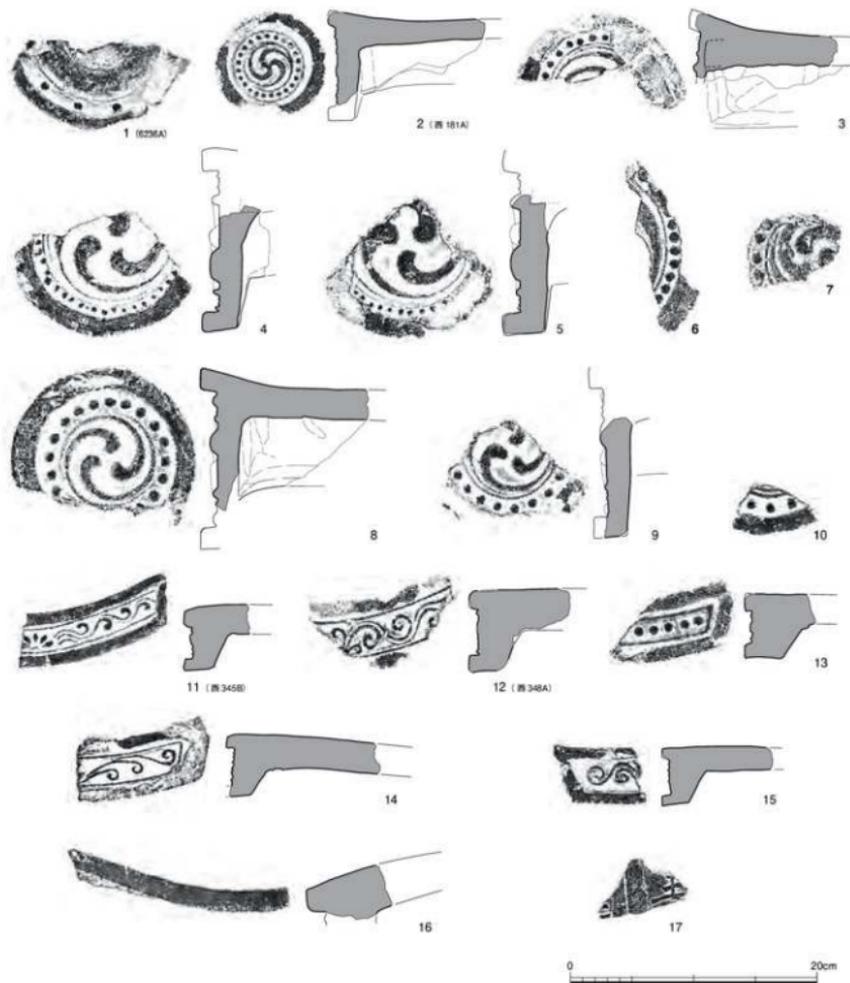


図112 第627次調査出土瓦 1 : 4

9は巴文軒丸瓦。珠文はやや大振りで、珠文帯の内側には太い圏線が巡る。瓦当面には離れ砂が付着し、全体にはいぶしがかかる。室町時代。SD1180第2層以下出土。

10は巴文軒丸瓦か。珠文はやや大振りで、外縁を含む瓦当面には離れ砂が付着。室町時代か。SD1180第3層出土。

**軒平瓦** 11は西大寺345B。半載菊花文を中心に置く均整唐草文。顎面・顎部瓦当裏面は横ナデで、顎部に凹型台圧痕が残る。室町時代。SD1180第3層出土。12は西

大寺348A。半載菊花文を中心に置く均整唐草文で、唐草は大きく巻き込む。顎面・顎部瓦当裏面は横ナデで、顎部に凹型台圧痕が残る。室町時代。13は圏線をもつ連珠文軒平瓦。顎部瓦当裏面は縦ナデの痕跡と凹型台圧痕が残る。鎌倉時代。14は、緩やかに巻き込む均整唐草文。顎面・顎部瓦当裏面は横ナデで、顎部に凹型台圧痕が残る、凸面は縦ナデを施す。断面観察から瓦当貼り付け技法と考えられる。室町時代。SD1180第2層出土。15は均整

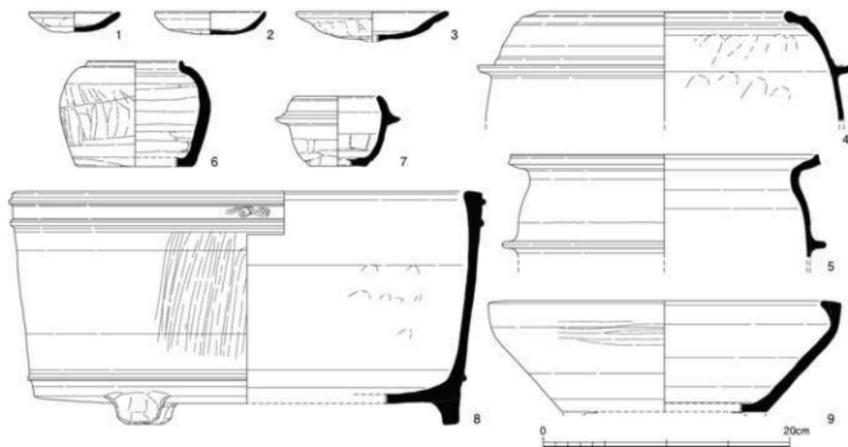


図 113 第 627 次調査出土土器 1 : 4

唐草文か。凹面に細かに布目痕を残す。頸面・頸部瓦当表面は横ナデ、凸面は縦ナデを施す。室町時代。16 は型式不明の軒平瓦。瓦当表面は上外縁が残るのみである。外縁には縦方向の 2 本の刻線がある。頸部には凹型台圧痕が残る。17 は平瓦。文字を刻んだ叩き具で凸面を叩き締める。一文字のみわずかに残り、「寺」と考えられる。鎌倉時代。

このほか、緑釉磚 1 点、凝灰岩切石等が出土した。(田中) **土器・土製品** 第 627 次調査区から整理用コンテナ 5 箱分の土器・土製品が出土した。このうち 3 箱は SD1180 から出土した。SD1180 出土土器は室町時代から江戸時代前半の土師器羽釜・瓦質土器の火鉢・すり鉢が中心で、近世土師器皿・陶磁器を少量含む。4 層に分けて取り上げたが、相互に接合関係を確認した。以下、図示し得る破片が多く出土した第 4 層出土土器について記述する(図 113)。

1～3 は土師器皿。復元口径は順に 7.4・9.0・12.4cm である。4・5 は土師器羽釜。4 は大和 H 型で口縁部が内傾し、端部を丸くおさめる。復元口径 20.4cm。5 は大和 I 型で口縁部が外反し、端部を横ナデし肥厚する。体部の突帯上位に突帯状の段を有する。復元口径 25.2cm。6～9 は瓦質土器。6 は火消し壺。口径 7.6cm、器高 8.6cm。7 はミニチュア羽釜。復元口径 6.2cm、器高 5.7cm である。8・9 は火鉢。8 は方形を呈し、低い脚部を有する。口縁部外面に二条の突帯を貼り付け、突帯間に唐草を施文する。9 は円形を呈し、体部から内湾気味に丸みを帯びて口縁部が立ち上がり、口縁端部上面に平坦面を有する。底部に斜離痕跡があり、脚部を貼り付けていたものとみられる。第 2 層出土破片と接合した。(小田)

## 5 第 654 次調査

### (1) 調査の経過

**調査に至る経緯** 本調査は、共同住宅建設にともなう発掘調査である。奈良県文化財保存課および奈良市教育委員会と協議の上、事業者からの受託事業実施申し込みを受けて奈良研が受託事業として調査を実施した。

**作業の経過** 調査期間は 2023 年 1 月 11 日から 2 月 3 日までである。発掘作業に先立って、1 月 6 日に基準点測量および調査区の設定、レベル移動を実施した。1 月 11 日から重機による掘削を開始し、順次人力掘削に切り替えて遺構検出をおこなった。1 月 16 日に Y=-20.089 以西の全景写真の撮影を実施したのち、Y=-20.089 以東の掘削と遺構検出を進めた。1 月 18 日に調査区東部・西部全景写真の撮影をおこなったのち、断削調査、図面作成、完掘を進めた。調査終了部分に対する遺構保護のための砂撒きをおこなったのち、1 月 24 日に調査区東部・西部の埋め戻しを完了した。同日以降、調査区中央部の掘削・遺構検出をおこない、1 月 30 日に全景写真の撮影をおこなった。同日以降、下層調査や断削調査、図面作成、完掘を進めた。2 月 3 日に遺構保護のための砂撒きと埋め戻し、撤収を完了し、調査を終了した。

本調査では、発掘調査と並行して出土遺物の洗浄・分類・註記作業を実施し、主要な遺物の実測をおこなった。

### (2) 調査の方法

調査区は、東西最大 22 m、南北最大 8 m で設定したが、Y=-20.081 以東は後世の削平が著しく部分的な調査に留めたため、最終的な調査面積は 146 m<sup>2</sup> である。X・

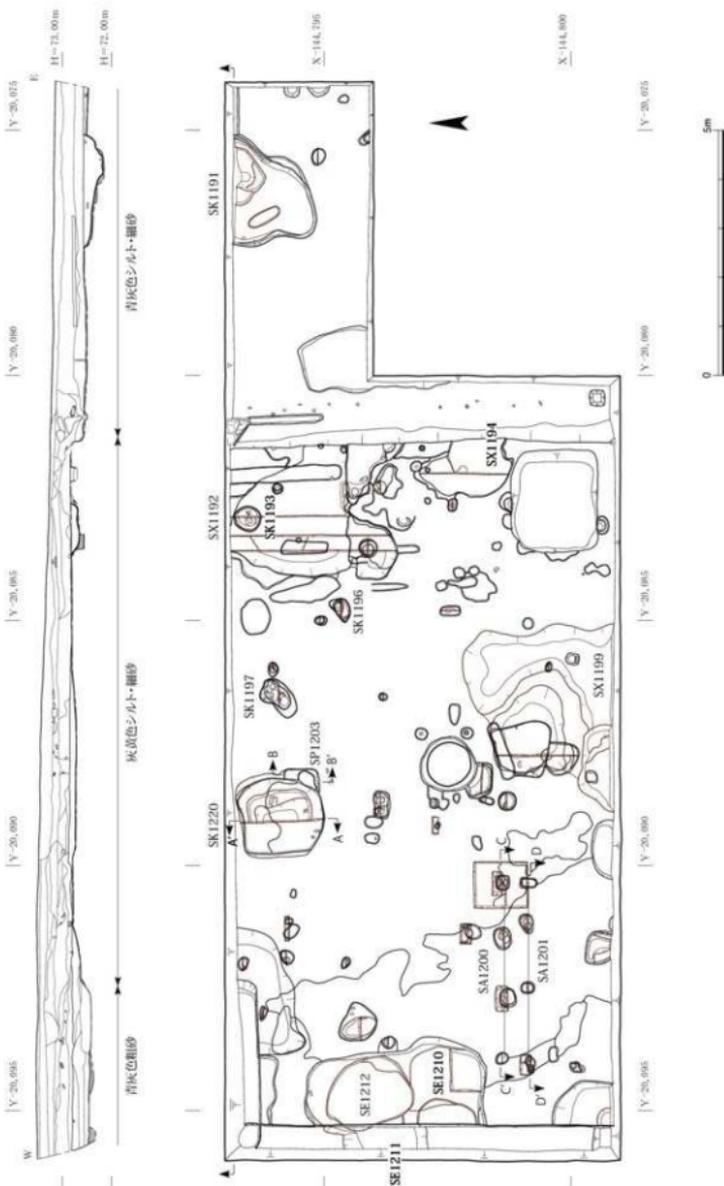


図 114 第 654 次調査区遺構図・北壁土層図 1 : 100

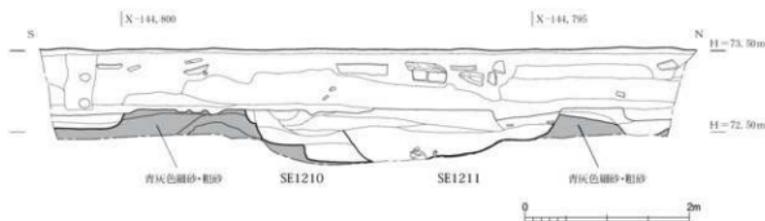


図 115 第 654 次調査区西壁土層図 1 : 60

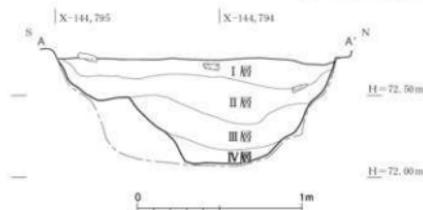


図 116 土坑 SK1220 断面図 1 : 30

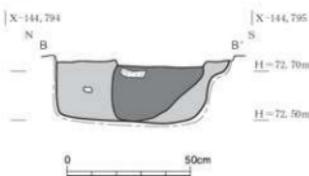


図 117 柱穴 SP1203 断面図 1 : 20

Y座標はネットワーク型 RTK-GPS 測位 (VRS 方式) でおこない、標高は、旧平城 No.14 (X=-145.126.190、Y=-19.244.829、H=69.071 m) を基準として平成第 627 次調査 (2020 年度) で設置した基準点からオートレベルで直接水準測量をおこなった<sup>12)</sup>。

発掘作業は重機掘削により表土・造成土および遺物包含層の上部を除去した後、人力により掘削および遺構検出をおこなった。写真記録はデジタル撮影をおこなった。

### (3) 基本順序

現地表から順に表土・造成土 (厚さ 40 ~ 70cm)、暗灰色砂質土 (遺物包含層、5 ~ 10cm) が堆積し、調査区東部では青灰色シルト・細砂層 (地山) に達する (図 114)。調査区中央部では暗灰色砂質土の下に明褐色粗砂 (厚さ約 5cm) が部分的に堆積し、灰黄色シルト・細砂層 (地山、厚さ 10 ~ 70cm) に達する。さらに下層では有機質を含む灰色砂を確認した (厚さ 20cm 以上)。調査区西部では暗灰色砂質土の下に青灰色細砂・粗砂や有機質を含む灰色砂を確認した (厚さ 70cm 以上)。これは洪水堆積にともなうものと考えられる。

遺構検出は、調査区東部では青灰色シルト・細砂層の上面、調査区中央部では灰黄色シルト・細砂層の上面、調査区西部では青灰色細砂・粗砂の上面でおこなった。検出面の標高は 72.8m 前後である。なお、調査区東部では南北に延びる近現代の石組を検出した。石組以東の遺

構面はさらに 30cm ほど削平されており、標高 72.5m 前後の青灰色シルト・細砂層の上面で遺構検出をおこなった。

### (4) 検出遺構 (図 114、PL.38、PL.39-1・2)

**井戸 SE1210** 調査区西端で検出した井戸。規模は東西 2m 以上、南北約 1.5m で、深さは 0.5 ~ 0.6m。底面は、湧水が顕著な青灰色粗砂層まで到達している。後述の SE1211・1212 と重複しており、その中で最も古い (図 115、PL.39-3)。掘方と抜取穴を確認したが、井戸枠は遺存していなかった。掘方・抜取穴から室町時代までの土器や瓦が出土した。抜取穴の埋土からは、桶側板の破片に加え、ハエの蛹を 62 個採取した。

**井戸 SE1211** 調査区西端で検出した井戸。深さは約 0.4m。調査区西壁にかかるため、東半部を検出したにとどまる。SE1210・1212 と重複しており、埋土が類似することから、井戸の可能性が高い。室町時代の SE1210 より新しく、SE1212 よりも古いことから、SE1211 も室町時代に属すると思われる。

**井戸 SE1212** 調査区西端で検出した井戸。東西 1.6m、南北 2.2m で、深さは 0.5 ~ 0.6m。先述の SE1210・1211 と重複しており、最も新しい。掘方と抜取穴を確認したが、井戸枠は遺存していなかった。掘方・抜取穴から室町時代までの土器や瓦が出土した。

**土坑 SK1220** 調査区北辺中央部で検出した東西約 1.7m、南北約 1.7m、深さ約 0.7m の土坑。隅丸方形に近い

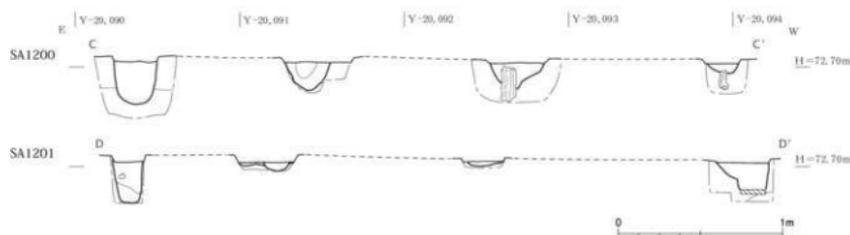


図 118 東西柱穴列 SA1200・1201 断面図 1:30

平面形を呈するが、底面付近は不整形である。埋土は上層からⅠ～Ⅳ層に分かれ、おおよそ水平に堆積している(図116, PL.39-4)。柱痕跡や採取穴は確認できない。最上層のⅠ層は、鎌倉～室町時代の土器・瓦を含む。Ⅱ～Ⅳ層は、古代の遺物を含むものの、小片がほとんどである。

**柱穴 SP1203** 調査区西北部で検出した南北約0.7m、深さ約0.25mの柱穴(図117)。西半がSK1220と重複し、SK1220よりも古い。掘方と採取穴を確認した。掘方・採取穴からは古代の土器類が出土したほか、採取穴から奈良時代後半、西大寺造営前の軒丸瓦が1点出土した。

**東西柱穴列 SA1200** 調査区西南部で検出した東西方向に伸びる柱穴列。小柱穴を4基、東西3.6m分を確認した。柱間は1.1m～1.3mと不揃いである。柱穴の直径0.2～0.4m、深さ0.2～0.3mであり、一部で柱根を確認した(図118上)。土器や瓦の出土はなく、時期不明。

**東西柱穴列 SA1201** 調査区西南部、SA1200の南で検出した東西方向に伸びる柱穴列。小柱穴を4基、東西3.8m分を確認した。柱間は0.9m～1.6mと不揃いである。柱穴の直径0.2～0.4m、深さ0.2～0.3mであり、一部では柱根や礎板を確認した(図118下)。土器や瓦の出土はなく、時期不明。

**土坑 SK1191** 調査区東北部で検出した東西約2.2m、南北1.7m以上の不整形土坑。深さ約0.4m。出土遺物から中世に属する。

**落込 SX1192** 調査区北辺中央部で検出した不整形な落ち込み。東西3m以上、南北3.5m以上。深さ0.1～0.5m。近世の遺物が出土した。

**土坑 SK1193** 調査区北辺中央部の落込 SX1192 上面で検出した円形の土坑。直径約0.5m、深さ約0.2m。中世の土器類が出土した。

**土坑 SK1196** 調査区中央部で検出した不整形の土坑。東西約0.4m、南北約0.5m、深さ約5cm。古代の土器類が完形で出土した。

**落込 SX1194** 調査区中央や東寄りで検出した不整形な落ち込み。東西2m以上、南北約3m。深さ約0.1m。埋土に炭を含む。中世の遺物が出土した。

**落込 SX1199** 調査区南部で検出した不整形な落ち込み。東西約4m、南北3m以上。深さ0.2～0.3m。近世の遺物が出土した。

**その他の遺構** 調査区各所で、不整形の土坑や小柱穴を検出した。多くは中世もしくは近世までの遺物を含む。

## (5) 出土遺物

### 瓦磚類

第654次調査区で出土した瓦磚類の内訳を表20に示す。中世の瓦磚類が中心で、軒丸瓦は9点、軒平瓦は5点出土した(図119, PL.40-1)。

**軒丸瓦** 1は6134Ab。西大寺では、食堂院での出土例がある<sup>14)</sup>。Ⅳ-1期(757～767)で西大寺造営前に位置づけられる。SP1203採取穴出土。2は西大寺84A。丸瓦は剥離しており、その接合痕跡が残る。同范例は、瓦当厚が約4cmと厚手である。鎌倉時代。SK1197出土。3は西大寺62A。外区圍線と外縁の間に大きな亀傷がある。平安時代後期。SE1212採取穴出土。4は西大寺164C。左巻きの三巴文。丸瓦は剥離し、その接合痕跡が残る。鎌倉～室町時代。SE1212掘方出土。5・6は、型式不明とともに造成土出土。5は外区珠文帯のみ残る。胎土・焼成や外縁のつくりから中世のものと考えられる。6は近代の巴文軒丸瓦。

**軒平瓦** 7は西大寺268A。外区をもたない偏行唐草文。瓦当部は、糸切粘土板の凸面に頸部粘土を接合する。8は、西大寺392E。包含層出土。連珠文軒平瓦。頸部瓦当表面から凸面にかけてタテナデで仕上げる。頸部に凹型台圧痕が残る。9は、唐草文軒平瓦。包含層出土。頸部瓦当表面はヨコナデ、凸面はタテナデで仕上げる。頸部に凹型台圧痕が残る。

**平瓦** 10・11は鎌倉時代。ともに文様を刻んだ縦長

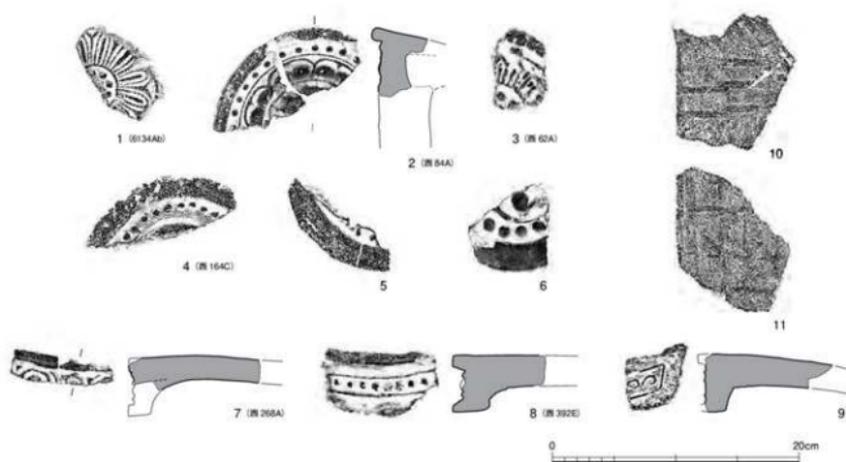


図119 第654次調査出土瓦 1:4

の叩き板で凸面を叩く。10は、凹面に布目痕はなく、離れ砂が残る。SX1199出土。11は凹面に細かい布目痕を残す。SE1212掘方出土。(田中)

#### 土器・土製品

第654次調査区からは整理用コンテナ5箱分の土器・土製品が出土した。中・近世の土師器・瓦器・瓦質土器・陶磁器が中心で、奈良時代の須恵器・土師器などを一部含む。以下、各遺構出土土器について記述する(図120)。  
**SK1196 出土土器** 1は完形の土師器杯A。外面調整はc手法である。内面の暗文や外面のヘラミガキは確認できない。平城宮土器Ⅲ新～Ⅴに位置づけられる。このほか土師器ⅢBの脚部のみが出土した。

**SK1191 出土土器** 2は土師器Ⅲ。灰白色の色調を呈し、口縁部に一段ナデを施す。復元口径10.4cm。

**SK1193 出土土器** 3・4は土師器Ⅲ(PL.39-5)。3は灰白色の色調を呈し、口縁部に一段ナデを施す。復元口径7.0cm。4は赤褐色の色調を呈し口縁部に二段ナデを施す。口径10.8cm。これらの土器は大乗院編年Ⅲ-A期<sup>10)</sup>に属する。

**SK1220 出土土器・土製品** 5は宝珠硯の可能性が高い(PL.39-6)。先端の堤部から海部にかけて剝離痕跡があり、筆立てなどが貼り付けられていたとみられる。6は須恵器杯B蓋。低平な宝珠つまみを貼り付ける。7は緑釉陶器碗の底部片。内外面に緑釉を施しており、底部外面まで施釉する。内面に目跡が残る。8・9は瓦器碗。8は

表20 第654次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦		軒平瓦		その他	
型式	種点数	型式	種点数	種類	点数
6134	Ab 1	西268A	1	軒板瓦	1
巴(近代)	1	西292E	1	磚	1
西62A	1	室町	1		
西84A	1	時代不明	2		
西164C	1				
中世	1				
時代不明	3				
軒丸瓦計 9		軒平瓦計 5		その他計 2	
	丸瓦	平瓦	磚	凝灰岩	レンガ
重量	42.885kg	120.143kg	10.25kg	0	0
点数	444	1,565	6	0	0

口縁部内外面にやや粗いヘラミガキを施す。9は高台の断面形が三角形を呈し、退化傾向にある。川越編年Ⅲ段階に属する<sup>15)</sup>。SK1220出土土器は奈良時代の重物を含むが、廃棄時期は室町時代とみられる。

**SE1210 出土土器** 11は掘方、12は採取穴出土。11は瓦質土器の方形火鉢。外面に装飾はなく、頂部に平坦面を有する。12は瓦器碗。器壁が厚く、ヘラミガキを密に施す。川越編年Ⅲ段階であり、鎌倉時代末～室町時代前期の特徴を有する。

**SE1211 出土土器・土製品** 13は須恵質不明土製品(PL.39-7)。直径5.5cmの円形の平面形態を呈し、内面はロクロナデ調整を施す。頂部に吊り手状の凸部を有し、直径1.1cmの棒状工具による穿孔がある。このほか、土師器小皿・瓦器碗片が出土した。

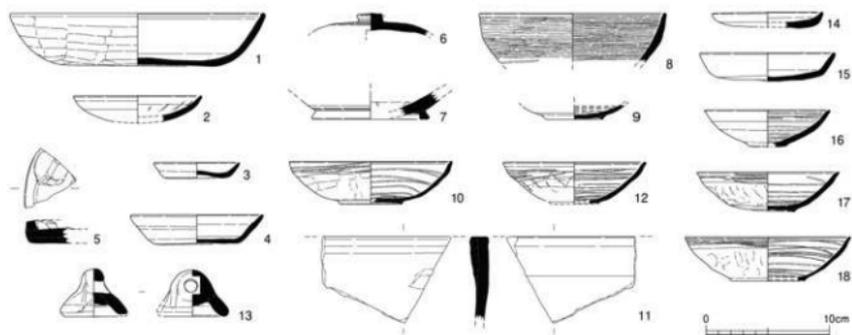


図120 第654次調査出土土器 1 : 4

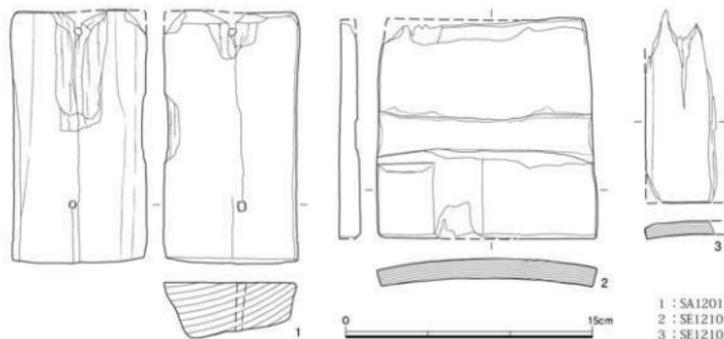


図121 第654次調査出土木器 1 : 3

**SE1212 出土土器** 10は掘方出土の瓦器椀。器高が低い形態で、器壁が薄く外面のヘラミガキの間隔は粗い。このほか、室町時代の土師器小皿・土釜片が出土している。なお印判染付椀が1点出土しているが、これは重複する近代擾乱遺構からの混入と考えられる。

**SX1194 出土土器** 14・15は土師器皿。14は底部から緩やかに口縁部が立ち上がる。復元口径9.0cm。15は平底気味の底部から口縁部が立ち上がり口縁部に一段ナデ調整を施す。口径11.0cm。16～18は瓦器椀。いずれも口縁端部に強いヨコナデを施す。内外面にヘラミガキを施す。低平な高台を貼り付けるが痕跡的である。これらはSE1210・SE1212と同様、室町時代の特徴を有する。

このほか、特殊遺物として製塩土器・灰釉陶器・緑釉陶器・灯明皿に転用した土師器が出土した。(小田)



図122 第654次調査落込 SX1199出土角棒 1 : 3

## 木器・石器

小コンテナ 5箱分の木器が出土しているが、大半は加工痕をとめない雑木や自然木である。PL18-2はSAI200・1201等から出土した柱根と礎板。礎板は釘穴があり転用品(図121-1)。SAI201出土。SE1210からは桶の側板(図121-2・3)と自然木(PL40-3)が出土。図122は角棒で、両端付近にそれぞれ未貫通の方孔をもつ。長さ17.3cm、厚さ2.0cm。糸巻の枠木に似る。SX1199出土。このほか、SK1220とSX1192からサヌカイト割片が各1点出土している。(和田)

## 6 まとめ

**第624次調査** 西大寺小塔院の東辺区画施設の西南落溝を踏襲したとみられる南北溝SD1160を検出した。当調査区の現地表面の標高は、周辺の既調査(平城第174-25・404・415・597次)の遺構面よりさらに20cm以上低い。そのため、小塔院の東辺に想定される区画施設自体を検出することはできなかったが、これまで調査が進んでいなかった西大寺小塔院についての知見を加えることができた。(浦)

**第627次調査** 中近世の南北大溝SD1180を検出した。江戸時代前期まで機能し、短期間で埋め立てられた様子がうかがえる。性格は不明だが、出土した瓦および凝灰岩切石の存在からは、近傍に古代・中世の西大寺に関わる遺構が存在した可能性も想定できる。(山崎)

**第654次調査** 調査区西端で室町時代の井戸3基を検出したほか、調査区各所で中世から近世にかけての土坑や落ち込みを確認した。一方で、明確な古代の遺構はほとんど確認できなかった。遺物も中世の土器・瓦類が多く出土しており、調査地周辺では、中世を中心とした活発な土地利用がおこなわれたと考えられる。

**発掘調査成果からみた小塔院推定地** 今回報告した第624・627・654次調査により、これまでほとんど調査がおこなわれていなかった小塔院推定地の様相を考えると重要な知見を得た。

第624次調査では東辺区画施設の西南落溝を踏襲したとみられる中世の南北溝を、第627・654次調査では小塔院の中軸付近を調査し、中世～近世の南北溝や井戸などの遺構を確認した。いずれの調査区でも遺構・遺物とも中世以降のものが多く共通する。

中世の小塔院推定地を考えるうえで参考になるのが、室町時代に描かれたとされる「西大寺寺中曼荼羅圖」(西大寺蔵)である。「西大寺寺中曼荼羅圖」は、築地で囲まれた当時の境内を、約130分の1の縮尺でかなり正確な位置関係で描いていると指摘される<sup>16)</sup>。この絵図と伽藍復元図、今回の調査区の位置を重ね合わせたものが図123である。小塔院推定地周辺をみると、西王堂の北側の東西道路<sup>17)</sup>よりも北側には、築地で囲われた区画がある。一帯は「寺内」と記され小規模な草葺きの建物が5棟描かれている。第627次調査区は、「寺内」もしくは東西築地の周辺にあたり、第624次調査区及び第654次調査区は築地の外側にあたる可能性が高い。なお、この絵図は食堂が描かれていないことから、徳治2年(1307)以降のものと考えられる<sup>18)</sup>。

一方で、これまでの調査では、西大寺創建期の小塔院に関する明確な遺構は確認されていない。古代のものとみられる整地土を検出した第627次の遺構検出面の標高は73.2m前後で、整地土の下層にある地山は、72.7m前後で確認されている。対して、整地土が確認できなかった第624次調査区の遺構検出面(地山上面)の標高は72.4～72.5m、同じく明確な整地土が確認できなかった第654次の検出面の標高は72.5～72.8mとなっており、一定程度の削平を擧げている可能性が考えられる。しかしながら、小塔院における建物配置は不明なうえ、小塔院推定地のほとんどは未調査であり、解明すべき課題は多く残る。今後の調査の進展に期待したい。(田中)

## 註

- 1) 第624・627次の報告は、基本的に「記要2021」を再録したものであるが、一部書き改めた部分がある。
- 2) 「西大寺食堂院・右京北辺発掘調査報告書」2007。
- 3) 奈良市教育委員会「平城京跡(右京一条三坊八坪)・西大寺田境内(食堂院跡推定地)の調査 第15次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成15年度』2006。
- 4) 「西大寺防犯施設工事・発掘調査報告書」1990。
- 5) 前掲註2。
- 6) 宮本長二郎「奈良時代における大安寺・西大寺の造営」『西大寺と奈良時代の古寺』日本古美術全集第6巻、1983。
- 7) 田平誠、N14は2019年度に消失。
- 8) 神野恵・尾野善裕「興福寺系土師器製の福年」『名勝田大乗院庭園発掘調査報告』学報第97番、2018。菅原正明「畿内における土室の製作と流通」『文化財論』1983。
- 9) 前掲註4、「記要2014」。
- 10) 前掲註7。



# 西大寺弥勒金堂の調査

## 一第 655 次

### 1 調査の経過

**調査に至る経緯** 本調査は、個人住宅の建て替えにともなう事前調査として実施した。調査地は、奈良市西大寺小坊町に所在し、平城京京京一条三坊九坪、そして奈良時代後半に創建された西大寺の弥勒金堂推定地にあたる。調査地周辺の調査では西大寺金堂院の遺構を確認しており、本調査では弥勒金堂に関連する遺構の検出が予想された。

**作業の経過** 調査期間は2023年3月1日から4月4日までである。発掘作業に先立って、2月24日に、奈良県文化財保存課および奈良市教育委員会を交えて現地協議をおこなった。2月27・28日には、基準点測量および調査区の設定、レベル移動を実施した。3月1日から重機による掘削を開始し、順次人力掘削に切り替えて遺構検出を進めた。3月6・10日に調査区全景写真の撮影をおこなった。3月7日には、再度県、市と現地協議をおこない、同日以降に遺構実測と各遺構の断面調査を進めた。3月28日より遺構保護のための砂撒きと重機による埋め戻しを開始し、3月30・31日に拡張区の調査を実施した。4月4日に埋め戻しを完了し、現場を撤収して発掘作業を終了した。

本調査では発掘作業と並行して、出土遺物の洗浄・整理作業をおこない、調査終了後も継続している。また、木質遺物等が良好に含まれる暗褐色粘質土や壺地業などの埋土については、一部をブロックで持ち帰り、整理室にて洗浄作業をおこなった。

### 2 遺跡の位置と環境

西大寺は、天平宝字8年(764)、孝謙太上天皇(のちの称徳天皇)が、藤原仲麻呂の乱に際して四天王像の造立を発願したことにはじまる(『西大寺寶財流記帳』以下、寶財帳)。天平神護元年(765)に伽藍の造営が開始されるが、神護景雲3年(769)に称徳天皇が西大寺へ行幸しており(『続日本紀』)、薬師金堂が先んじて完成していたと考えられる。同年6月に弥勒浄土を造るとあり(『扶桑略記』)、宝亀2年(771)には兜率天堂(弥勒金堂)の造営を以って正

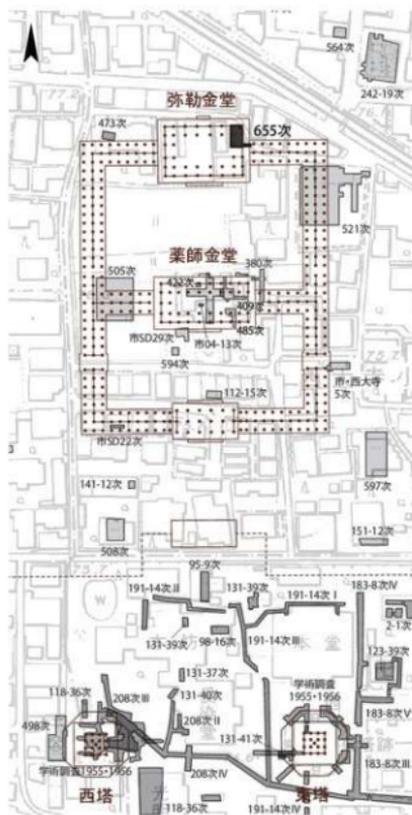


図124 第655次調査区位置図 1:2000

六位上美保首代作に外従五位下が与えられていることから(『続日本紀』)、770年前後には弥勒金堂が完成していたと考えられる。それから300年余りを経た嘉承元年(1106)の時点では、弥勒金堂が大破しており、仏像は食堂に安置されていたようである(『七大大寺日記』)。これ以降、食堂が弥勒金堂としての役割を果たすようになり、創建当初の場所にも弥勒金堂が再建されることはなかった。

弥勒金堂は、薬師金堂とともに金堂院を形成していた。金堂院の伽藍配置や両金堂の所在地については長い間諸

説あったが、発掘調査の蓄積とともに研究が大きく進展しつつある。金堂院周辺では、薬師金堂（奈良市04-13次<sup>1)</sup>、平成第409次（『紀要2007』）、第422次（『紀要2008』）、第485次（『紀要2012』）や西面回廊・薬師金堂軒廊（第505次（『紀要2014』）および東面回廊（奈良市西大寺5次<sup>2)</sup>、第521次（『紀要2014』）の調査が実施されており、遺構が良好な状態で遺存することがあきらかになっている。

これらの調査成果をもとに金堂院の伽藍復元案が作成されており（『紀要2014』）、弥勒金堂は、薬師金堂の北に配置され、北面回廊が接続していたと想定されている。しかし、弥勒金堂に対する調査は今までおこなわれておらず、堂宇の正確な位置は不明であった。

調査地は、弥勒金堂の東北隅部分に想定され、遺構の有無の確認と既往の復元案の検証が求められた。

### 3 調査の方法と成果

#### (1) 調査の方法

調査区は、東西最大5m、南北最大9m、調査面積43.8㎡の範囲で設定した。その後、調査地に隣接する電柱の本柱・支線の移設工事の届出があり、支線移設箇所における遺構遺存状況の確認のため、調査区東南隅から延びる東西3.3m、南北1mの拡張区を設定した。最終的な調査面積は、47.1㎡である。

発掘調査では、GNSS測量機を用いたネットワーク型RTK法で調査区近傍に2つの基準点（ $X=-144.687.800$ 、 $Y=-20.235.395$  および  $X=-144.698.042$ 、 $Y=-20.228.938$ ）を設定した。これらの基準点からトータルステーションで調査区内に基準線を設定し、縮尺1/20を基本に平面図を作成した。標高は、旧平城No.14（ $X=-145.126.190$ 、 $Y=-19.244.829$ 、 $H=69.071$ m）を基準として第627次調査（2020年度）で設置した基準点からオートレベルで直接水準測量をおこなった<sup>3)</sup>。

発掘作業は重機掘削により表土、床土、遺物包含層を除去した後、人力により掘削および遺構検出をおこなった。また、住宅建設時にフォースパイルが施工される箇所については、幅80cmのトレンチを設定し、断削調査を実施した。また、調査区内で土壌サンプルの採取をおこなった<sup>4)</sup>。写真記録はデジタル撮影をおこなった。

なお、断削調査で検出した密地業については、土層断面の観察と記録をおこなったが、安全確保のため、地業

底面を確認する前に掘削を取りやめた。断削調査中に出土した木質遺物については可能な限り取り上げた。

#### (2) 基本層序

現地表面から表土（厚さ10～20cm）、床土（5～20cm）、近世～近代遺物包含層（5～10cm）、弥勒金堂の基壇土である青灰色粘質土層（20～60cm）、奈良時代中頃の整地土である暗褐色粘質土層（1.6m以上）を確認した（図126～131）。この暗褐色粘質土層は、第521次調査において、金堂院東面回廊SC1120基壇土の下層で検出した「西大寺以前の整地土」と一連の可能性ある（『紀要2014』）。

遺構検出は青灰色粘質土層上面でおこなった。検出面の標高は75.3m前後である。

なお、地山については標高73.4m（現地表下約2.2m）まで掘り下げたが確認できなかった。ただし、本調査の後に実施した、調査地の東南隅における電柱新設にともなう立会調査（第2023-1次調査）では、地表面から約2.6mの深さまで掘削した結果、暗褐色粘質土層の灰色砂を確認した。この灰色砂が地山と考えられる。

#### (3) 検出遺構

弥勒金堂SB1230（図125～131、PL.41-42）本調査では、調査区全面で基壇土を検出した。基壇土上面では礎石採取穴を6基検出し、基壇土の下層で密地業を確認した。

基壇土は、明確な取築は確認できないものの、10～20cmの単位で青灰色粘質土を積み重ねている。残存する基壇土の厚みは、調査区北端では20～30cm程度、調査区南端では約40cmで、北から南にむけて厚さを増す。基壇構築前の整地面は平坦ではなく、基壇土下面の標高が南へ向かって低くなっていてみられる。

基壇縁は北辺、東辺ともに確認できなかった。調査区南東に設定した拡張区では、基壇土が連続する状況を確認した。ここは弥勒金堂と北面回廊の接続部分にあたると考えられるが、回廊基壇よりも高い部分の弥勒金堂基壇土は完全に削平を受けており、弥勒金堂と北面回廊の基壇土が一連で構築されていた可能性がある。

なお、密地業の有無は、本調査区の見聞だけでは判断できない。本調査区に近い第521次調査の状況を見ると、金堂院東面回廊SC1120基壇下層における整地土上面の標高は74.7mである（『紀要2014』）。本調査区の整地土上面の標高は、調査区南で74.8～74.9mと、回廊基壇下層の整地土上面とほぼ同じ高さである。弥勒金堂基壇の範

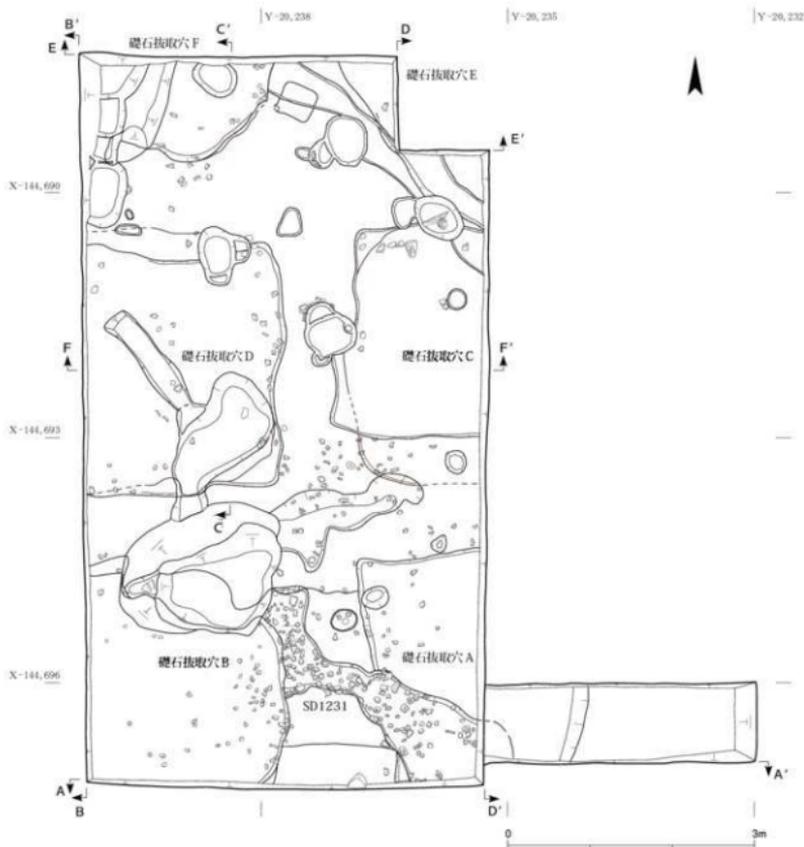


図125 第655次調査区遺構図(基壇土上面検出遺構) 1:60 (赤ラインは断面調査により確認した採取穴の輪郭を示す)

圓全城が、周辺よりも低く掘り込まれていないことから、総地業はおこなわれなかったと推定できる。

**礎石採取穴A～F** 基壇土上面から掘り込まれた大型の土坑を計6基検出した(図125)。規模がわかるものは直径3m前後で、平面形状は円形に近いものや歪な隅丸方形を呈するものがある。深さはいずれも60cm前後だが、礎石採取穴Bのみ1.2mと深い。

埋土は基壇土と極めて良く似るが、礫や瓦、土器を多

く含む。また、中世の瓦や近世の土器・陶磁器が出土しており、弥勒金堂廃絶後の遺構である。弥勒金堂の推定柱位置とはほぼ一致しており、礎石採取穴と考える。

**豊地業A～F** 基壇土の下層で、暗褐色粘質土層上面から掘り込まれた大型の土坑を6基検出した(図126)。これらの土坑は、基壇土下層にある奈良時代中頃の整地土上面から掘り込まれており、基壇造成の前段階のものである。礎石採取穴と重複する位置にあたり、石や瓦を



图 126 第 655 次调查区遗構图 (新制調査棟出遺構)・南壁土層图 (東西反転) 1 : 60

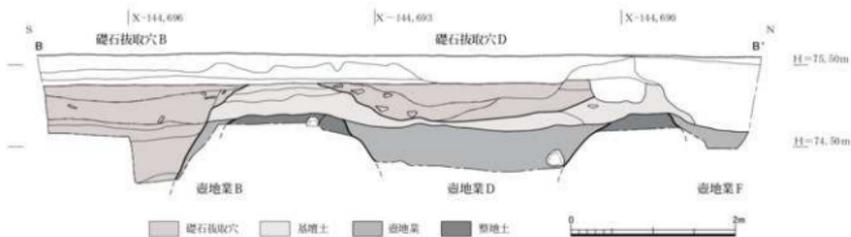


図127 調査区西壁土層図 1:60

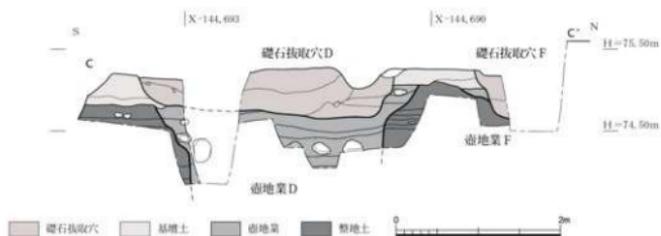


図128 調査区中央南北新西壁土層図 1:60

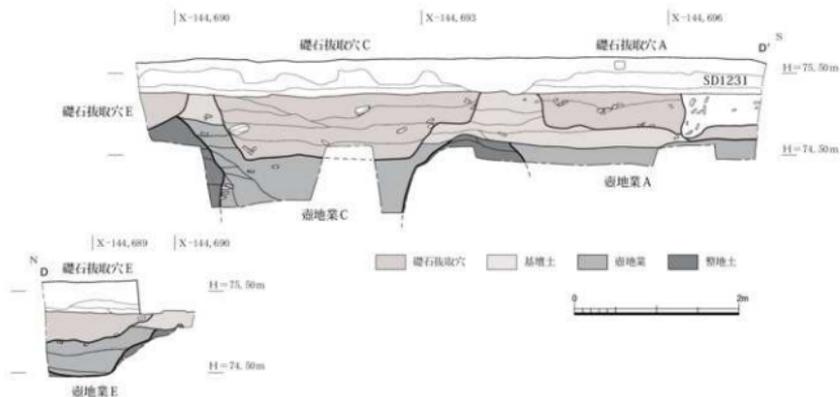


図129 調査区東壁土層図 1:60

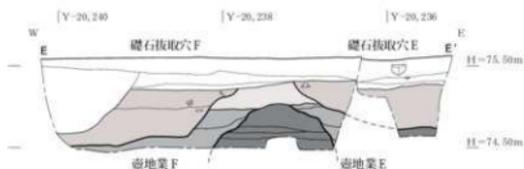


図 130 調査区北壁土層図 1 : 60

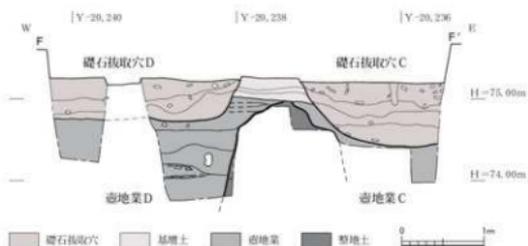
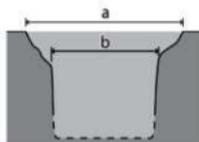


図 131 調査区中央東西断削北壁土層図 1 : 60

表 21 弥勒金堂 SB1230 竈地業一覧表

遺構	東西規模 (cm)		南北規模 (cm)		深さ (cm)	石	瓦	特徴
	a	b	a	b				
竈地業A	360	240?	(300)	—	(50)	○	○	西肩に30cm前後の石を2つ入れる。
竈地業B	(260)	—	(250)	—	(140)	○	○	20cm前後の石を比較的密に入れる。その下層でも瓦を面的に敷き込む。西大寺創建期軒瓦出土。
竈地業C	(180)	(130)	330	240	(110)	○	○	西肩に約20cmの石を入れる。
竈地業D	(280)	(220)	310	240	(120)	○	○	30~40cmの石を疎らに入れる。その下層でも瓦を面的に敷き込む。西大寺創建期軒瓦出土。
竈地業E	(190)	—	(130)	—	(60)	—	○	石や瓦数は未確認。
竈地業F	(260)	—	(150)	—	(60)	—	○	石や瓦数は未確認。



- a : 検出面の寸法  
 b : 断面に近い角度で掘り込まれる部分の上面の寸法  
 ○ : 石/瓦を面的に敷き込む  
 ○ : 石/瓦を疎らに入れる  
 — : 石/瓦を確認できず  
 ※括弧は確認できた範囲の寸法・深さ



図132 壺地業B石敷検出状況(北から)

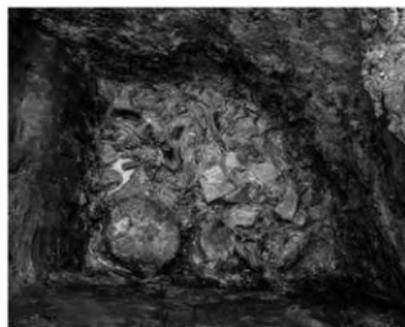


図133 壺地業B瓦敷検出状況(北から)



図134 壺地業B軒丸瓦出土状況(東から)

入れながら埋めている状況や、西大寺創建期の軒瓦を含むことをふまえると、弥勒金堂の礎石下方の地盤改良を目的とした壺地業であると考えられる。これらの壺地業は、基壇土である青灰色粘質土に覆われており、断層調査によって部分的に確認したに留まる。

検出した壺地業は、暗褐色粘質土上面で一辺3.0～3.6mの隅丸方形を呈する。断面は二段掘り状を呈し、検出面から深さ約50cmまではなだらかに傾斜する。その下は一辺約2.4mの隅丸方形の平面となり、ほぼ垂直に落ち込む(表21模式図)。検出面からの深さは最大1.4m以上あるが、いずれの壺地業でも底面は確認できなかった。

埋土は、暗褐色粘質土と青灰色粘質土のブロックが混ざったものである。厚さ10～50cmの単位で土を積み重ねており、明確な取築はほとんど確認できないが、壺地業Dの上部では厚さ5cm前後の単位で埋めた状況が認められた(図131)。埋土には大ぶりの石や瓦を含むものがあるが、それぞれの壺地業で状況は異なり、次の4種類に分類できる(表21)。

- ①大ぶりの石を疎らに入れる(壺地業A・C)
- ②大ぶりの石を疎らに入れつつ、瓦を面的に敷き込む(壺地業D)
- ③大ぶりの石と瓦を面的に敷き込む(壺地業B)
- ④大ぶりの石や瓦敷きが認められない(壺地業E・F)

このうち壺地業Bでは、石敷面を1層(標高約74.0m、図132)、その下層で瓦敷面を1層確認している(標高約73.9m、図133)。さらにその下では、瓦当面を完全に残す軒丸瓦が出土した(標高約73.6m、図134)。壺地業Dでは石を疎らに入れる層と、部分的な瓦敷面を1層確認しており、東北隅の肩部には、下面に「出」の墨書をもつ石が据えられていた(図128)。

今回は部分的な調査に留めたため、大半が調査区外となる壺地業E・Fは、①～③に分類できる可能性が残る。

**瓦溝 SD1231** 調査区東南部に検出した斜行溝で、幅0.3～1.2m、深さ最大0.4m、長さ約3.5m分を検出した。大量の古代の瓦と近世までの土器・陶磁器を少量含む。礎石採取穴A・Bと重複関係にあり、礎石採取穴Aが埋没した後に掘削され、礎石採取穴Bよりも前に埋められている。

(田中龍一)

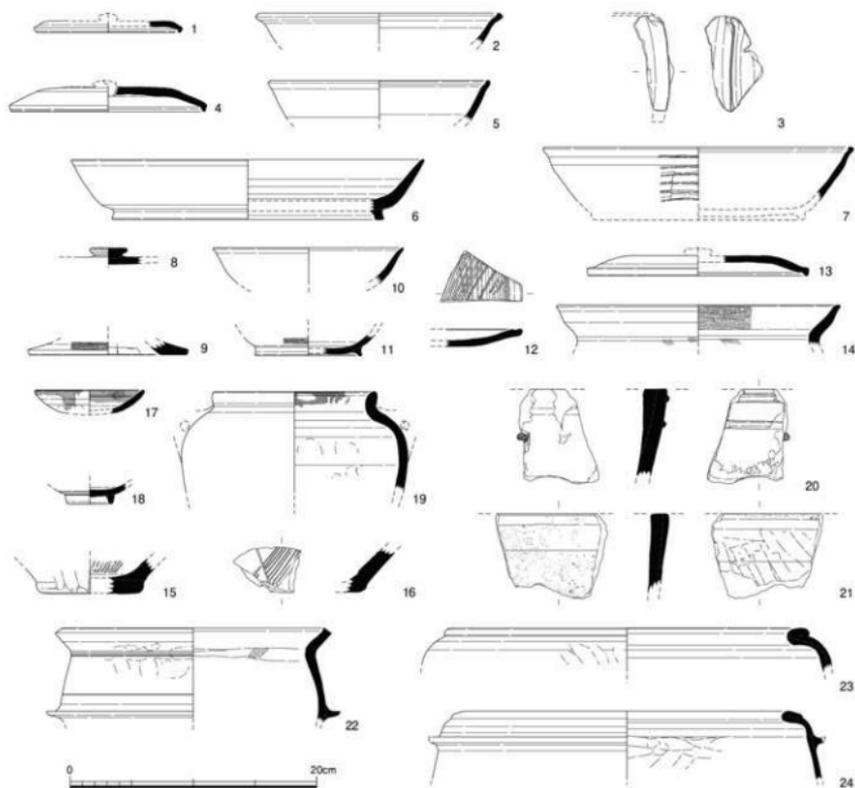


図 135 第 655 次調査出土土器 1 : 4

#### (4) 出土遺物

##### 土器・土製品

第 655 次調査区からは整理用コンテナ 6 箱分の土器・土製品が出土した。奈良時代の須恵器・土師器および近世の土師器・瓦質土器・陶磁器が中心で、古墳時代の埴輪や中世の瓦器片などを少量含む。以下、各遺構・層位出土土器について記述する (図 135)。

**基壇土出土土器・土製品** 基壇土中から出土した土器の量は少なく、小片が多い。1 は須恵器杯 B 蓋。端部を小

さく下方に折り曲げる。2 は須恵器杯 C。口縁端部を肥厚させ、端部外面に平坦面を有する。内面に火押痕跡を有する。3 はミニチュア竈。側面の廂部が残存する。器壁が薄く、赤褐色の色調を呈する。これらの土器は奈良時代中頃～後半に位置づけられる。

**整地土出土土器** 基壇構築以前の整地土である暗褐色粘質土層から出土した土器も量的には少ない。4 は須恵器杯 B 蓋。平坦な頂部から緩やかに口縁部が降る。端部を下方に折り曲げる。5 は須恵器杯 C。口縁端部を肥厚

させ、内面に沈線状の段を有する。外面には重ね焼き痕跡が見られる。6は須恵器皿B。断面四角形の太い高台を貼り付ける。7は土師器杯Bの口縁部と推定した。口縁部を肥厚する。外面に横方向のヘラミガキを施す。内面に暗文は観察できない。このほか近江型とみられる甕Bの把手片も出土した。これらの土器は奈良時代前半から中頃に位置づけられる。

**壺地業 A～F 出土土器** 8～10は壺地業B出土。8は土師器杯蓋。つまみは頂部平坦である。頂部外面に直線的なヘラミガキを密に施す。9は土師器高杯Aの脚部片。端部を平坦にし、内面をヘラケズリする。外面にはヘラミガキを密に施す。10は須恵器杯Aか。口縁部が緩やかに立ち上がり、端部を丸くおさめる。11・12は壺地業D出土。11は土師器壺A底部。器壁が薄く、細い高台を有し、体部が緩やかに立ち上がる。体部外面にヘラミガキを施す。12は須恵器高杯の杯部。内外面にヘラミガキを施す。端部内面に凹線状の段を有する。内面には別の器物を重ねて焼成した痕跡がみられる。13・14は壺地業F出土。13は須恵器杯B蓋。頂部から緩やかに口縁部が降り、端部を下方に折り曲げる。14は土師器甕の口縁部。内湾気味に口縁部が立ち上がり端部に平坦面を有する。内面は横方向のハケメ調整を施す。近江型である。

壺地業出土の土器は奈良時代前半から中頃におさまる。また、供膳具類に加えて土師器高杯Aや壺Aなどがみられる点も特徴的である。

**礎石採取穴 A～F 出土土器** 15は礎石採取穴A出土の瓦質すり鉢。一単位7条の刷り目がある。20は礎石採取穴B出土瓦質火鉢。口縁部上面に平坦面を有し、外面は二条の突帯の間にスタンプで施文する。16・17・21・22は礎石採取穴C出土。17は土師器皿。口縁部内外面にススが付着しており、灯火器として使用されている。22・23は土師器羽釜。22は口頸部がくの字状を呈し、端部を肥厚する。体部に短い突帯を有する。外面全体にススが顕著に付着する。23は口縁部を丸く巻き込む。軟質の焼成である。21は瓦質土器の火鉢。外面に装飾はみられない。16は瓦質土器のすり鉢。18・19は礎石採取穴D出土。18は染付椀。外面に一条の線描がある。19は瓦質土器の羽釜か。肩部外面に剝離痕跡があり、本来把手を有していたと考えられる。軟質の焼成である。

**瓦溝 SD1231 出土土器** 24は土師器羽釜。口縁部を丸

表2 第655次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦		軒平瓦		その他		
型式	種 点数	型式	種 点数	種	点数	
6133	O 3	6732	M 1	丸瓦(施軸?)	2	
	R 1		?	平瓦		
6139	A 1	西268A	1	(刷印西)	4	
6296	A 2	西283A	1	(刷印大)	1	
	HT 1	古代	2	(刷印)	3	
6311	C? 1	鎌倉	1	面戸瓦	9	
	古代	型式不明(奈良)	4	甕斗瓦	5	
	型式不明(奈良)	時代不明	6	甕斗瓦?	1	
	時代不明			甕斗瓦	7	
				用途不明	1	
				道具瓦	1	
				磚(施軸)	2	
軒丸瓦計		15	軒平瓦計	18	その他計	35
丸瓦		平瓦	磚	凝灰岩	レンガ	
重量	234687kg	807.54kg	2.331kg	18.424kg	0	
点数	2509	11,220	9	24	0	

く巻き込む。大土坑から出土する土師器羽釜と型式学的な差はみられない。

礎石採取穴・瓦溝から出土する土器には古代の須恵器・土師器破片も少量見られるが、近世(江戸時代後期)の土器を主体としている。また、各礎石採取穴出土土器に大きな時期差は認められない。弥勒金堂の礎石がこの時期に集中的に抜き取られたことを示唆する。

この他、特殊遺物として製塩土器・転用硯・緑釉陶器・灰釉陶器・灯明皿に転用した土師器が出土した。特に製塩土器は整地土・壺地業からの出土が目立つ。また、整地土・壺地業から円筒埴輪・朝顔埴輪片が出土している。これらは古墳時代後期(川西福年V期)に属し、須恵質焼成のものも含まれる。周辺にこの時期の埴輪を有する古墳が存在していたことを示す可能性がある。(小田裕樹)

#### 瓦磚類

第655次調査で出土した瓦磚類の内訳を表2に示す。古代に属する瓦がほとんどだが、中世以降のものも少量含む(図136～138、PL43)。

**軒丸瓦** 軒丸瓦は計12点出土している。1～3は6133O。IV-1期で西大寺創建よりやや古い時期のもの。平城宮での出土が主であるが、西大寺・西隆寺での出土例も少数ある。1は瓦当裏面を大きく窪ませて、下半外周は突帯状に残す(図138)。壺地業D出土。2は瓦当裏面を浅く窪ませるが、下半外周の突帯はない(図138)。壺地業B出土。3は礎石採取穴C・E埋土上面から掘り

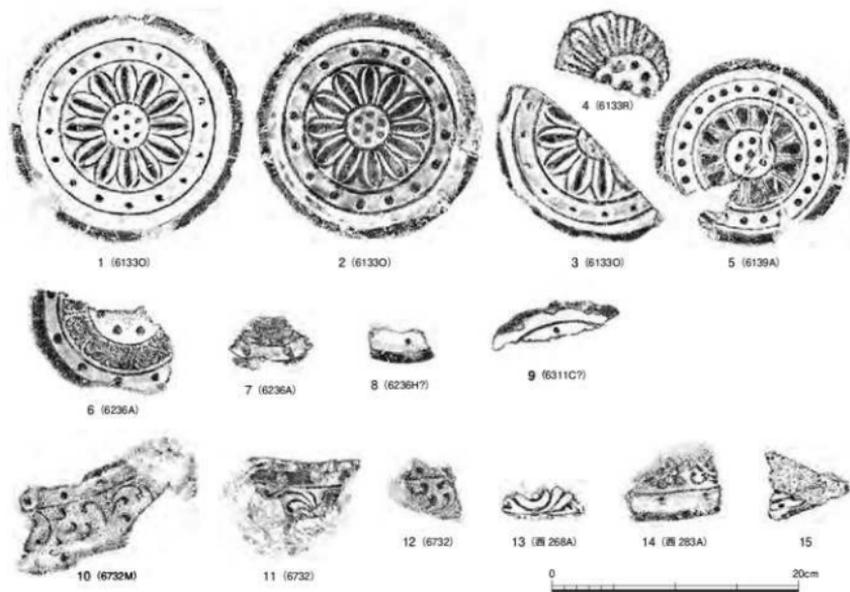


図 136 第 655 次調査出土軒瓦 1 : 4

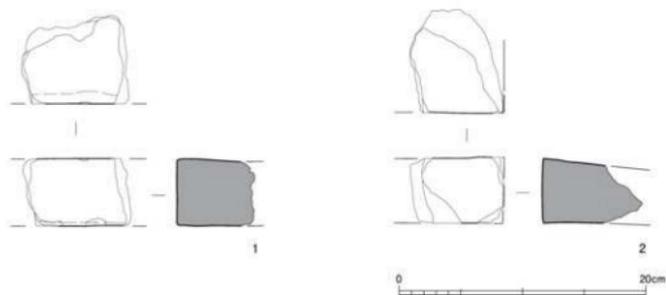


図 137 第 655 次調査出土線粘磚 1 : 4

込まれる小穴から出土。4 は 6133R。西大寺創建期（Ⅱ-2 期）。礎石抜取穴 E 出土。5 は 6139A。西大寺創建期。壺地業 D 出土。6・7 は 6236A。6 は礎石抜取穴 B、7 は礎石抜取穴 E 出土。西大寺創建期。8 は 6236H か。壺地業 C 出土。西大寺創建期。9 は 6311C か。水平方向の

剥離痕跡から積み上げ技法による成形台一本づくりと考えられる。Ⅱ-2 期。壺地業 C 出土。

**軒平瓦** 軒平瓦は 12 点出土している。10 は 6732M。礎石抜取穴 B 出土。西大寺創建期。11・12 は 6732。11 は壺地業 B 出土。12 は基壇土出土。ともに西大寺創建期

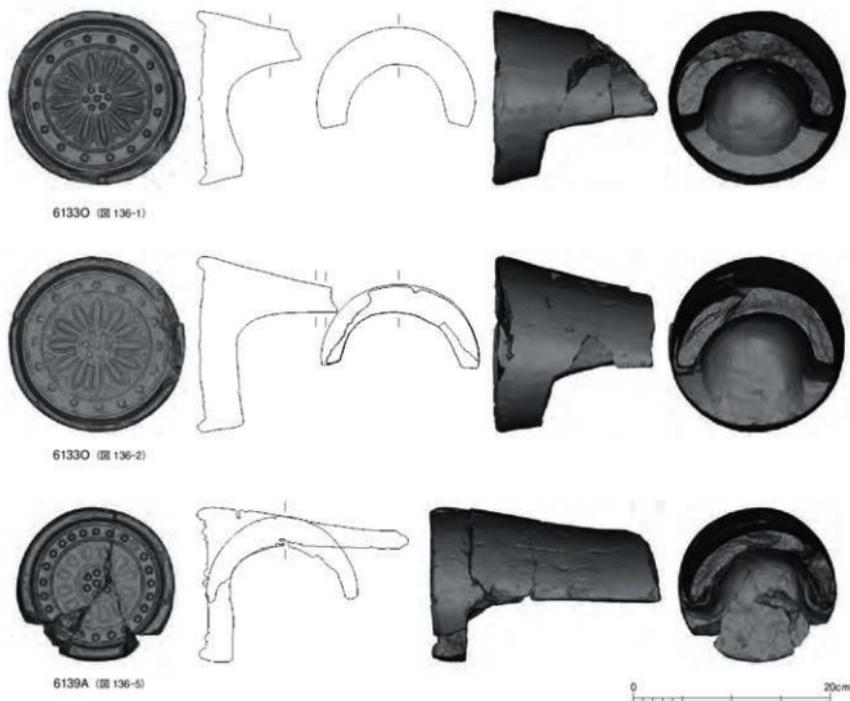


図 138 弥勒金堂 SB1230 壺地業出土軒丸瓦展開図 1 : 5

か。13は西大寺268A。外区・脇区をもたない偏行唐草文。礎石抜取穴C出土。平安時代後期(11世紀後半)。14は西大寺283A。中心に9弁の花文を置く均整唐草文。平安時代前～中期(9～10世紀)か。15は、瓦当面と頸部がわずかに残る。曲線頸Ⅱで頸面が2cmと広い。鎌倉時代。断割調査中に基壇土出土として取り上げたが、礎石抜取穴Cからの混入と考えられる。

**その他の瓦磚類** 緑釉磚が2点出土した(図137)。ともに端面に施軸する。このほか分割裁線を入れた割製斗瓦や、面戸瓦などの道具瓦も出土している。

**各遺構における瓦の出土状況** 礎石抜取穴には、古代の丸・平瓦をはじめ、西大寺創建軒瓦、平安時代の軒瓦や中世の丸瓦・平瓦もごく少量含まれる。弥勒金堂は、平

安時代のうちに倒壊し、食堂が弥勒金堂の役割を果たすようになるため、創建時の場所では再建されなかったと考えられる。これは、近世の礎石抜取穴から出土する瓦の大部分が古代のものであることと整合的である。

壺地業からは、61330、6139A、6732などが出土している。西大寺創建期までの瓦が含まれており、壺地業が弥勒金堂造営期のものであることを追認する。

整地土からは、軒瓦はないものの少量の丸・平瓦が出土している。西大寺創建期のもとは明確に認められるものはないが、凹面から端面に布目が連続する平瓦片が含まれており、奈良時代の瓦と考えられる。

なお、基壇土と壺地業の出土瓦は、弥勒金堂の木部(軸部)の造営前に廃棄されたものであり、これらの瓦から



(139)・(40)・8 081

打ち(刻書)

図 139 第 655 次調査出土木簡

弥勒金堂所用瓦を特定することは困難である。

#### 木器・石器・金属器

木器(バット 28箱)、石器・冶金関連遺物(バット 3箱)、木炭・種子等(バット 4箱)が出土した。整地土から多くの木屑が出土している。現在整理作業中であり、来年度以降に報告予定である。(田中)

#### 木簡

木簡は、礎石採取穴 A から 1 点出土した(図 139)。上端は右半削り(一部腐食\*)で左半折れ、下端折れ、左辺割れ、右辺削り(一部腐食)。上端付近に穿孔の痕跡が 2 箇所あり、「打ち」と刻書される。近世以降に属するとみられるが、性格未詳。(山本祥隆)

## 4 調査の総括

### (1) 弥勒金堂基壇の構築順序とその構造

本調査では、はじめて弥勒金堂の遺構を確認し、その構造に関する知見を得た。調査成果をもとに弥勒金堂の基壇・壺地業の構築順序を復元すると、以下のようになる。

①整地 西大寺造営前に整地(暗褐色粘質土)をおこなう。壺地業施工の前段階では、整地土上面はゆるやかな南下がりの地形であった。

②壺地業 礎石の据え付け予定位置に穴を掘り、石や

瓦を入れながら埋め戻す(壺地業)。穴ごとに石や瓦の入れ方はかなり異なる状況呈する。壺地業の埋土は、整地土および基壇土と同様の青灰色粘質土が混ざったものである。

③基壇 壺地業の施工後、基壇土を積む。本調査では、礎石採取穴のみを検出し、礎石据付穴は確認できなかったことから、礎石は基壇土を積む過程で据え付けたと推定される。

④弥勒金堂基壇の構造 弥勒金堂では基壇の構築前に壺地業をおこなっていることがあきらかとなった。礎石の据え付け予定位置のみを掘削して地盤強化を図るという工法自体は西大寺の他の堂宇と共通する技術といえるものの、その構築順序や構造を比較すると、弥勒金堂の特徴が指摘できる。

西大寺では、薬師金堂や金堂院回廊、食堂院の調査において基壇土の上面から掘り込む礎石据付穴を検出し、凝灰岩の板石や大ぶりの石を入れた状況を確認している。これらも壺地業の一種であると評価でき<sup>3)</sup>、基壇構築後に礎石据え付けと一連でおこなわれた壺地業といえる。一方で、弥勒金堂の場合は基壇構築前に壺地業をおこなっており、壺地業→基壇構築+礎石据え付けという構築順序が想定できる。壺地業が基壇の構築前におこなわれ、基壇構築過程で礎石を据え付ける点で、西大寺の他の堂宇とは異なる。

なお、本調査において基壇上面で検出した土坑は、規模や配置から礎石採取穴と考えた。一方で、隅丸方形の平面形状を呈するものもあることから、薬師金堂の調査で確認したような礎石下に据えられた長方形の板石(「紀要 2008」)の採取穴に相当する可能性も想定する必要がある。本調査は部分的な調査に留まり、抜き取られた礎石に関わる情報が限られることから、今後の検討課題としたい。

### (2) 弥勒金堂の復元案

今回検出した礎石採取穴・壺地業の位置と「紀要 2014」における弥勒金堂の推定柱位置を比べると、東西方向はほぼ一致するものの、南北方向は若干の相違があり、想定よりも 1m ほど北にずれている。

本調査では礎石採取穴・壺地業をそれぞれ 6 基検出したが、全体規模が把握できたものではなく、一部で東西もしくは南北の規模が判明したにとどまる。このように、

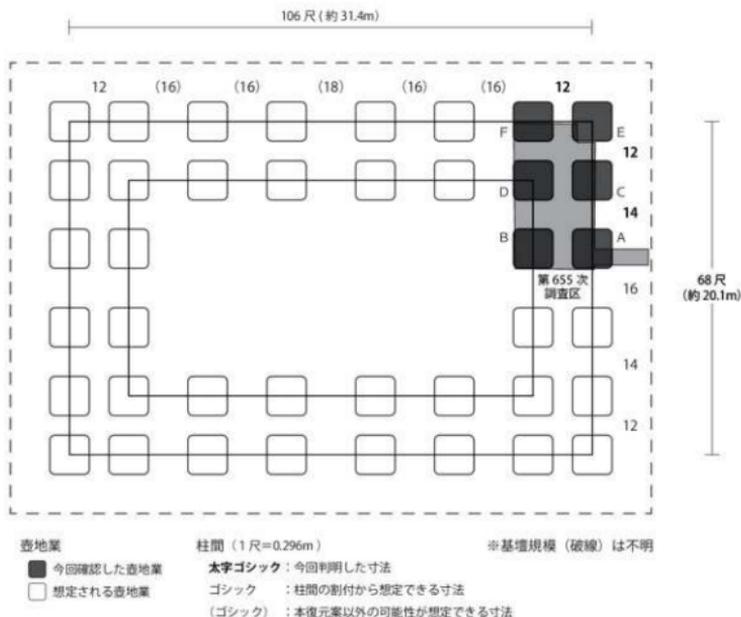


図 140 弥勒金堂復元案 1 : 300 (単位: 尺)

得られたデータには限界があるものの、今回の調査成果 (特に竈地業) を基に、弥勒金堂の復元を試みる。

①弥勒金堂基壇の位置 今回の調査では基壇縁が確認できなかったものの、「紀要 2014」において、本調査区の北東を通るクランク状の道路が弥勒金堂基壇の東北隅にあたる可能性が示されていた。今回の検討にあたり、既往の研究ではあまり参照されてこなかった航空写真 (1955 年撮影) を見ると (PL.44) <sup>6)</sup>、道路だけでなく地割として弥勒金堂の基壇痕跡が残っていたことが確認できた。これは想定される基壇規模ともほぼ一致しており、礎石抜取穴 E・竈地業 E の位置が廂の隅柱にあたる可能性が高い。

②竈地業の平面規模 (表 21) 竈地業の上部が傾斜しているため、検出面で確認した規模よりも垂直に掘り込まれる下半部のほうが、竈地業施工時の本来の規模を反映

している可能性が高い (表 21 模式図)。地業の南北規模がわかるものは竈地業 C・D、東西規模がわかるものは竈地業 A のみであり、それぞれの規模は、一辺約 2.4m (8 尺) である。今回は、竈地業 A～F がいずれも 8 尺四方で計画されたと仮定する。

③竈地業の心々間距離 竈地業 C-D の心々間距離は約 3.6m (12 尺) であり、竈地業 A-B・E-F 間もこれに矛盾しない。一方、竈地業 A-C・B-D の心々間距離は約 4.2m (14 尺) である。

④弥勒金堂の柱配置 弥勒金堂の規模は、資財帳から、桁行方向は 106 尺 (長十丈六尺)、梁行方向は 68 尺 (広六丈八尺) であることがわかる。薬師金堂の調査成果から、この規模は柱間の総長であると考えられる。

「紀要 2014」では、条坊と東西両塔の中軸の延長線上に弥勒金堂の中軸をあわせて推定復元しているが、今回

検出した礎石採取穴・壺地業のA・C・Eの位置は、推定された弥勒金堂の東端の柱位置とみて矛盾しない。

そこで、壺地業の心々間距離を柱間寸法とみて、柱配置を検討する。梁行方向の柱間は、端間が桁行方向と同様に12尺と仮定して12尺+14尺=26尺となる。これを北から2間分とし、南から2間分も同様の柱間と想定すると、残る1間は、68尺-(12尺+14尺)×2=16尺となる。このことから梁行方向の柱間は、中央間が16尺、脇間が14尺、端間(廂)が12尺となる。この検討結果は、①で指摘した礎石採取穴・壺地業Eが廂の隅柱にあたることも整合する。

③の検討から、桁行の端間は12尺であることがわかり、残る5間の総長は106尺-12尺×2=82尺となるが、その割り付けはいくつかの可能性が考えられる。今回は、中央間1間を18間とし、残り4間をそれぞれ16間で割り付けた。以上の検討を基に作成した弥勒金堂の復元案が図140である。

### (3) まとめ

本調査の成果をまとめると、次の通りである。

①**弥勒金堂の基壇・壺地業を確認した** 弥勒金堂はこれまで未調査であり、遺構の残存状況が不明であった。本調査の結果、礎石は抜き取られていた一方で、基壇土や壺地業が良好な状態で遺存していることが判明した。また、壺地業を施工した後に基壇を構築するという特徴的な工法を採用したことがあきらかとなった。

②**近世(以降)に礎石が抜き取られたことを確認した** 基壇上面で礎石採取穴とみられる大土坑を検出した。出土遺物から、抜き取られた時期が近世(以降)に降ることが判明した。なお、元禄11年(1698)に描かれた「西大寺現存堂舎絵図」(東京大学文学部蔵)には、「弥勒金堂跡」の文字と礎石の描写が認められる。本絵図の信ぴょう性については疑問が呈されているが<sup>7)</sup>、本調査の所見から見ると、本絵図の作製時点では弥勒金堂の礎石が遺存していたとみても矛盾はない。

③**弥勒金堂の柱配置の再検討をおこなった** 今回検出した礎石採取穴・壺地業と既往の復元案における弥勒金堂の推定柱位置を比較すると、想定よりも北側にずれていることが判明した。壺地業のプランの検討を通して柱配置を再考し、新たな復元案を提示した。一方で、弥勒金堂全体の柱配置や北面回廊との接続関係については、

データの不足もあり、課題が残る結果となった。今後の周辺の調査に期待したい。

西大寺旧境内では、金堂院にとどまらず再開発が進みつつあるが、多くの場所で創建期の遺構が良好な状態で確認されている。今後、地域住民への周知活動などを通してそれらの遺跡がもつ魅力を広め、その価値についても理解を深めることで、適切な保存・活用が講じられるよう最善を尽くしたい。

(田中)

### 註

- 1) 奈良市教育委員会「25.平成14～17年度実施試掘調査一覧」[奈良市埋蔵文化財調査年報平成17(2005)年度]2008。
- 2) 奈良市教育委員会「奈良市埋蔵文化財調査概要報告書」昭和63年度、1989。
- 3) 旧平城No.14は2019年度に滅失。
- 4) 土壌サンプルの分析成果については、次年度以降に改めて報告する。
- 5) 青木敬「四分寺造営の土木技術と堂塔-相模・武蔵国分寺の堂塔造営順序の復元をめぐって-」[國學院雑誌]國學院大學、第123巻第4号、2022。
- 6) 岩波書店「奈良六大大寺大観」第14巻、1973。この中で示された境内地図(11頁)は昭和38年(1963)撮影の空中写真をもとにしており、「紀要2014」図Ⅲ-35・36も同時期の空中写真から作図した地図を用いている。この頃には、今回の調査地とその南隣接地には、すでに民家が建てられている様子が窺える。  
一方、大岡実・浅野清「西大寺東西両塔」[日本建築学会論文報告集]54、1956掲載の空中写真(第1図、782頁)では、まだ民家はなく、弥勒金堂推定地全体が田んぼの状態である。PL44で使用した空中写真は、奈文研が1955年に撮影したものであるが、西大寺東西両塔の発掘調査には奈文研が大きく関わっていたことをふまえると、当該論文の空中写真と同一の可能性が高い。
- 7) 「平城京東京一条北辺四坊六坪発掘調査報告」1984。